Ⅲ　専修のプロフィール

はじめに

現在の文学部は、32 の専修（かつての「専攻」に相当する研究教育上の基本単位）から構成され、それらは学部学生の所属単位としては 1996 年の大学院重点化以来、哲学基礎文化学系、東洋文化学系、西洋文化学系、歴史基礎文化学系、行動・環境文化学系、基礎現代文化学系という 6 つの「系」に編成されている。学部学生は 2 回生進級時に系に分属し、3 回生進級時に専修に分属する。他方、大学院文学研究科では英語学英文学専修とアメリカ文学専修は英語学英米文学専修に統合されており、合計 31 の専修が文献文化学専攻、思想文化学専攻、歴史文化学専攻、行動文化学専攻、現代文化学専攻の 5 専攻に分かれた形になっているが、実際の運営上は文献文化学専攻を東洋文献文化学系と西洋文献文化学系に 2 分したうえで 6 つの系が実質的なまとまりとなっている（下図を参照）。以下での各専修の歴史と現状の紹介は、大学院における系の配列にしたがって行われるが、英語学英文学専修とアメリカ文学専修は学部レヴェルの編成に合わせて別個に扱っている。

大学院の組織			対応する学部の系
専　攻	系	専　修	
文献文化学専攻	東洋文献文化学系	国語学国文学、中国語学中国文学、中国哲学史、インド古典学、仏教学	東洋文化学系
	西洋文献文化学系	西洋古典学、スラブ語学スラブ文学、ドイツ語学ドイツ文学、英語学英米文学、フランス語学フランス文学、イタリア語学イタリア文学	西洋文化学系
思想文化学専攻	思想文化学系	哲学、西洋哲学史、日本哲学史、倫理学、宗教学、キリスト教学、美学美術史学	哲学基礎文化学系
歴史文化学専攻	歴史文化学系	日本史学、東洋史学、西南アジア史学、西洋史学、考古学	歴史基礎文化学系
行動文化学専攻	行動文化学系	心理学、言語学、社会学、地理学	行動・環境文化学系
現代文化学専攻	現代文化学系	現代史学、科学哲学科学史、情報・史料学、二十世紀学	基礎現代文化学系

東洋文献文化学系
国語学国文学専修

本専修は、1908 年、一講座二専攻（国語学専攻と国文学専攻）で開設された。当初、教授待遇講師として幸田成行、助教授として吉沢義則が任ぜられたが、幸田講師は一年で退職し、藤井乙男が赴任、1911 年、教授に就任した。1919 年の講座増設により、第一講座は藤井が、第二講座は吉沢が教授に昇任して担任した。

以後、第一講座は、＜藤井乙男－沢瀉久孝－野間光辰－佐竹昭広－日野龍夫－大谷雅夫＞、第二講座は＜吉沢義則－遠藤嘉基－浜田敦－安田章－木田章義＞と続く。1995 年に文学部の大学院重点化により、大講座化されて、第一講座と第二講座の別が廃されると同時に講座は専修と名を変えた。国語学（教授 1、助教授 1）、国文学（教授 1, 助教授 1）の体制には変化がない。が、助手が居なくなり、教室は大学院生の協力により、かろうじて運営されている。

○第一講座（国文学）

藤井は、古代・中世文学の研究に比して学問としての認知が遅れていた近世文学を専門とし、浄瑠璃・小説・俳諧など広い分野の研究を通じて、黎明期の近世文学研究の基礎を築いた。諺などの近世語に対する著書もあり、俳人としても著名であった。特に芭蕉研究会会長として、俳諧研究に寄与するところが大きかった。

寿岳章子氏寄贈の抄物は「寿岳文庫」として纏めて貴重書となっている。写真はその中の一つ『六物図抄』。

藤井のもとにあった穎原（えばら）退蔵は、病を得て、藤井退官に際して退職し、1948 年、復職したが、病が再発、同年逝去（逝去の日、教授に昇任）。穎原も近世文学を専門とし、俳諧や小説の研究に多くの業績を残した。若くして逝去したが、後に『穎原退蔵著作集』全 20 巻が編纂された。穎原の旧蔵書は穎原文庫として文学部図書館に所蔵される。

沢瀉は上代文学を専門とし、特に万葉集の研究に力を注いだ。退官後も万葉学会を主宰し、多くの人材を育てた。万葉学会は今も万葉集研究の中心となっている。同教授が 1968 年に完成した『万葉集注釈』20 巻は、今も万葉集研究の基本図書となっている。

野間は、近世文学、特に西鶴の研究を中心とし、『刪補西鶴年譜考証』などに見られる峻厳ともいうべき実証的な学風で聞こえた。1946 年、日本近世文学会の創設に参画し、以後近世文学研究界全体の指導的地位にあった。終生、和服姿で通し、粋な文人的雰囲気を持つ最後の学者でもあった。

佐竹の業績は、万葉集を中心に、広く上代文学、中世文学、近世文学に及び、意味論的方法を自在に駆使した独自の学風によって、国文学研究全般に数々の創見をもたらした。また、「京都大学国語国文資料叢書」第一期（53 冊）の編集刊行を主導した。退官後は、国文学研究資料館々長として国内外の国文学研究を支えた。1994 年、多年にわたって国文学研究の進展に尽くした功績により、紫綬褒章を授与された。

日野は、上田秋成や本居宣長を通して、近世における文学史と思想史を結びつける研究を行い、国文学研究の新しい地平を開いた。服部南郭の研究を大成させ、また従来省みられることの少なかった近世の漢詩を、一つの分野として確立させた。多くの近世漢詩・漢文の研究者を育て、日野の薫陶を受けた研究者が活躍している。また「京都大学蔵大惣本稀書集成」（18 冊）の編集刊行を通じて、近世文学の人材も育てた。

大谷は、上代文学、日本漢文学、近世文学を専門とする。上代から平安時代の間の国文学と中国文学の関わりを中心に研究を行い、国文学の流れの中に伏在する中国文学に影響された表現を明らかにした。新しい視点による国文学史を作りつつある。佐竹を中心にした万葉集の注釈作業にも参画し、万葉集の注釈にも新風を送った。日野の研究の後を継ぎ、近世漢詩文、伊藤仁斎の研究も継続している。

○第二講座（国語学）

吉沢は、文法・文章・文体をはじめとして、歌語や片仮名の歴史などに至るまで、幅広い分野の業績を残している。明治末年、訓点資料の価値を見出し、訓点語・訓点資料研究の基礎を築いた。吉沢の源氏物語注釈は吉沢源氏と称され、今もなお源氏物語研究の基本文献として扱われている。また流麗な仮名文字に秀でた書家としても名声が高かった。

遠藤は国語史・中古文学を専門とし、特に吉沢が開拓した訓点資料の研究に力を注いで、訓点語学会を主宰し、多くの人材を育てた。この学会は現在も国語史研究の強力な母胎となっている。中世の抄物資料にも注意を向け、その目録を作り、抄物研究の重要性を学界に知らしめた。また、国語教育についても強い関心を抱き、その方面の著述も多い。

浜田は、音韻の歴史を扱うことが多かったが、上代から中世に至る国語史を専門としていた。特に朝鮮資料をはじめとする外国資料が国語史研究に有用であることを種々の点から論じた。また、資料は公開すべきものとの信念に基づき、多くの国語史資料を公刊し、学界への提供を続けた。私費を投じた刊行物だけでも、捷解新語、倭語類解、重刊改修捷解新語、日本風土記、落葉集、伊曽保物語など 20 冊を超える。

安田は、中世を中心に、国語の歴史を文化の背景の中でとらえ、中世の辞書や和漢聯句・漢和聯句などの文化面の研究にも一つの世界を開いた。またポルトガル語や朝鮮語などの資料を駆使して、浜田教授の提唱した外国資料による国語史研究を更に深め、一つの分野として確立させた。パリ大学所蔵の稀覯本、改修本捷解新語を私費を投じて出版した。戦前から続いていた時代別国語大辞典（小学館）の室町時代語編の完成に力を尽くした。

「国文屏風」土田衛氏より寄贈の屏風。藤井乙男、吉沢義則、沢瀉久孝、野間光辰等国文学の先賢の手蹟が貼り込まれている。

木田は、室町以前の国語の音韻史・文法史を研究している。建仁寺両足院の抄物調査を初めとする寺院の調査や資料の影印刊行を通じて、若手研究者の養成に重点をおいている。満州語口語、ウイルグル語、モンゴル語などのアルタイ類型語と日本語の共通文法作成にも力を注いでいる。

旧教養部（現総合人間学部）の教官も、本講座の発展には重要な役割を果たした。池上禎造（国語学）、阪倉篤義（国語学）、渡辺実（国語学）、浜田啓介（近世文学）、川端善明（国語学）、内田賢徳（国語学）、島崎健（中古文学）、須田千里（近代文学）、また留学生センターの森真理子（近世文学）が授業を担当し、多くの人材を育てた。

（木田章義記）

中国語学中国文学専修

1906年の文科大学開設とともに設けられた「支那語学・支那文学」講座は、狩野直喜（1868－1947）教授ひとりで始められたが、1908年には鈴木虎雄（1878－1963）助教授が着任（1919年教授）、以後、大正を経て昭和に至るまで両者を中心に営まれた。従来この領域には哲学・史学・文学の区別がなく「漢学」としてまとめられていたのだが、創設の当初から文学を独立させたこと、また文学と語学とを組み合わせたところに特徴がある。これは漢学を近代的な研究として捉えなおし、その後の区分を先取りするものであった。狩野は伝統的な漢学の広い視野に基づきながらも、新しい領域を切り開き、世に出て間もない燉煌の文物資料、また従来等閑視されていた戯曲・小説など俗文学にも先鞭をつけた。鈴木は主に古典文学の領域において中国の詩、文学論に多くの業績をのこした。『玉臺新詠』、杜甫、李賀の全訳注は今日でも活用されている。『支那詩論史』は中国の文学論に着目した最も早い研究としていち早く中国で翻訳され、広く流布した。

1938年に青木正児（1887－1964）、1939年に倉石武四郎（1897－1975）がそれぞれ第一講座、第二講座の教授に就任し、文学・語学を分けて担当した時期が戦後まで続いた。青木は戯曲研究において『支那近世戯曲史』（1930）によって中国人を驚かしたのみならず、絵画、音楽にも造詣深く、明清の芸術や文人に新たな光を投じた。つとに雑誌『支那学』を創刊し（1920）、中国の新文学をいち早く日本に紹介したことも特筆されなければならない。

倉石は清朝の小学を発展させた語学研究、目録学など、伝統的な学を継承する一方で、中国現代文学を教科に加えたことは、伝統の枠を破って中国文学の領域を一気に拡大したものであった。また、従来の訓読による読解を棄てて古典詩文も音読するという倉石の提起した方法は、のちに当然のこととして拡がっていく最初の試みであった。倉石はのちに東京大学に移った。

戦後、1947年に吉川幸次郎（1904－1980）が第一講座の、1950年に小川環樹（1910－1993）が第二講座の教授に就任して、以後、吉川・小川時代が続いた。1950年には講座の名も「中国語学中国文学」と改められ、伝統に基づきつつも時代に応じた新たな学風が築き上げられていった。

吉川は『尚書正義』に代表される経学から、『元雑劇研究』に代表される俗文学まで幅広い領域に渡り、その集成である『吉川幸次郎全集』全二十七巻は時代も古代から近現代にまで及び全体が中国文学史を成しているともいえる。清朝の学を受け継いでことばに密着しながら作品を分析していく方法は、西欧における文学研究の方法論とも通じるところがあり、古典文学研究に画期をもたらした。吉川はまた達意の文章によって一般の読書界からも歓迎され、中国古典が後退していく戦後の日本の文化全体に大きな影響を及ぼした。

小川は『中国語学研究』の著書に代表される音韻史をはじめとする語学方面の業績とともに、文学においても古典詩文から小説まで広大な領域を網羅している。そこには語学研究と文学研究との希有な融合による達成がうかがわれよう。

吉川・小川が編んだ『中国詩人選集』はその門下の若い研究者一人ひとりが一人の詩人を受け持って訳注を施すという画期的なもので、それによって多くの人材を育てたのみならず、江湖の歓迎を受けて現在に至るまで版を重ねている。

1954年には両教授の編集によって『中国文学報』が創刊された。今でこそ各大学の中国文学研究室はいずれも雑誌を刊行しているが、これはその最も早いものであり、ここに掲載された斬新な論考が戦後の中国文学研究に果たした役割は大きい。以後、この雑誌はほぼ年二回発行を続け、現在は七十冊（2006年3月現在）を数えるに至っている。

1967 年の吉川退官のあとをうけて、高橋和巳（1931－1971）が助教授に就任した。高橋は当時、長編小説を続々と発表していた著名な作家であるとともに、六朝文学研究者としても力量を発揮しており、研究と創作の結合は新たなかたちの文学者を期待させたが、不幸にして病を得て 1970 年、辞任した。その後第一講座教授には入矢義高（1910－1998）が着任した。入矢は口語史の研究で知られ、ことにその禅語録の精密な読解は禅研究に画期をもたらした。俗文学への造詣も深く、その精緻な訳注は他の追随を許さない。

清水茂（1925－）は 1959 年に助教授、1974 年に第二講座教授となり、語学、文学両面にわたる該博な学識を駆使して久しく研究、教育を行った。翻訳の面でも、吉川の『水滸伝』を完成させた。また清水による韓愈の全散文の訳は日本で初めて公刊されたものである。

興膳宏（1936－）は 1974 年助教授に、1982 年第一講座教授に昇任した。中国の文学論、六朝文学の領域において学界の先頭に立ち、その分野の研究を飛躍的に発展させた。二十代の時の『文心雕龍』、在任中の『文鏡秘府論』など、文学論に関する重要な書物の訳注は、その翻訳における貢献である。興膳は Collège de France の連続講義に招かれたようにフランス語にも堪能で、欧米の学界との連携も強めた。

1976 年から 84 年まで小南一郎が助教授の任にあり、87 年には川合康三が、89 年には平田昌司が助教授として来任し、川合は 95 年に、平田は 2000 年に教授に昇任してそれぞれ中国の文学、語学を講じている。98 年には中国語学を専門とする木津祐子が助教授として来任した。2000 年に興膳が退官して以後はこの三人によって運営されている。

研究室での大学院演習（2003 年）

中国の国情の変化に応じて、国際交流がはなはだ活発になったのが近年の際立った特徴である。短期の訪問から長期の共同研究者に至るまで、ほとんど常時、外国の学者が滞在している。文学研究科に客員教授が設けられてからは、蒋寅、張伯偉、François Martin、William Nienhauser の諸氏がそれぞれ数ヶ月から一年、講義を担当した。政府交換留学生の制度が始まってからは、大学院生のほとんどが在学中に中国に留学する機会を得ている。また中国、台湾、韓国などからの留学生も常に在籍している。この百年、中国の政治情勢のめまぐるしい変化は、この講座にまで影響を及ぼさずにはおかなかったが、現在は恵まれた交流関係が実現しており、それは今後一層活発になっていくであろう。

（川合康三記）

中国哲学史専修

本講座は、1909年に哲学哲学史第3講座（支那哲学史）として開設され、その後哲学哲学史第6講座（中国哲学史）となったが、1996年の大学院重点化に伴う大学院への移行により、現在では、東洋古典学講座の一つとして、大学院は文献文化学専攻中国哲学史専修、学部は東洋文化学系中国哲学史専修となっている。

講座の開設は1909年であるが、先だって開設された中国文学科の教授狩野直喜（1868－1947）によって中国哲学史関連の講義は既に行われていた。そして、1907年に高瀬武次郎（1868－1950）が助教授として着任、翌々年に講座開設となる。

狩野は清朝考証学の手法と精神を体現した存在であり、その後の日本の中国哲学史研究の礎を築いた人物である。その学問は、文学哲学両分野に渉って広くかつ深い。狩野は1928年に退官、のち1929年に東方文化学院京都研究所（現在の人文科学研究所の前身のひとつ）の初代所長となり、いまもその銅像が人文科学研究所分館中庭に立ち、象徴的存在として東洋学研究者を見守っている。（狩野については中国文学科の項を参照。）なお高瀬は1915年に教授となっている。高瀬は宋明学を専門とし、二程、朱陸、劉宗周などを講じた。高瀬は1929年に退官、そのあとを継いだのは小島祐馬（1881－1966）である。

小島は1922年に助教授就任、その学問の特徴は中国哲学の社会科学的考察にある。没後に刊行された『中国の社会思想』にそれを見ることができるが、なお主著とみなしてよかろう『古代支那研究』には、経学者としての小島の精髄が見てとれる。小島は演習においても、日知録、周禮注疏、翁注困学紀聞などを扱い、学生の読書の訓練として経書の注疏や考証学の書物を使うという伝統は、現在に至るまで脈々と続いている。小島は1931年に教授となり、1939年、人文科学研究所（現在の人文科学研究所の前身のひとつ）の初代所長を兼任、1941年に退官している。なお小島は、1949年に日本学士院会員に推されている。

小島を継いだのは、その門下生の一人、重澤俊郎（1906－90）である。重澤は1942年に第三高等学校から助教授として着任、その学問の精髄は、春秋学を中心とした経学にある。厳密な原典解釈と綿密な行論による諸論文は、日本の経学研究におけるひとつの到達点として、現在でもその輝きを失っていない。『周漢思想研究』、『原始儒家思想と経学』などの著作を発表したのち、1950年に教授に昇任、1970年に退官した。なお、思想史全体を唯心論と唯物論との対立の歴史としてとらえようとする『中国哲学史研究』は、重澤の戦後の研究の特徴を端的に示す著作となっている。

重澤を引き継ぐのは、その初期の学生である湯浅幸孫（1917－2003）と、後半期の学生である日原利國（1927－84）である。

湯浅は、1961年、山口大学より助教授として着任、1970年に教授昇任、1981年に退官している。湯浅は経学に関する深い理解にとどまらず、白話や社会制度といった方面にも明るく、筆記小説や白話文学などの幅広い漢籍にも精通し、主に社会思想史的な研究を中心に、多彩な業績がものされた。それらは『中国倫理思想の研究』にまとめられている。湯浅も演習には清朝考証学の著作を選び、学生には緻密な読書を要求し、安易な哲学的議論を厳しく戒めた。中国古典の精密な読解が自ずと清新な研究を生み出す、という当研究室の基本的な発想によるものであるが、その門下からは、それまでにこの研究室が生み出してきた研究者の主な研究分野、即ち所謂経学や宋明学、諸子学といった分野にとどまらず、仏教、道教、史学思想、天文律暦、数学、医学、農学、藝術など、幅広い分野にかかわる「思想」の研究者が輩出した。これは、厳しい本読みを基礎にして、中国の思想文化史を再考、再構築するという傾向をもつ

ものとして一つの流れを作っていく。

ついで 1983 年、大阪大学より教授として着任した日原は、『春秋公羊伝の研究』により、つとに経学者として著明であり、塩鉄論、白虎通など、漢代思想についても後世まで影響力を持ち続ける論文を送り出していた。しかしながら、不幸なことに着任の翌 1984 年、病没した。これは、研究室にとっても、日本の中国学界にとっても、誠に痛恨きわまりない出来事であったと言わねばなるまい。なお、その著作については『春秋繁露』『春秋公羊伝』がともに抄訳ながら、日原の学識のにじみ出る名作として残されており、さらに『宣和書譜』の訳注など、書道にも造詣が深かった。遺稿集として『漢代思想の研究』がある。なお、日原が日頃よく口にし、その編になる『中国思想辞典』のまえがきにも見える「かっちりした」ものを、という言葉は、精密な読解に加えて、日原が公羊伝の研究で見せた精緻な構成力を鍛え、備えるべし、という遺訓として研究室に受け継がれていく。

その後 1988 年、内山俊彦（1933－）が、山口大学より教授として着任した。内山は先秦より漢魏六朝の思想史を主な研究領域とし、自然観、歴史意識を中心的なテーマとして、経学、諸子を広く見渡しつつ、その時代の思想史を構築する研究を続けている。そのうち、自然観に関わるものは、『中国古代思想史における自然認識』としてまとめられている。また、現在も荀子研究者のみならず、思想史学徒の必読書である『荀子－古代思想家の肖像－』も特記すべきものである。内山の学問の特徴は、この書物に端的に見られるような緻密な思想分析にあるが、出土文献に関する論文、あるいは王安石や葉適に関する論文があり、さらに演習において墨子や王陽明を取り上げるなど、小島、湯浅に見られた社会思想史的視点を含めた学識と論点の幅広さについても、その特徴としてあげることができよう。なお、内山は 1997 年に退官した。

上段左より『東洋文化の問題』『東洋の文化と社会』『中国の文化と社会』　下段『中国思想史研究』（左・湯浅幸孫教授退官記念論集、右・内山俊彦教授退官記念論集）

現在教授の池田秀三は、1980 年、人文科学研究所助手より助教授として昇任、1997 年に教授に昇任した。その主たる専攻分野は漢代儒学であり、経学を思想史として把握することを課題としている。

現在助教授の宇佐美文理は、2003 年、人文科学研究所より配置換えとなった。主たる専攻分野は、中国藝術理論史である。

また、大学院重点化後は、人文科学研究所との協力講座のシステムが始まっており、2005 年度は、麥谷邦夫教授（中国道教史）、武田時昌教授（中国科学史）、船山徹助教授（中国仏教史）が参加している。

なお、当研究室に関わる学術雑誌には、『支那学』（1920－1947）、『東洋文化の問題』（1949）、『東洋（後、中国と改題）の文化と社会』（1950－1968）があり、現在は、1977 年にはじまる『中国思想史研究』が、27 号まで刊行されている。

（宇佐美文理記）

インド古典学専修

インド古典学専修は、2004 年の京都大学の国立大学法人化を機に、従来あったインド哲学史専修とサンスクリット語学サンスクリット文学専修を統合して開設されたものである。両専修の講座としての歴史は古く、「印度哲学史」講座は、1906 年に京都帝国大学の文科大学が開設されたのと同時に設置され、一方の「梵語学梵文学」講座は、日本で唯一のサンスクリット専門の単独講座として、1910 年に開設されている。

このふたつの講座は、それぞれ哲学と語学・文学という異なった学問領域を対象とするように見えるが、その実、18 世紀末ヨーロッパに誕生し 19 世紀を通じて大きく発展した「インド学」（Indology）を、共通のディシプリンとするものであって、共にサンスクリット文献学を学問の基盤とする点で、当初より親密な関係をもって京都大学における研究・教育活動を行ってきたものである。インド古典学専修としての統合は、京都大学における「インド学」の一層の発展を目指し、サンスクリット研究の世界的拠点として強固な基盤を築くためのものであった。

サンスクリットは、厳密には紀元前数世紀に規範化された古代インド・アーリア語を意味するが、インド古典学専修では、この言語で著された文献と並んで、時代的にサンスクリットに先行するヴェーダ語、サンスクリットの俗語形である「中期インド」諸語、一部の仏教文献に見られる仏教梵語、叙事詩に特有の叙事詩サンスクリットなど、古代のインド・アーリア系言語で編纂された膨大な量の文献を研究の対象としている。また、サンスクリット文献と密接な関係をもつ古代イラン語文献やタミル語の古典文献も扱われることがある。

昔ながらのつぼ作り。アーメダバードにて。サンスクリット文献にはつぼ作りがしばしば登場する。

京都大学における、インド古典学専修の役割は、世界的な学問連携の中で、過去のサンスクリット学の研究成果を継承しつつ、古代インドの言語、文学、哲学、宗教、文化史等の研究を行い、その成果を発展させつつ、次世代に引き継ぐことにある。

現在の専修の教育と研究の組織は、1986 年にインド哲学史の助教授に就任し、1991 年に教授に昇任、2001 年からはサンスクリット語学サンスクリット文学の教授に転任した徳永宗雄、2001 年にインド哲学史の教授に就任した赤松明彦、2002 年にサンスクリット語学サンスクリット文学専修の助教授に就任した横地優子、そして 1990 年以来サンスクリット語学サンスクリット文学専修の外国人教師として、ヴェーダ語・比較言語学と文法学を担当してきたヴェルナー・クノーブルとで構成されている。クノーブルは、2005 年度で定年退職するが、その後任にはハンブルク大学で学位を取得したディヴァカル・アーチャールヤを迎える予定である。

教授の徳永は、古代インドの神話伝説とそれに関する文献の研究を専門とし、『リグヴェーダ』の神話伝説を注解した文献『ブリハッド・デーヴァター』の研究によって、ハーヴァード大学から学位を取得した。京都大学に着任後は、このテキストの批判校訂版を出版した。また、最近は『マハーバーラタ』の言語、韻律、文献成立史の研究に力を入れている。同じく教授の赤松は、仏教後期の思想家ジュニャーナシュリーミトラの言語論であるアポーハ論の研究で、パリ大学で学位を取得した。近年は主に 5 世紀の文法家で言語哲学者であるバルトリハリの言語哲学に重点を置いて、言

語をめぐるインド思想の展開を探求して、「思想と言語の問題」についての考察を続けている。助教授の横地は、『スカンダ・プラーナ』を主たるテキストとして、戦闘女神の神話を扱って、グローニンゲン大学より学位を取得した。古典サンスクリット文学と、ヒンドゥー教の神話・伝説を多く含むプラーナ文献の研究を専門としており、とりわけ、ヒンドゥー教女神神話の形成・発展に関心をもって研究をしている。

インド古典学専修に関わる学会としては、「インド思想史学会」がある。この学会は、服部正明によって 1981 年にその前身「インド思想史研究会」として組織されたもので、1993 年から学会となった。広くインド学研究にかかわる者の学術交流を目指して、年一回、毎年年末に学術大会を開催している。また学術雑誌として、『インド思想史研究』を刊行してきた。2004 年度からは、徳永が会長を引き継ぎ、雑誌名を『インド学研究』と改めて、更なる深化をめざしている。

ここで京都大学におけるインド学の 100 年の歴史を振り返っておきたい。「インド哲学史」講座は 1906 年の文科大学開設と同時に設置され、開設委員であった松本文三郎（1869－1944）が教授となり講座を担当した。1926 年に宗教学第 3 講座（仏教学）が創設されるまでは、仏教学も本講座において併せ講ぜられた。松本は教義学的傾向の強い在来の仏教学を、厳密な史料批判を媒介とする近代の学問へと発展させた。松本退官の 1929 年に本田義英（1888－1953）が講師となり、1934 年に助教授、1935 年に教授に昇任し、1948 年まで講座を担任した。インド学の原典研究の欧米における進展に応じて、本田は梵語原典を演習に用い、インド思想の主潮流について講義した。1948 年の本田退官の後、松尾義海（1909－89）が助教授となり、1953 年教授に昇任し本講座を担任した。松尾は、インド古典論理学の体系を樹立したニヤーヤ学派の研究に専念した。1961 年には服部正明（1924－）が助教授となり、1973 年に教授となって講座を担当した。服部の

牛がひく昔ながらの荷車

研究はインド古典の諸分野にわたるが、特に認識論を中心とする古典期哲学体系の研究において優れた業績がある。服部の時代に本講座は、梵語学梵文学、仏教学講座との連携のもとに、国際学界に確実な地歩を占めるに至った。服部の後を襲ったのが徳永である。

一方「梵語学梵文学」講座は、1910 年に開設された。初代教授の榊亮三郎（1872－1946）がめざしたのは、日本における近代的なサンスクリット学とインド・イラン研究の確立であった。1930 年、講師となった足利惇氏（1901－83）は、1942 年に助教授、1950 年には教授に昇任して、1965 年に退官するまで、35 年にわたって本講座における研究と教育を担った。榊の志を受け継いだ足利は、サンスクリットの研究に並行してイラン研究にも深く関わった。この間、1942 年から 1966 年まで専任講師として在任した善波周が、インドの科学文献を担当したことは、特記すべきことである。伊藤義教（1908－）は、足利の手ほどきを受けてイラン研究を始め、1941 年からはヴェーダ文献と古代・中世イラン語文献を担当した。大地原豊（1924－91）は、1957 年に助教授として本講座に着任し、1972 年には教授に昇任、1988 年に退官するまで、長年にわたって、研究教育の両面で計り知れないほど大きな影響を後進に残した。特に土着文法学研究における貢献で世界的評価を得た。1973 年には、小林信彦が助教授として就任した。

（赤松明彦記）

仏教学専修

京都大学において本講座が設立されたのは1926年6月である。それ以前は文科大学創設以来印度哲学講座を担当した教授松本文三郎およびこれを助けた羽渓了諦（1883－1974）その他の講師によって仏教学の講義が行われていた。本講座を最初に分担した羽渓は、西域仏教を専門とし、1929年助教授、35年教授に昇進し、43年9月停年退官するまで本講座を担当した。1935年講師久松真一（1889－1980）が本講座に加わり、37年助教授に昇進、羽渓の退官後本講座を担当するに至った。久松は46年教授に昇進し、49年6月停年退官するまで戦中戦後の困難な時期に講座の発展と学生の指導に献身した。久松は西田幾多郎の門下として哲学を修めるとともに、禅の実践者としても令名が高く、自らの仏教的体験を理論的に解明し、東西の哲学を融合して独自の仏教哲学を創造した。その著書『東洋的無』（1939）、『絶対主体道』（1948）、『禅と美術』（1958）などの業績がそれを如実に示している。

1950年本学人文科学研究所にあった助教授長尾雅人（1907－2005）が本学部に転じ、停年退官した久松を襲って本講座を担当するに至った。長尾は51年教授に昇任、71年停年退官するまで講座の発展と学生の指導に努めた。かれは羽渓門下の出であるが、山口益がフランスから導入した仏典の梵蔵漢比較研究をも継承し、中観・唯識の諸論書の精密な文献学的研究を行った。この領域における長尾の研究は学位論文「中観哲学の根本的立場」（『哲学研究』366, 368, 370,371; 英訳 , 1989）、"Index to the Mahāyānasūtrālaṃkāra" 2 vols,（1958,61）、梵本 "Madhyāntavibhāgabhāṣya"（1964）、『中観と唯識』（1978; 部分英訳 ,1991）『攝大乗論　和訳と注解』（全2巻 1982, 87）などの著書および数多くの論文に結晶している。長尾はさらにチベット仏教の研究においても『蒙古学問寺』（1947）、『西蔵仏教研究』（1954）の2名著に代表されるパイオニア的業績を残している。また長尾はインド美術に対する造詣も深く、1958－59年6名の隊員から成るインド仏蹟踏査隊を率いて渡印、4ヵ月にわたってインドの諸遺跡、博物館を調査、ブダガヤでは発掘もこころみ、多くの研究資料をもちかえった。退官後長尾は推挙されて1980年12月12日日本学士院会員となった。羽渓・久松の時代以来、本講座の授業を助けた山口益・塚本善隆の2講師は、長尾の下でもその活動を続け、前者は53年まで、後者は60年まで在任した。

予餞会（英米研と最後に合流。1970年）

1953－56年インドのナーランダ研究所の講師であった梶山雄一（1925－2004）は、帰国後本講座の助手および講師を歴任し、61年3月助教授、71年11月教授に昇進、88年停年退官するまで研究・教育に従事し、多くの優れた研究者を育てた。

梶山ははじめ中観哲学、とくにバー（ヴァ）ヴィヴェーカ（Bhā(va)viveka）に深い関心を示したが、後にはダルマキールティ（Dharmakīrti）以後の後期仏教論理学・認識論の分 野で次々に新しい研究を発表して他の追随を許さず、さらには般若経を中心とした大乗経典ならびに菩薩思想の研究や、インド仏教思想を基盤にした中国および日本の仏教思想の解明に対しても縦横に研究の歩を進めた。71年5月、学位論文『ナーガールジュナの哲学』により京都大学文学博士の学位を得たが、『八千頌般若経』和訳（全2巻、1974, 75）、『仏教における存在と知識』（1983）などの著書や欧

文論文集 "Studies in Buddhist Philosophy"（1989）をはじめとする多くの論文を発表した。

1975 年 12 月以来人文科学研究所の助手の任にあった御牧克己（1947－ ; PhD: パリ第三大学 , 1975）は、1982（昭 57）年 4 月から本学部助教授に任ぜられて本講座に所属し、1992（平成 4）年 1 月には教授に昇進した。

御牧ははじめ後期インド仏教の認識論・論理学に深い関心を示したが、フランス留学中に習得したチベット学の知識を進展させ、特にインド・チベット仏教の宗義文献の解明に大きな貢献を為した。また、ボン教研究やチベット土着語彙集、土着文法の分野においても業績を発表し、チベット学全体を幅広く見渡して研究を継続している。"La réfutation bouddhique de la permanence des choses（sthirasiddhidūṣaṇa）et la preuve de la momentanéité des choses（kṣaṇabhaṅgasiddhi）"（1976）、"Blo gsal grub mtha'"（1982）、『ツォンカパ』（1996）、"Bon sgo gsal byed"（1997）などの著書および多くの論文がある。

宮崎泉（1968－ ）は、2004 年 4 月 4 年間の任期付き講師に任ぜられて本講座に所属し、アティシャ（982－1054）の研究や『禅定灯明論』を中心としてチベットへ伝わった禅の研究やチベット大蔵経史についての研究を継続している。

外国諸大学との交流が活発に行われているのも本講座の特徴である。

長尾は 1956 年にセイロン・インド、58－59 年にインド、61－62 年にインド、ビルマを訪れ、さらに 65 年 9 月から 1 ヵ年間、招かれてアメリカのウィスコンシン大学でインドの大乗仏教を講じた。梶山はアメリカのウィスコンシン大学（67.9~68.6）、カリフォルニア大学（バークレー校）（74.3~7; 81.3~6）、ハーヴァード大学（86.2~6）、連合王国のケンブリッジ大学（80.5~7）、オース

研究室のハイキング（1970 年頃）

トリアのウィーン大学（85.2~7）と世界の諸大学に招かれてインド・中国仏教の諸思想を講じた。御牧はカリフォルニア大学バークレー校（93 年冬学期）、ハーヴァード大学（00 年夏学期）、フランスのコレージュ・ド・フランス（94 年秋）、国立高等研究院（EPHE）（97 年秋、05 年春）、オーストリアのウィーン大学（95 年夏学期、02 年夏学期）、ドイツのハンブルク大学（04 年夏学期）に招かれてインド・チベット仏教哲学を講じた。

外国の著名な学者で本講座を訪れて講義、セミナーを担当された方も少なくない。インドのラマナン（V.Ramanan）教授（61 年）、スイスのメイ（J.May）教授（63.4~68.10; 77.9~11）、ロンドン大学のブラフ（J.Brough）教授（65.9~66.3）、ウィーン大学のシュタインケルナー（E.Steinkellner）教授（82.4~6）、ハンブルク大学のシュミットハウゼン（L. Schmithausen）教授（05.9~12）などが特筆に値する。

また、従来多くの学生がインド、ビルマないし欧米の諸国に留学し、他方本講座において仏教研究に従う外国人留学生の数も年々増え、現時点では、フランス、ベルギー、ドイツ、スイス、アメリカ、イスラエル、イタリア、中国、台湾 、韓国、タイからの外国人共同研究者または研修員・研究生を受け入れている。

（御牧克己記）

西洋文献文化学系

西洋古典学専修

本専修は古代のギリシア語およびラテン語で書かれたテキストについての文献学的研究を目的として西洋古典語学西洋古典文学という名称で出発し、1995 年の大講座化に際して、より広く古典古代の文化全般を研究視野に入れた古典文化学を加えて、現在の名称となった。

西洋古典語学西洋古典文学が正式講座となったのは 1953 年のことだが、1938 年に田中秀央教授のもと講座外正科という形で実質的に発足した。西洋古典学として日本で最初の独立講座であった。田中先生は 1886 年生まれ、東大でケーベル博士の薫陶を受け、1920 年に招かれて京都帝国大学文学部講師として（言語学講座に）着任、すぐに助教授となり、1931 年に教授昇任後、1946 年の退官まで務められた。西洋古典文学西洋古典語学が独立して卒業生を輩出する体制となったことには、当時の文学部の英断と、それを可能にした田中先生の研究と教育における実績が大きい。数多くの原典翻訳の他、ギリシア語およびラテン語の文法書、文学史を執筆、さらに、いまも広く使われている『羅日辞典』（研究社）と『ギリシア・ラテン引用語辞典』（岩波書店）を編んだ。また、先生の蔵書は文学部に寄贈され、田中秀央文庫として利用されている。

こうして基礎が置かれた講座は松平千秋先生に引き継がれた。松平先生は 1938 年に言語学専攻で学部を卒業後、1941 年に 25 才で講師となり、1947 年に助教授、1958 年に教授に昇任、1979 年に停年退官するまで研究教育に多大な貢献を果たした。古典古代全般に目配りしながらホメーロスとヘーシオドスを中心に据えた研究、ヘーロドトス、クセノポーン、ギリシア悲劇などの翻訳、現在までもっとも広く使われているギリシア語およびラテン語の文法書の執筆を行う一方、西洋古典学の進展をめざして 1950 年に日本西洋古典学会が創立、以来、本研究室に事務局が置かれているが、創設の際も、その後の運営においても先生は中心的役割を担い、とくに、1973 年から 1986 年まで委員長を務めて学会を指導した。なかでも特筆すべきは、文学にとどまらず、史学、哲学分野を横断して日本の西洋古典学を指導する数多くの研究者が先生のもとで学び、哲史文を統合した学問としての古典学という基本的理念を西洋古典学会に定着させたことである。

その教えをもっともよく受け継いだ岡道男先生が 1969 年に助教授として着任（1979 年に教授に昇任）した。岡先生の研究は主著『ホメロスにおける伝統の継承と創造』（創文社）の題名にいみじくも示されるように、あらゆる意味で古典学の出発点であるホメーロスから始めて、古典の伝統をギリシアからローマ、そして、現代へ連なる流れの中に捉えつつ、厳密な考証によってその創造的側面に新しい光を当てるものであった。それはホメーロス、ヘーシオドス、ギリシア悲劇、キケロー、カトゥッルス、ウェルギリウス、ホラーティウス、プロペルティウス、さらには、『ニーベルンゲンの歌』やゲーテに及ぶ広範な論考対象に示される一方、ギリシアとラテンそれぞれの包括的な文学史の編著、『ギリシア悲劇全集』および『キケロー選集』の編訳、京都大学学術出版会西洋古典叢書の編集など広い視野からのお仕事に表れている。先生はまた、京都大学西洋古典研究会を組織して会誌「西洋古典論集」を 1980 年に創刊し、主として大学院生に研究発表の場を提供するなど、1994 年に退官するまで研究室にくまなく行き届いた配慮を示した。

現在のスタッフは中務哲郎教授と高橋宏幸で、中務教授は 1987 年に助教授として着任、1994 年に現職、高橋は 1995 年に助教授として着任、2003 年に教授となったが、この間、エリザベス・クレイク先生がセント・アンドルースより招かれ、1997 年から 2002 年の退官まで古典文化学を担当し、文学部で初の女性外国人教授となった。

クレイク先生は悲劇を中心としたギリシアの文

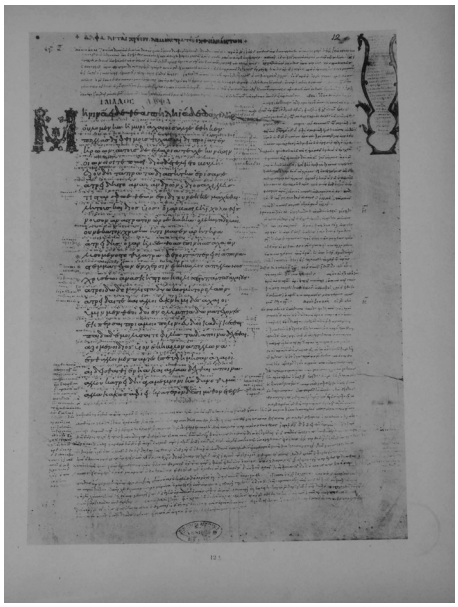
学、ヒッポクラテースやガレーノスなどの医学、地中海世界全般の社会風土に関する多数の著書、論文があり、とくに、文学部在職中にはヒッポクラテース集成から『人間の部位について』の校訂注釈本を出版した。すぐれた幅広い研究業績の一方で、教室では日本と欧米の違いを意識し、ヨーロッパでの西洋古典学の豊かな蓄積を伝えつつ、つねにパイデイアやフーマーニタースなど古典のもつ普遍的意義に立ち返りながら、学生を熱心に指導した。

中務教授はホメーロス、ヘーシオドス、アイソーポス、ヘーロドトス、ギリシア演劇、ギリシア小説などを主要な研究対象としながら、洋の東西を問わず、古代から現代にいたる説話、民間伝承に広く関心と知見を有する。古典古代全般にくまなく目配りし、岡先生とともにギリシアおよびラテン文学史の編著、『キケロー選集』の編訳、京都大学学術出版会西洋古典叢書の編集に当たり、加えて、現在『ギリシア喜劇全集』の編訳を進めている。2002 年にそれまでの西洋古典語学西洋古典文学から古典文化学へ担当を替わっている。

高橋はウェルギリウス、オウィディウス、プロペルティウスなどアウグストゥス時代の詩歌を研究対象の中心に据えながら、プラウトゥスの喜劇やセネカの悲劇、また、書簡文学に関心を寄せている。ラテン文学の表現技法から、そこに現れるギリシア神話の語られ方、および、その伝統について考究を進めている。

他専修同様、本専修でもこれまで数多くの非常勤講師をお願いしてきた。紙数の制約から個々のお名前を記すことはできないが、文学はもとより言語学、神話学、美術史、考古学、ビザンツ文化など広範な分野の授業を提供してくださった先生方にここで謝意を表したい。

大講座化以前は助手が授業担当として語学の一つ、または、講読を受け持ち、学生の相談相手など教室運営に大きな働きを担い、同時に、日本西洋古典学会事務局の実務に当たり、学会誌『西洋古典学研究』（1953 年創刊、岩波書店より年一回発行刊）の編集や国内外関係機関との連絡などにも携わっていた。その仕事は柳沼重剛、長坂公一、北嶋美雪、松居正俊、小林標、中務哲郎、小川正廣、岩崎務、高橋宏幸、山沢孝至、山下太郎の各助手に受け継がれ、いまは在籍学生を含めた研究室全体で対応している。



ホメーロス『イーリアス』写本模刻。Homeri Ilias cum Scholiis, codex Venetus A, Marcianus 454.

学部卒業生は 2004 年度末で 59 名、うち 37 名が修士課程を修了している。以前は大学院に進学し、研究者を目指す者が大半であったが、近年は修士終了後に就職する学生も多い。他大学から大学院に入学する学生の比率が高いことも最近の傾向である。

西洋古典学は日本ではまだまだ一般に認知度の低い学問と言わざるをえないが、そこには死すべき存在としての人間がよく生きるために言葉の力によって全人的教育をきわめようとする理念とそのためのモデルがあり、その意義はこれから高まっていくものと思われる。

（高橋宏幸記）

スラブ語学スラブ文学専修

当専修は、1995 年に行われた文学部再編・大講座化により、ヨーロッパ・アメリカ語学－ヨーロッパ・アメリカ文学講座の 6 番目の専修としてあらたに設置された。そして、同年 7 月に佐藤昭裕教授が専修担当者として言語学講座より移り、翌年 4 月の開講に向けて準備を開始した。1996 年 4 月には、大学院重点化に伴い、学年進行による学部 3 回生の進学に先立って、修士課程の学生 2 名が入学、研究室としての活動がはじまった。さらに翌年には最初の学部 3 回生 3 名が専修に進学し、専修としての教育と研究の体制が整った。以来、2005 年 3 月までに、通算して学部卒業生 8 名、卒業を待たずに他研究科の大学院に進学した者 1 名、大学院修士課程修了者 10 名、博士課程研究指導認定退学者 3 名を数える。2004 年度の在学生は、学部 4 名、大学院博士課程 5 名（うち 3 名は海外留学中）である。またこれまでにクロアチア、ポーランド、ハンガリーから各 1 名の研究生を迎えている。

当専修は、それぞれで固有の特徴を示すものの、一方では多くの共通点をもち、並行的に発展してきたとも言えるスラブ諸民族の言語と文学を、その多様性と統一性という観点から、総合的に研究・教育することを目指して設立された。日本におけるスラブ研究はロシア研究として始まり、とくにロシア文学研究は明治以来の長い伝統を持っている。しかし、ロシア語以外のスラブ語、ロシア文学以外のスラブ文学の研究については従来必ずしも十分に行われてきたとは言えない。その中で、19 世紀・20 世紀ロシア文学だけでなく、スラブ世界全体を見渡し、いずれの国家、いずれの時代にも偏らず、バランスの取れた研究と教育を目指す本専修の存在は、ロシア文学研究で長い伝統を持ついくつかの大学も含め、日本全体でも希有な存在であると言えよう。この目標に向かい、開講される授業も、ロシア語ロシア文学関係のものを中心にしつつも、西スラブ、南スラブについても初級の語学コースだけでなく、演習や特殊講義の授業を設け、広くスラブ諸国の言語と文学を対象に行うことを目指している。

帰国を前にしたアンヂェイ・ポッペ客員教授を囲んで（1998 年 6 月）

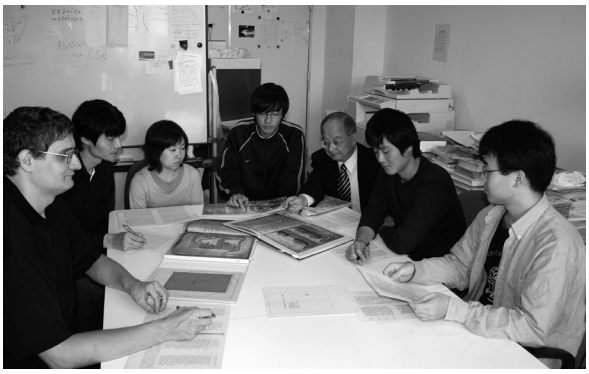
現在専修を担当する佐藤は、1982 年以来文学部の言語学講座、言語科学講座に属していたが、開設とともにスラブ専修に移ってきた。現在の研究の中心は中世スラブ語であり、とくに 11 世紀から 13 世紀にかけてのロシア文章語成立の歴史とその過程における古教会スラブ語の影響について興味を持っている。主著は『中世スラブ語研究—『過ぎし年月の物語』の言語と古教会スラブ語—』（京都大学文学研究科 2005 年）である。同時に、20 世紀ポーランド文学にも深い関心を持ち、1997 年以来、ポーランド文学の演習を行っている。また 2005 年度からはセルビア文学の演習も担当している。

学生、院生の研究のテーマも、この専修の設立の趣旨を十分に体現したものと言えよう。これまでの修士論文のテーマについて見ると、18 世紀ロシア文学 1 名、ウクライナ文学 1 名、セルビア文学 1 名、現代ロシア語 2 名、中世ロシア語 1 名、現代ポーランド語 2 名、古教会スラブ語 2 名、というようにヴァラエティーに富んでいる。

海外との学術交流も盛んである。院生がこれまで留学した先を列挙するとポーランド 2 名、旧ユーゴスラヴィア 1 名、チェコ 1 名である。短期でロシア等に語学留学する院生・学生もある。

また文学研究科客員教授ポストを利用し、専修創設直後の 1997 年 12 月から翌年 6 月までキエフ・ルシ研究で知られるワルシャワ大学の Andrzej Poppe 教授を、また 2004 年 6 月から 2005 年 3 月まで機能言語学の専門家であるカリフォルニア大学のオリガ横山教授を招聘し、授業を行って貰うとともに、大学院生の研究指導にも当たって貰った。また、関西におけるスラブ研究の拠点として、来日するロシア・欧米の研究者の講演会を組織することも多い。2001 年以来、日本スラブ東欧学会（機関誌 Japanese Slavic and East European Studies、2005 年度に vol.26 を刊行予定）の事務局が当研究室におかれている。

2005 年 3 月には、当専修から初めての課程博士 2 名が誕生した。1 人はロシア語の文法論、1 人はポーランド語と日本語の対照意味論がテーマであった。



授業風景（2005 年 10 月）

（佐藤昭裕記）

ドイツ語学ドイツ文学専修

本講座は西洋文学第1講座として1907年5月に開設され、翌1908年9月に最初の授業が行われた。初代教授は藤代禎輔（1868－1927）で、ほかに成瀬清、エーミール・シラー（Emil Schiller）などが講師としてこれを助けた。

藤代は、最初はレッシングやシラーに始まり、ヘッベル、グリルパルツァーなどを経てヴァーグナーやハウプトマンに至るドイツ近代戯曲の研究に力を注いだが、次第にゲーテを主な研究対象とするようになった。このような藤代の研究方向は、本講座の以後の研究教育両面における一つの伝統的傾向となった。藤代には、『文藝と人生』（1914年）、『文化境と自然境』（1922年）などの著作があり、また『万葉集』のドイツ語訳の仕事にも精力を傾けていたが、1927年に病没した。なお、藤代教授時代の1926年から講師雪山俊夫によって「ニーベルンゲン」をはじめとするドイツ中世文学の授業が開始され、以後この領域の研究も、研究者の数こそ少ないものの、本講座の伝統の一つになった。

藤代の後を継いだのは成瀬清（1884－1958）である。成瀬は1919年本学助教授に就任し、1930年教授に昇任した。成瀬は、ドイツ近代戯曲の研究という藤代以来の伝統を受け継ぐかたわら、一方では同時代の表現主義戯曲に強い関心を寄せ、他方ではその精神的系譜を求めて、疾風怒濤期の文学にまで遡って研究を深めた。その成果をまとめたのが、『疾風怒濤時代と現代独逸文学』（1929年）である。成瀬にはこのほかに、『文芸に現はれた人間の姿』（1947年）などの著作がある。成瀬が多くの現代作家にも関心を寄せ、授業で取り上げ、翻訳紹介にも努めたことは、本講座の教育研究活動に新たな特色を付与するものであった。第二次世界大戦が終結を迎える直前の1945年に、成瀬は停年退官した。

教授、助教授ともに欠員の状態が一年近く続いた後、1946年に大山定一（1904－74）が助教授に就任した。大山は1950年教授に昇任し、以後1968年に停年退官するまで約20年にわたってその責を全うした。大山が最も心を注いだ研究対象は、『文学ノート』からも明らかな通り、ゲーテであった。長年にわたるゲーテへの傾倒の成果は、『ゲーテ詩集』（1949年）や『ファウスト』（1960年）の見事な訳業となって結実した。しかし大山は他方でリルケやトーマス・マンなどを中心とする20世紀ドイツ文学にも強い関心を寄せ、『作家の歩みについて－トーマス・マン覚え書き』（1946年）などの著書や、リルケの『マルテの手記』の訳書（1939年）などによって、わが国におけるドイツ現代文学の受容に大きな貢献をなすとともに、本講座に新しい時代にふさわしい清新な気風を吹き込んだ。

大山の後を継いだのは谷友幸（1911－81）である。谷は1957年に助教授となり、1967年に教授に昇任し、翌1968年から本講座の主任教授となった。谷は、リルケの伝記研究の分野での先駆的な仕事と言える『リルケ伝』（1948年）を著すかたわら、早くから翻訳などによってこの詩人のわが国への紹介に努めた。しかしやがて谷はヘルダーリーン研究に専念するようになり、文学部に着任してからは毎年のようにヘルダーリーンを講じた。その長年にわたる研究の成果が、学位論文『ヘルダーリーン文学の基礎的研究』（1962年）である。

谷が1975年に停年退官した後を継いだのは平井俊夫（1926－93）である。平井は1969年に助教授に就任し、1976年に教授に昇任し、本講座を担当した。平井は、最初は20世紀初頭の表現主義詩人たちの研究から出発し、『トラークル詩集』（1967年）の訳書などを著した。やがて平井は、ドイツ近代の抒情詩人たちの研究を経て、教授昇任後はもっぱらゲーテの抒情詩に取り組み、ドイツ近・現代抒情詩を中心とする本講座の教育研究傾向をいちだんと推し進めた。1990年に刊

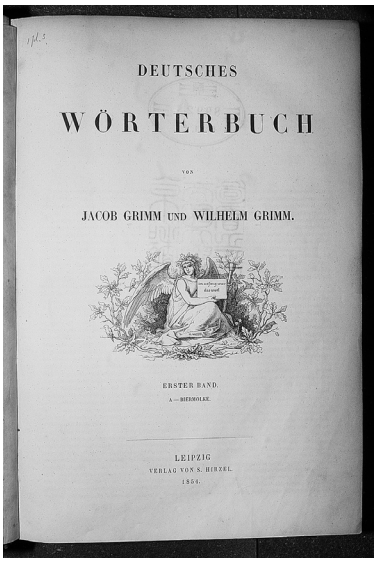
行された『西東詩集－翻訳と注釈』は長年にわたるゲーテ研究の成果であった。

平井の後を継いだのは山口知三（1936－）である。山口は 1979 年に助教授に就任し、1990 年に教授に昇任して本講座を担当した。山口は、トーマス・マン研究と反ナチス亡命文学研究を主たる課題とし、トーマス・マンの『非政治的人間の考察』の訳書（1968－71 年）をはじめとする多くのマン関係文献の翻訳や、『ドイツを追われた人びと』（1991 年）や『廃墟をさまよう人びと』（1996 年）などの著書を世に問うた。小説や評論を政治や社会の動向と関わらせて捉えようとする山口の研究は、本講座の教育と研究の伝統に新たな一面を付け加えるものであった。山口は 2000 年に停年退官した。

その後を継いだのは西村雅樹（1947－）である。西村はホーフマンスタールをはじめとするオーストリアの文学者や思想家の言語批判の問題を扱い、その研究の成果を『言語への懐疑を超えて』（1995 年）にまとめた。西村の関心は目下、バール等「若きウィーン派」の文学を中心としながら、広く世紀末ウィーン文化全体にも及んでいる。1993 年に助教授に就任した松村朋彦（1959－）は、ゲーテ等の文学者を中心としながらも、18 世紀から 19 世紀にかけての文化にも関心を寄せ、ドイツ文学研究の新たな方向を切り開く論文を執筆している。西村と松村は、教育面においても、ドイツ文学をドイツ語圏の文化全体の中で捉えることに意を注いでいる。

以上、本講座を担当した歴代の教員の足跡をたどってきたが、むろん 1 講座（教授、助教授各 1 名）のみからなる本専修の運営は、本学の教養部ドイツ語教室の教員（現人間・環境学研究科所属教員）をはじめとする学内学外からの多数の非常勤講師や、多くのドイツ人教師の協力があってはじめて可能であったことを忘れてはなるまい。また、言うまでもないことながら、講座の歴史は何よりもまずそこで学んだ学生たちを抜きにしてはあり得ない。1907 年の開設以来、2006 年 3 月末現在に至るまで 100 年近くの間に本講座に在籍した学生の数は、1954 年 3 月卒業を最後とする旧制度の卒業生が約 230 名、1953 年 3 月卒業に始まる新制度の卒業生が約 320 名で、総計約 550 名にのぼる。その中には、日本におけるドイツ語学ドイツ文学研究の発展に寄与し、学界から注目される業績を残した研究者が数多く含まれている。さらには独文という専門領域の枠をはるかに超えて、卒業生の活躍の場は多方面に及んでいる。

（西村雅樹記）



独文の教員や学生が代々使ってきたグリムのドイツ語辞典（初版第 1 巻 1854 年刊）

英語学英文学専修

本専修は 1908 年に開設された。学長狩野亨吉は夏目漱石に教授就任を要請したが、漱石は「東京の千駄木を去るのがいや」という「個人的の理由」、それも「千駄木が嫌だから去らぬ」という、いかにも彼らしい天邪鬼な理由でこれを固辞した。結局、初代教授には、1905 年に訳詩集『海潮音』を発表して文名の高かった上田敏（1874－1916）が任命された。菊池寛は当時の学生生活を振り返って、「京都大学の文科は、すこぶる自由であったが、しかしそれほど面白い講義はなかった」と記している（『半自叙伝』）。試験場にノートを持ち込んでもよければ、期末試験の場ではじめて教官の顔を見るような按配でも単位がもらえる。「おそらくこうした自由さは、上田敏博士と共に無くなったのだろう」と菊池は続けるが、1 世紀を隔てた今日でも、ある意味で似たような「自由」は依然として残っているのではなかろうか。

上田が 41 歳で急逝した 1916 年、エドワード・クラーク（Edward Clarke, 1874－1934）講師が着任した。彼は 18 年在職の後、病没。その 5000 冊を越える蔵書は本学に寄贈され、「クラーク文庫」として文学部の書庫におさめられている。上田の後は島文次郎（1871－1945）、厨川白村（1880－1923）が教授を務めた。漢詩人野口寧齋の実弟であった島は『英国戯曲略史』（1903）を著し、京都大学初代図書館長を務めた。白村は古典としての盛名を得た『近代文學十講』（1912）を刊行した後、社会評論にまで視野を広げ、『象牙の塔を出て』（1920）を出版。この時以来、「象牙の塔」という表現が日本語として定着した。翌年出版されてベストセラーになった『近代の恋愛観』など、日本社会の後進性を批判した彼の啓蒙的な著作は大正期の若者に大きな影響を与えた。

1934 年に本専修は教授、助教授それぞれ 2 名よりなる 2 講座制となり、同年石田憲次（1890－1979）が教授に昇任した。彼において本講座は初めて自らの卒業生を教授として迎えたのだった。石田と同窓であった菊池寛によれば、彼は「語学のできる重厚な人だった」。英作文にあまり自信のなかった菊池は「石田君に間違っていないかを見てもらった」と言う。石田の真面目な人柄と堅実な学風は『ジョンソン博士とその群』（1933）や『英文学としての聖書とアポクリファ』（1960）に顕著に現れている。

1925 年に本専修の卒業生が『ミューズ』という英文学関係の雑誌を創刊したが、1931 年に廃刊となった。石田在職中の 1933 年、これに代わる形で『アルビオン』が創刊され、現在にいたるも尚、本専修出身者が研究成果を発表する場として機能し、学会の注目する専門誌となっている。

石田と並んで、1949 年からもう一つの教授席を占めたのが中西信太郎 1903－76）であった。中西の主たる関心はシェイクスピアにあり、『シェイクスピア批評史研究』（1949）をはじめ、英国を代表するこの劇作家について幾つかの著作を残している。翻訳も多く、ギッシング作『ヘンリ・ライクロフトの私記』やウェルズ作『トーノ・バンゲイ』は多数の読者に親しまれた。

石田が退官した後、工藤好美（1898－1992）が着任した。彼はウォルター・ペイターやヘンリー・ジェイムズなどの近代文学を専門とし、特に前者について、古風で趣のある翻訳や、『ウォルタア・ペイタア』（1927）など、貴重な著作を残している。

菅泰男（1915－）は工藤の退官の後 1961 年新設されたアメリカ文学講座の教授に昇進したが（アメリカ文学の項参照）、1970 年には本専修（講座）を担当するに至った。菅はシェイクスピアを中心に英米の演劇を研究し、『シェイクスピアの劇場と舞台』（1963）やシェイクスピア、シェリダンなどの翻訳を刊行している。また日本の古典芸能にも造詣が深い。

1962 年には御輿員三（1917－2002）が教授に昇進した。御輿は主として英詩の研究に専心し

たが、その研究の特色は英詩のことばに対する鋭い感覚に裏打ちされた精細緻密なテキストの読みにあった。この学風を示す代表的な業績として、『ことばと詩－英詩考その一』（1969）、『神と悪魔との間で－英詩考その二』（1970）や『ポープ詩集』（1974）をはじめ、多くの注釈や評釈などがある。また『季刊英文学』を 1963 年から 12 年間にわたって主宰し、数多くの研究者を世に送り出した。

菅の退官後、1979 年に岡照雄（1930－）が教授に昇進した。岡は主として 18 世紀のイギリス小説を研究していたが、やがてドライデン、ポープなどにも関心を広げ、当時の政治と文学との関係、風刺文学の本質の解明に関わる数多くの論文を発表している。岡は現代小説にも広く関心を持っているが、この方面の代表的業績として『アンガス・ウィルソン』（1970）をあげることができる。また岩波『漱石全集』第 15 巻（1995）の注解や『サミュエル・ピープスの日記』（共訳）（1999、2003）などの翻訳を刊行している。

御輿の退官後、1982 年に喜志哲雄（1935－）が教授のポストに就いた。喜志の研究範囲は英米演劇全般にわたるが、特にシェイクスピアを中心とするエリザベス朝演劇、王政復古期演劇、現代劇を主な研究対象としている。その研究方法の特色は劇が上演されたときに生じる効果を受容者としての観客との関係において分析しようとするところにある。これらの研究成果は『劇場のシェイクスピア』（1991）、『英米演劇入門』（2003）や多数の論文としてまとめられている。またヤン・コット『シェイクスピアは我らの同時代人』（共訳）（1968）や『ハロルド・ピンター全集』（共訳）（1977、1985）をはじめ多くの翻訳を発表している。

豊田昌倫（1938－）は岡が退官した後、1993 年に教授に昇進した。英語学が専門の教授は本専修では豊田が最初である。豊田の研究範囲は英語文体論、現代英語研究、英語辞書の編纂、英語教育にわたる。その研究の特色は、鋭い英語感覚をいかしながら、英語の諸相を独自の視点から理路整然と分析、解説していくところにある。文体論の分野では『英語のスタイル』（1981）、辞書の編纂の分野では『リーダーズ英和辞典』第 2 版（共編）（1999）, 翻訳では『英語文体論辞典』（共訳）（2000）、英語教育分野では『世界語としての英語の諸相－日本における英語研究と教育』（共編著）（1991）などの著作がある。

これら歴代の教授によって、テキストの一言一句をゆるがせにしない精緻な読みを重視する本専修の学風が培われてきたといえよう。

なお現在は教授の宮内弘が英詩を、助教授の佐々木徹、家入葉子、廣田篤彦が、それぞれ英小説、英語学、英演劇を講じている。

（佐々木徹・宮内弘記）

アメリカ文学専修

わたしが文学部に入学した1961年にはHemingwayが亡くなって、語学の時間に黒板の片隅に "Farewell to Ernest Hemingway " とこっそり書いたものだ。2回生になり、文学をやるつもりで、国文の佐竹昭広、中文の吉川幸次郎、仏文の伊吹武彦の講義に出たときには目くるめく思いがした。しかし、結局、その年に開設されたばかりのアメリカ文学を専攻した。文学も講座も新しもの好きには恰好の選択で、今では若さのなせる業であったとしか言いようがない。

菅泰男教授は、旧本館の第8講義室に大きなアメリカ地図を掲げ、文学研究とAmerican Studiesを目指すと宣言された。これが記念すべき講座開設の1回目の講義であった。American Studiesは初めて耳にする言葉で何かわからぬままに、文学研究の講義はよく聴いた。谷口陸男、金関寿夫、大橋健三郎など非常勤の先生は20年代、30年代の作家たちを熱っぽい調子で語られた。卒業論文はMark Twainにしたが、何を書いたかは忘れ、冬寒の夜、フールスキャップの用紙に泣きたい気持ちでぼろぼろのタイプライターを叩いたのは憶えている。

修士課程で同級生たちはJames、Faulkner、Hawthorneなどで論文を書いていた。わたしはMoby-Dick論だったが、これも二度と目にしたくない代物である。

1968年文学部助手に採用された翌年、青木次生助教授がアメリカ文学講座に赴任してこられた。30代半ばで、研究室は東館4階で、英米文研究室の並びにあった。毎朝きちんと出勤されて、昼にはわたしが詰めていた部屋に必ずやって来てパンとリンゴを食べられた。前年までニューヨーク大学のLeon Edel教授のもとでJamesを研究しておられたとのこと。当時の先生はアメリカ文学会関西支部の例会にも熱心に出席され、わたしを誘って自家用車で名神を飛ばし、会場の関西学院へ行かれることもあった。その姿が何ともまぶしかった。

加えて、すでに毎年夏、京都大学と同志社大学との共催で行われていたアメリカ研究夏期セミナーでは、菅教授を助けてその運営・実行に当たられた。このセミナーは、まだ留学が大変な頃にあって日本のアメリカ研究の一時代を画した。文学部門では講師として次々にやってきたLeslie A. Fiedler、Daniel Aaron、R. W. B. Lewis、Charles Anderson、Tony Tanner、Sacvan Bercovitchらの謦咳に居ながらにして接することができた。わたしは助手時代から最初は受講生として参加したが、猛暑の中、2週間あまりを朝から晩まで缶詰めで過ごした後やっと夏休みを迎えるようなことが10年ほど続いた。青木先生はそれらの講師と熱い議論を交わす傍ら、休日には八瀬大原や宇治萬福寺などに案内してもてなされた。時にはお相伴に与ったこともあるが、夏のボーナスはそのためにとってあったとのこと。わたしは講師たちがそんなに偉い学者とはつゆ知らず気安く話しかけ、Tony Tannerとは比叡山のホテルのプールでいっしょに泳いだりもした。

1969年から始まった大学紛争では、火炎瓶の飛び交う夜、専攻の学生諸君とともに研究室に泊まり込んで、大学から支給されたヘルメットを被り京大を守ろうというデモに加わった。しかし、やがて過激派学生によって文学部は封鎖されて、授業はおろかほとんどの機能がストップした。職場を奪われてわたしは出勤することもできず、毎日安アパートで無聊をかこっていた。時々、菅教授から「電話せよ」という電報を受けて、近くの公衆電話に駆けつけたものである。アパートにはまだ電話がなかった。そんな状態が1年近く続いた後、強引に封鎖が解かれ、授業が再開されたときには、第1講義室の壁は黒く焼けただれ、教官の研究室は本や書類が散乱しソファや壁は落書きだらけであった。そんななか、2年の助手の任期を終え、他大学に転出して行った。

それから20年経って1989年にわたしが再度赴任したときには、アメリカ文学講座は1世代を終えつつあり、一人前に成長していた。卒業生も百名を越え、実業界、ジャーナリズム、教職、研究職、その他さまざまな分野で、立派に活躍していた。伝統的に、アメリカ文学講座も学生の自主性を重んじてきたから、卒業論文も学生諸君の関心の赴くところに任せ、課題を押しつけるようなことはなかった。そのぶん、教師は学生の多様な関心に対応しなければならない。その一方で研究者として専門性もなければならない。

青木教授は定年を待たずして退官されたが、残されたわたしは心細い限りであると同時に、教授のJames研究の仕事が羨ましかった。アメリカ本国で、Jamesは第2次大戦前からその重要性を指摘されてきたが、戦後は一気に再評価されて、伝記、作品研究は真っ盛りの時期を迎えた。日本ではその作品を翻訳・紹介するという仕事が残されていた。青木教授は難解な後期3部作を始め、その他を翻訳して、その翻訳に基づいた作品論を展開するという機会に恵まれたのだ。夏休みには必ず信州の別荘に立てこもり、まだ開発されたばかりの大きなワープロを駆使し、それを実行された。

わたしは、と言えば、Moby-Dickをきっかけに Melvilleの作品を順に読んでいるうちに、Patriotic Goreのおもしろさを発見し、今度はEdmund Wilsonの作品を順に読んできたにすぎない。困ったことに、Melvilleにしろ Wilsonにしろ、全部を読まないと満足できない。しかし、Wilsonの関心はアメリカの文学、歴史、社会に留まらず、果てしなく広がって、一筋縄では行かない批評家である。それだけに、興味が尽きないことも確かなのだが。

愛宕山ハイキング（青木教授撮影、1993年11月）

新たに赴任してきた同僚の若島正教授もNabokovの作品を精力的に翻訳・紹介している。日本ナボコフ協会を立ち上げるとともに、Nabokov研究の第一人者Brian Boydを日本に招待し、サンクトペテルブルグのセミナーに参加するなど国際的にも活躍している。しかし、若島教授の研究方法も「細部に神が宿る」という細心精緻な作品の読み方であることに変わりない。そうである限り、そして、そのような読み方に興味をもつ学生がいる限り、わがアメリカ文学専修も大学の重要な教育・研究機能を立派に果たしている、とこれだけは自信をもって言える。だから、自分の仕事には内心忸怩たるものがあっても専修の将来には安心して、わたしは定年を迎えることができそうだ。

（中村紘一記）

フランス語学フランス文学専修

本専修の前身である西洋文学第3講座が正式に設置されたのは1925年5月のことであるが、1921年10月、在外研究員として滞仏中の第一高等学校教授太宰施門（1889－1974）の本学助教授任命をもってフランス文学講座の萌芽とみなすことができよう。太宰は1923年2月に帰国、4月から仏文学の授業を開講した。1931年3月には講師であった落合太郎（1886－1969）が助教授に任命され、太宰は1933年3月教授に昇任した（落合は1937年12月教授昇任とともに言語学講座に転じた）。仏文科草創期の講義は太宰の方針で17世紀の古典主義文学や19世紀の小説を中心とする正統的なものだった。また落合はモンテーニュやパスカルなどフランス・モラリスト研究の日本における先覚であった。

1949年5月の太宰の停年退官後は第三高等学校伊吹武彦（1901－1982）、生島遼一（1904－1991）両教授が講師として授業を行い、1950年4月伊吹が本学教授に転じ、本講座担当となった。伊吹は戦後の仏文学研究の著しい進展をふまえて授業内容の充実に努め、生島に加えて人文科学研究所教授桑原武夫（1904－1988）を授業担当として迎えた。伊吹自身はラクロ、フローベール、A・フランス、プルースト、サルトルの小説や19世紀の詩など幅広く仏文学の翻訳・研究を行う一方、白水社刊『仏和大辞典』の編集にも尽力した。1957年5月教養部助教授本城格（1916－1991）が本講座助教授に転じた。本城は特に16世紀プレイヤッド派の詩人を研究対象とした。1961年11月伊吹の停年退官と同時に生島が本講座教授に転じた。生島はラファイエット夫人、スタンダール、フローベールなどの流麗な翻訳で知られ、近現代小説について講義を行った。1968年3月生島の停年退官後、1969年8月本城が教授に昇任した。1971年4月本学助教授として名古屋大学助教授の中川久定が迎えられた。中川はディドロ、ルソーをはじめとする18世紀の思想と文学の研究で知られるが、その関心は哲学、精神分析、日仏交流史など幅広い領域に及び、日本を代表する仏文学者の1人である。

来訪フランス人教授の講演会（2002年）

1980年4月本城は停年退官した。同年フランス語学フランス文学第2講座の増設が決まり、4月中川が第1講座教授に昇任するとともに、同助教授として一橋大学助教授の廣田昌義を迎えた。廣田はパスカルを中心としたジャンセニスム思想を主たる研究対象とし、授業では17世紀文学の他にモンテーニュ『エセー』の演習を継続して担当した。1982年6月教養部助教授吉田城（1950－2005）が第2講座助教授に転じた。吉田はプルースト作品の生成研究で知られ、ガリマール社刊行プレイヤッド叢書に収録される『失われた時を求めて』の校訂・編集に参加し、国際的に高い評価を得た。1984年4月廣田が第2講座教授に昇任した。また1990年11月助手を務めていた田口紀子が第1講座助教授に迎えられ、2講座4名の教授陣が整った。田口はフランス語学からテクスト言語学の領域へと関心を広め、特に小説を対象にしたフィクション論を研究テーマにしている。1994年3月中川は停年退官し、同年4月吉田が第1講座教授に昇任した。1995年4月一橋大学助教授の増田眞が助教授に迎えられた。増田はルソーやディドロを中心とした18世紀の文学・思想を専門とし、特にルソーにおける言語論と政治思想を研究テーマにしている。なお同年4月文学部は大講座制に移行し、翌1996年4月大

学院重点化に伴い本専修は文献文化学専攻欧米語学・欧米文学講座の 1 分野となった。同年文学研究科に協力講座が設置され、人文科学研究所宇佐美齊教授、大浦康介助教授（2004 年 4 月より同教授）が本専修の教育指導に加わることになった。2001 年 3 月廣田は停年退官し、同年 4 月田口が教授に昇任した。2002 年 4 月京都教育大学助教授の永盛克也が助教授に迎えられた。永盛は 17 世紀演劇を専門とし、特に古典悲劇の理論を研究テーマにしている。2005 年 6 月意欲的に研究活動を続けていた吉田が急逝し、その早すぎる死は国内外の多くの研究者たちによって深く惜しまれた。

京大仏文科の歴史を語る上で、学内外の講師や外国人教師、助手の果たした役割を無視することはできない。特に三高、教養部、総合人間学部、人間・環境学研究科や人文科学研究所から来講した教授陣は仏文科専任教員の専門分野を補完し、卒業論文・修士論文の試問にも加わることで、学生の教育指導に多大な貢献をしてきた。また外国人教師は語学運用能力の訓練だけでなく、フランスの伝統的なテクスト解釈法や小論文執筆の方法を実践的に教授し、さらには仏政府給費留学生試験の準備や修士論文の指導･添削･審査にも関わってきた。このような仏人専任教員を擁することは京大仏文科の大きな特徴である。代々の助手は教務関係の仕事に加え、学生・大学院生のよき相談役として研究室を支えてきたが、1996 年 4 月大学院重点化に伴いポストは廃止された。

フランスおよびフランス語圏の大学の研究者が頻繁に来訪し、講演やセミナーを行うことも本研究室の特徴である。また中川がパリ第 3・第 7 大学の客員教授として招聘された他、吉田もフランスの大学や学術会議に招かれて講演を行うなど、日仏の研究者間の交流はますます活発になっている。このような傾向を反映し、本専修によって数度の国際シンポジウムが開催されたことは特筆に値するであろう。中川の企画による「ディドロと 18 世紀のフランスと日本」（1985 年）、「革命と文学」（1989 年）、関西日仏学館との共催による「エクリチュール／フィギュール」（1998 年）、吉田が主催した「境界なきマルセル･プルースト」（2003 年）、増田が中心となり実現した「対話としてのフランス自伝文学」（2005 年）などである。

外国人教師の授業（仏文研究室、2003 年）

本専修の学生は狭義の「文学」に限ることなく自由に研究テーマを選ぶことができるが、近年の傾向としては 19・20 世紀の小説を研究対象とする者が多い。修士論文は正確な仏語で執筆することが要求される。また本専修は学生・大学院生に対し留学を推奨しており、大学間協定や奨学金制度を利用してフランスやスイスの大学に留学する者、フランスの大学において博士論文を執筆する者が多いのも特徴である。なお 1958 年から 1967 年まで仏文科の大学院生の研究論文の発表の場として雑誌『Francia』が発行された。1975 年には本専修の卒業生を主たる会員とし、大学院生が運営委員を務める京都大学フランス語学フランス文学研究会が組織され、雑誌『仏文研究』が編集・発行されることとなり現在に至っている。

（永盛克也記）

イタリア語学イタリア文学専修

本専修は、イタリア語学・イタリア文学研究者の専門養成機関として、日本で最初に設立された講座である。その開講は 1940 年 12 月に遡り、それからほぼ 40 年後の 1979 年に、同様の講座が東京大学に設立されるまで、わが国で唯一の大学院を備えた研究機関として、日本におけるイタリア研究に指導的な役割を果たして来た。

だが、このわが国最初の講座が誕生するまでには、京都大学を中心とした数多くの先人たちの絶えざる尽力があったことを忘れてはならない。すでに大正期を通じて、イタリア学に深い関心を寄せる先覚者が数多くいた。上田敏や厨川白村などの英文学者、考古学の濱田耕作、言語学の新村出、西洋史の坂口昂などの教授たちである。上田敏は、京都大学着任以前に『詩聖ダンテ』(1901 年)を世に問い、1908 年の西洋文学第 2 講座着任後は、学生のためにダンテの『神曲』を講義し、数多くの講演を通じてイタリア文学の紹介に努めた。厨川も西洋文学の総合的な理解のためにイタリア文学の重要性を説き、1921 年には、厨川、濱田、新村、坂口の教授たち、黒田正利講師、および民間のダンテ研究者大賀壽吉氏を中心に《伊太利亜会》が結成され、イタリア文化の紹介と研究を目的とした最初の本格的な活動が始まっている。この時期の大きな貢献としては、大賀壽吉氏の蒐集した二千余冊の貴重なダンテ文献が、本学の附属図書館に寄贈されたことである。氏の雅号を取って旭江文庫と名付けられたコレクションは、西欧諸国の主要図書館にも引けを取らないダンテ研究の重要な拠点となっている。

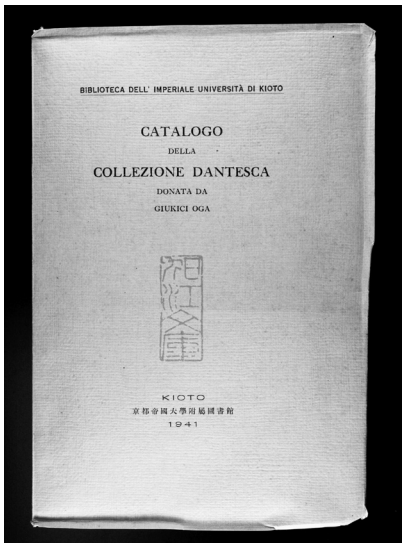
1931 年、新村と濱田の尽力によって、ようやくイタリア語が文学部の副科目の 1 つに加えられる。さらに、日独伊の枢軸強化の機運を受けて、両国間の親善関係は急速に強まり、1937 年、第 1 回日伊文化協定によって、日伊双方の代表的な大学に、イタリア語学文学と日本語学文学の講座を開設することが取り決められた。イタリアではローマ大学に日本文学講座が開設され、日本では協定締結当時、本学の総長であった濱田の強い希望もあって、イタリア文学講座が本学に設置されることに決まり、その設立と運営に必要な全費用を、財団法人原田積善会が寄付してくれることになった。こうして冒頭で述べたように、1940 年、日本初のイタリア語学文学講座の開設を見る。講義には黒田講師と人類学者のフォスコ・マライーニ講師が当たったが、本講座の専攻学生はまだ少数にすぎず、その少壮有為の卒業生も、第 2 次世界大戦で戦死して、船出したばかりの本講座は大きな打撃を受けた。

第 2 次世界大戦の終結とともに、イタリア語学文学講座は戦前とは異なった新しい伝統を育むことになる。ローマ大学で日本文学の講師を務めた野上素一が戦後帰国して、1946 年に講師、翌 47 年に助教授、1954 年には教授となって本講座の教鞭を執った。野上は 1973 年の定年退官まで、四半世紀にわたってわが国唯一のイタリア文学研究機関を主導し、1954 年には日本ダンテ協会(後のイタリア学会)の創設、1953 年からは『イタリア学会誌』を発刊させて、新進のイタリア学研究者を次々と世に送り出した。さらに 1972 年、当時の経団連に働きかけて、京大の隣接地に財団法人日本イタリア京都会館を竣工させ、その初代理事長を務めるなど、戦後のイタリア研究と日伊文化交流に大きな足跡を残した。本講座にとって、またわが国のイタリア語学文学研究にとって、野上は文字通りパイオニアであった。後に研究と教育の第一線で活躍することになる数多くの門下生が、本講座から巣立ち、わが国初の本格的な辞書『新伊和辞典』や、ダンテ、ボッカッチョを始めとする、イタリア文学の古典的作品が、野上自身やその門下生たちの手で次々と出版されたからである。また、野上は若い学生を常にさん付けで呼ぶ温厚な紳士であり、器の大きい大人なのか、それとも育ちのよい坊ちゃんなのか、俄に決めがた

い所があった。恐らくはその両方であったのであろう。また、彼のパイオニアとしての大きな幸運と成功は、生涯をパイオニアで終わるという小さな不運をその内に宿していた。

1968 年には清水純一が助教授に着任、1973 年には野上の後を受けて教授に就任する。清水は本学の文学科でなく、哲学科の出身で、ルネサンス哲学、特にジョルダーノ・ブルーノの研究者として知られるが、その学風は厳密な原典読解を基礎とする極めて実証的なものでありながら、同時に極めて大胆に独自の仮説を練り上げようとする面もあった。彼の登場とともに、西欧人の研究の後追いでなく、優れたオリジナル研究を目指すスペシャリストの育成が始まる。80 年には外国人教師のポストが新設され、イタリアから現役の大学人を次々と招くことができるようになった。このポストはいわばイタリアに直接開かれた学問の扉のようなもので、本専修とイタリアの大学人との活発な学術交流を可能にした。しかし、清水が着任したのは、不運にも学生紛争の勃発した年であった。学徒出陣あがりの清水は果敢に紛争の当事者として、学部長などの激務を引き受けた結果、持病をこじらせて、不自由な入退院生活を余儀なくさせられた。わが身を捨てて悔いない潔さと母校愛は、彼の心根を愛する同僚を周囲に集わせたが、彼自身の研究生活にはプラスにならなかったのである。清水は 88 年に定年退官し、その同じ年に他界した。

その間、清水をよく補佐して、実質的に本講座を切り盛りしたのは、1975 年に助教授として着任した岩倉具忠である。岩倉は清水の厳しい学風を受け継ぐとともに、新たな言語学的観点からの緻密な研究を志向し、ダンテの言語思想をテーマにして、大変慎重できめの細かい論証によって堅実な業績を残した。また、92 年からは総合人間学部でもイタリア語教育が開始され、1 回生からイタリア語を学ぶことが可能になった。本専修の研究者養成は、さらに 1 歩進んだ新たな時代を迎えたのである。



旭江文庫目録

岩倉の後任である齊藤泰弘は、1990 年に助教授として赴任し、岩倉が定年退官した 97 年に教授となった。齊藤はダ・ヴィンチの手稿の研究者として知られるが、同時に 18 世紀の劇作家ゴルドーニやイタリア演劇史全般を研究対象としている。99 年には天野恵を助教授に招き、研究と教育のいっそうの充実が図られた。天野はルネサンスの詩人アリオストの研究者として業績を上げており、現在ではリソルジメント期の文学者マンゾーニの作品研究にも勤しんでいる。そして、岩倉の代から始まって本専修の新しい伝統となった Lectura Dantis（ダンテ講読）は、その後、齊藤にも受け継がれている。

（齊藤泰弘記）

思想文化学系
哲学専修

本専修の前身、哲学哲学史第一講座（哲学）は、1906 年の文科大学の創設と同時に設置された。以来、哲学講座・専修は文科大学・文学部と共に年を重ね、本年開設 100 周年を迎えるが、その間、在籍した歴代教授・助教授は以下の 12 名を数える。桑木嚴翼（生没年 1874－1946: 教授在職期間 1906－14）、朝永三十郎（1871－1951: 助教授着任 1907:1913 年哲学哲学史第四講座（近世哲学史）教授に昇任）、西田幾多郎（1870－1945: 教授在職 1914－28）、田邊元（1885－1962: 助教授着任 1919: 教授在職 1927－45）、高山岩男（1905－93: 助教授着任 1938: 教授在職 1945.3 月－8 月）、山内得立（1890－1982: 教授在職 1945－53）、三宅剛一（1895－1982: 教授在職 1954－58）、野田又夫（1910－2004: 教授在職 1958－74）、辻村公一（1922－ : 教授在職 1974－85）、木曾好能（1937－94: 助教授着任 1973: 教授在職 1988－94）、伊藤邦武（1949－ : 助教授着任 1991: 教授在職 1995－）、出口康夫（1962－: 助教授着任 2002）。

戦前の西田幾多郎・田邊元両教授の下での、いわゆる「京都学派」の隆盛。その学派の後継者と目された高山岩男教授の公職追放。その後の学風の転換と変遷。「純哲」と称された本講座・専修の歩みは、単なる一教室の歴史を超えて、京都大学全体の歴史、ひいては日本の近現代思想史の重要な一コマともなっている。ためしに、時計台記念館の歴史展示室をのぞいてみよう。そこでは、西田・田邊の哲学的業績と、京都学派の哲学者たちの公職追放を巡るドキュメントが、湯川秀樹・朝永振一郎のノーベル物理学賞に輝く業績と並んで、京大の学問伝統を象徴する二本の柱の一つとして取り上げられている。また近年、竹田篤司氏が『物語「京都学派」』（中公叢書、2001）で、戦前から戦後にかけての「純哲」の歴史を、その周辺の人物のエピソードをも交えて描き、評判をとったことも記憶に新しい。

1913（大正 2）年頃の教官と学生。中央が西田幾多郎。右隣、朝永三十郎。左隣、桑木嚴翼。右後、天野貞祐。

このように長い伝統を持つ本講座・専修の歴史にかんしては、既に『京都大學文學部五十年史』（1956）や『京都大学百年史』（1997）に詳細な記述がある。そこで以下では、主として過去 30 年程の期間を念頭において、教室の歩みを振り返ってみることにしたい。

戦前から戦後にかけて、幾たびもの研究スタイルの変遷を重ねてきた哲学教室であるが、近年見られる大きな変化の一つは、ドイツ哲学の圧倒的な影響が弱まり、代わってフランス語圏や、特に英語圏の哲学の影響が強まってきていることであろう。初代の桑木教授から辻村教授まで、歴代スタッフの留学先は、かつてはドイツと相場が決まっていたが、木曾教授以降のスタッフの留学先は英語圏へと移ってきている。大学院生や卒業生の留学先に関しても同様の傾向が見られる。ドイツ語圏から英語圏へ。哲学のみならず科学の各分野において第二次大戦後、世界規模で起こったヘゲモニーの交替劇が、この教室の研究動向にも一定の影を落としているのである。

とはいえ本専修では、分析哲学を中心とする現代英米哲学の研究一辺倒というスタイルはとられていない。過去 30 年の講義題目や歴代スタッフの研究テーマを見れば、17 世紀の認識論や形而上学、イギリス経験論、ライプニッツ、カント、ドイツ観念論、ハイデッガー、アメリカのプラグマティズムといった近現代の古典的な哲学の研究が、現代哲学の最前線の研究とあいまって行われてきたことがわかる。古典的な哲学についての正確で幅広い知識を踏まえ、現代の哲学的な諸問題

に取り組むという姿勢が、近年の哲学教室においても基本的なスタンスとして採用されているのである。

また海外との交流が盛んなことも本専修の特徴である。研究室の大学院生や卒業生が英語圏・フランス語圏・ドイツ語圏の各大学に相次いで留学しているのみならず、海外から本教室に学びに来る学生も跡を絶たない。さらに長期・短期さまざまな形で研究室を訪れる海外の研究者も数多い。例えば 2000 年以降に限っても、ウェスリー・サーモン教授（ピッツバーグ大学）、ヒュー・メラー教授（ケンブリッジ大学）、グレアム・プリースト教授（メルボルン大学）、ドナルド・ギリス教授（ロンドン大学）が相前後して本専修に数週間から数ヶ月間滞在し、専門家向けの講演や学生向けのセミナーを数多く行うことで、本教室の学生・院生のみならず日本の学界一般に対しても少なからぬ影響を与えた。このような国外の研究者との直接の交流は、2002 年から始まった文学研究科 COE プロジェクトによって、より一層、進展している。

本専修は、文学部の哲学思想系の専修の中では昔も今も変わらぬ大所帯であり、多くの学生・院生・OD を抱えている。そのせいもあり、読書会など、学生・院生の間での自主的な研究活動が盛んなことも、本教室の特徴の一つとなっている。そのような教室内の研究活動の反映として、哲学専修では、近世哲学史専修と協同で、大学院生が主体となり、1974 年以降、雑誌『哲学論叢』を年一回刊行しており、同誌は 30 年以上の歴史を重ねるにいたっている。また 1997 年からは、哲学専修の紀要として『Prospectus』が新たに発刊され、哲学プロパーの研究のみならず、応用哲学的

現在の教員・大学院生（2003 年）

なトピックや現代文化一般についての思索の発表の場となっている。昨今は、修士課程の院生も論考を進んで寄稿するなど、これらの雑誌を舞台とした院生の研究活動はますます盛んになりつつある。

さらに文学部の大学院重点化の結果、本専修でも課程博士論文の提出とそれに対する博士号の授与が積極的に行われるようになり、その数は今日までで 14 名にのぼる。また選ばれる研究テーマも、デカルト・スピノザ・ロック・ヒューム・カント・ヘーゲル・ラッセル・ウィトゲンシュタイン・西田とハイデガーの比較研究・現代の論理学の哲学と多岐にわたっている。

一つの言語圏にとらわれない哲学史の深い理解、さらには科学や宗教・東洋思想をはじめとする他の学問や思想伝統に対する開かれた目。これらを十分身につけた上で、自らの哲学的な立場を築くこと。これこそが、対象となる哲学の分野や置かれる力点は異なっていても、わが「純哲」が国内外に誇る戦前・戦後を一貫した研究姿勢である。このようなオーソドックスだが本格的な哲学研究の姿勢は、西田・田邊の時代から長い歴史を経て、今日でも若い院生・学生に脈々とそして着実に受け継がれつつあるのである。

（出口康夫記）

西洋哲学史専修

京都大学における西洋哲学史の研究と教育の歴史は、1906年の文科大学開設時に哲学哲学史第一講座において西洋哲学史が講ぜられたことに遡る。それ以来、哲学研究と哲学史研究は、制度のうえでも内実においても密接な連携のもとにおこなわれ、そのことがまた京都大学における哲学研究の一つの特色ともなっている。

講座としての歴史は、1912年、哲学哲学史第四講座が第二講座（印度哲学史）、第三講座（支那哲学史）についで開設され、そして1913年1月、朝永三十郎が教授に昇任してこの講座の担当となり近世哲学史を講じたこととともに始まった。その後1927年の第五講座（古代中世哲学史、のちに古代哲学史）開設、1947年の第六講座（中世哲学史）の開設により、古代・中世・近世のそれぞれに担当講座を構えるという、日本では他に例を見ない充実した体制が確立された。このような時代区分に対応した研究体制は、現在でも三つの研究室から構成される西洋哲学史専修として基本的に継承されている。

このような歴史をもつだけに、制度の改変と歴代のスタッフの名前と業績を紹介するだけで、与えられた紙面が尽きてしまうが、おおよその変遷は、下の表のようになる（括弧内は、在任期間）。

本講座・専修は、以上のようなそれぞれに個性的な教授陣のもと、優れた人材を排出し、また重要な研究成果を生み出してきた。本講座・専修に在職時に主要な仕事をおこなったスタッフの業績を振り返るなら、朝永三十郎による着実で平明な近世哲学史研究、九鬼周造の現代哲学への深い理解と清新な哲学的分析、山内得立による古代と中世哲学に関する先駆的業績が、本講座の礎を築いたと言える。戦後はその成果を踏まえつつ、三講座体制のもとで、歴史的実証をより重視した研究が展開されてきた。

古代においては、田中美知太郎がプラトンを中心として日本における本格的な古代哲学研究を開始し主導するとともに、藤澤令夫がこれを継承発展させて、すぐれた専門研究を次々と公にし、現代におけるプラトン哲学の意義を提示した。その成果は『田中美知太郎全集』と『藤澤令夫著作集』に集約された業績、そして二人の共同編集による『プラトン全集』に明らかである。藤澤の跡を継いだ内山勝利は、初期ギリシア哲学とプラトンの研究に成果を上げ、また『ソクラテス以前哲学者断片集』を編集・翻訳し刊行した。現在では中畑正志が、プラトンとアリストテレスおよび後期古代哲学をその後の哲学の展開と現代哲学の動向を視野に入れながら解明している。

中世哲学史においては、高田三郎がスコラ哲学

第四講座開設（1912）
朝永三十郎（1913－31）
天野貞祐　（1928－35）
九鬼周造　（1929－41）
（高坂正顕　授業担当 1942－47）

野田又夫（1947－58）
西谷啓治（1958－63）
辻村公一（1962－74）
酒井　修（1975－89）
薗田　坦（1989－2000）

第五講座開設（1927）
西田幾多郎（兼担 1927－29）
山内得立（1929－1947）

田中美知太郎（1947－65）

藤澤令夫（1963－89）

内山勝利（1988－2005）

第六講座開設（1947）
高田三郎（1947－1966）

山田　晶（1965－85）

山本耕平（1984－2001）

大講座化（1995）・**「西洋哲学史専修」へ改組／大学院重点化**（1996）
小林道夫（2004－）
福谷　茂（1997－）

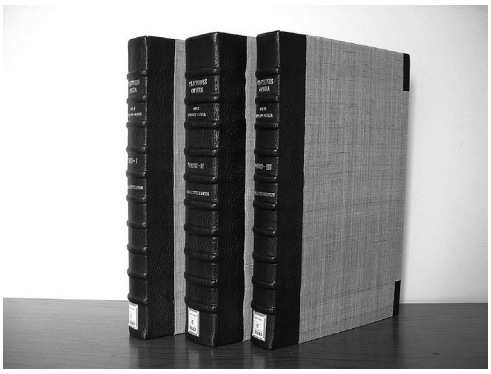
中畑正志（1995－）

川添信介（1996－）

を中心として綿密な研究を行い、アリストテレスの翻訳と並んで、とりわけトマスの『神学大全』の翻訳刊行という大企画に主導的な役割を果たし、日本の中世哲学研究の水準を大きく高めた。つづく山田晶は、アウグスティヌスとトマスの思想を解明した『中世哲学研究 4 部作』が示すように、原典の緻密な読解を通じてそれぞれの思想の根底にあるものを剔出し、また中世哲学の魅力を広く一般にも知らしめた。山本耕平も、トマスの思想に誠実に取り組み、諸論文や新訳を刊行した。現在では川添信介がスコラ哲学を中心に柔軟な視点からの研究を進めている。

近世哲学史は、先の系譜図が示すように、戦後しばらくの間スタッフの出入りが比較的多く、デカルト研究に目覚ましい成果を上げた野田又夫、宗教哲学の泰斗西谷啓治、ハイデガー研究を主導した辻村公一らの業績は、他の専修の記述に譲らざるをえない。辻村のあとを受けた酒井修は、広く近現代哲学をさまざまな関連から考察し、とりわけヘーゲルの研究に重要な成果を上げた。ついで薗田坦は、ルネサンス期思想や近世哲学にわたって広く論じ、とりわけやベーメをはじめとした宗教思想や神秘主義思想などの西欧近世思想の地下水脈の研究と翻訳紹介という貴重な業績を残した。現在は、国際的デカルト学者である小林道夫が近代から現代哲学まで精力的に仕事をおこない、また福谷茂が精密なカント研究とともに新たな近世哲学史像の構築を試みている。

また、1968 年に古代哲学研究誌『Methodos』が発刊されたのち、『古代哲学研究室紀要



1578 年刊行のステファヌス版『プラトン全集』（田中美知太郎氏寄贈、2003 年に修復）。プラトンのテキストの指示はこの版の頁づけに依る。

Hypothesis』、『中世哲学研究 Veritas』、『近世哲学史研究』などそれぞれの時代の専門研究誌が次々と発刊され、院生や OB が研究成果を発表し議論しあう場を提供している。

最近では、院生の多くが欧米諸国に留学するようになり、また毎年のように海外から著名な研究者が来日して講演やセミナーをおこなうなど、国際的交流はいっそう活発となっている。さらに、西洋哲学史という構想自体の見直し、歴史区分の再考、あるいは歴史記述の方法をめぐる反省などの最近の研究動向に注意することも、哲学の歴史を研究する者の義務となりつつある。しかしこのような新たな状況のなかでも、三講座による分担と相互の緊密な連携という微妙なバランスの保持、そしてテキスト読解の厳密と哲学的分析の明晰を期し、そこから哲学の基本問題を解明しようとする本講座・専修の基本姿勢は、かわることなく継承されて行くであろう。

（中畑正志記）

日本哲学史専修

日本哲学史専修は文学部・文学研究科のなかではもっとも新しい研究室の一つである。日本の大学・大学院改革の波のなかで、1995 年に京大文学部に、そして翌年大学院文学研究科に設置された専修である。

日本思想史という名前を冠した専修や専攻は日本のいくつかの大学にあるが、日本哲学史という名前を持つ専修は本専修のみである。前者の専修や専攻が古代から中世、近世にいたる日本思想の歴史を主たる研究対象としているのとは異なり、本専修では明治以降の日本の哲学の形成と発展に研究の力点を置いている。つまり西洋の思想・哲学に出会った明治以降の日本の思想家が、そのなかに何を見出し、何を問題にしたのか、そしてその受容と対決のなかからどのようにして独自なものを生み出していったのか、そのプロセスを主な研究対象としている。

1995 年に本専修が設置されたということを述べたが、それは、第二次世界大戦の終結から数えれば、ちょうど五十年後のことである。いま述べた点に力点を置く専修がなぜ戦後五十年を経て作られたのであろうか。おそらく多くの要因があったと考えられる。戦前には、まさに日本の哲学そのものが形成と発展の途上にあったのであり、それ自身が研究の対象にはなりえなかったと言うことができるであろう。それに対して戦後は、それを研究の対象とすることはもちろん可能であったと思われるが、実際にそれが研究されることは決して多くはなかった。日本の哲学に関する研究が戦後敬遠されたことには、おそらく戦時期、哲学界をリードしていた京都学派の哲学者たちが時局に対して積極的な発言を行ったということが関わっていると考えられる。実際の意図が、歴史を、それが歩もうとしていた方向とは違った方向に導くことであったとしても（たとえば西田幾多郎の場合、1940 年に出版された『日本文化の問題』において、日本の「主体化」、つまり「帝国主義」化にはっきりと反対の立場を表明している）、その意図を貫徹することができず、結局、歴史の流れのなかにのみこまれてしまったことは否定できない。

そのことが戦後、日本の哲学の歴史を正面から論じることを避ける風潮を作ってきた。あるアメリカの研究者は、その状況を "throw out the baby with the bath water"（産湯といっしょに赤ん坊を捨てる）という言葉で言い表しているが、戦後の思想状況を的確に表した言葉であるように思われる。

重要なのは、もちろん「赤ん坊」をもう一度拾い上げることであるが、しかしその「赤ん坊」がつかった「産湯」がどのようなものであったのかを検討しておくこともわれわれにとって大切な問題であろう。当時の哲学者たちの発言の意図がどこにあったのか、彼らの主張したことが時代のなかでどのような役割を果たしたのか、そのようなことを事柄それ自体として問題にしておかなければならない。われわれ自身がふたたび同じ「産湯」を使うことがないようにするためにである。

それとともに大切なのは、言うまでもなく、「赤ん坊」を拾い上げること、そして育て上げることである。つまり、彼らの哲学そのものが持つ意義について議論し、検討することである。それは、一方では彼らの哲学が歴史的に持ちえた意義を明らかにすることであるし、また他方では、現在われわれとわれわれの時代が直面する問題との関わりにおいてそれらの哲学が持つ意義を明らかにすることである。さらに、そこから示唆を得つつ、いま言った問題、つまりわれわれとわれわれの時代が直面する問題の解決をわれわれ自身の課題として追求していくことも大切な課題である。

そのような課題を果たすべく本専修は作られたのであるが、それが戦後五十年を経て開設されたというのは、まさにその五十年という時によって、西田幾多郎や田辺元の哲学を ── 戦争中の発言を

も含めて ── 客観的に評価するだけの隔たり、つまり、その思想とそれが時代のなかで果たした役割とを、それへの思い入れや反感から離れて、それ自体として問題にするだけの距離が生みだされたということなのかもしれない。デカルトやカントの哲学と同じように、それらの哲学が研究されるようになったということであろう。もちろん単に歴史的な関心からだけではなく、いま述べたように、現在われわれとわれわれの時代が直面する問題との関わりにおいてそれを考察するという視点もまたなければならないであろうが。

本専修は「日本哲学史」という名前を冠しているが、日本の哲学だけに、あるいは日本の哲学者の思想的な営みだけに研究の対象を限定し、その枠のなかだけで議論することを目ざしているのではない。

むしろそのような枠を取り払い、たとえば経験や言葉、自己や他者、行為や歴史といった問題を、「日本」という枠を取り払った広がりのなかで、言い換えれば、普遍的な思想空間のなかで問題にしたいと考えている。哲学という思想的営為にとって大切なのは、事柄そのものに迫ることであり、枠を限定することではないからである。

もちろん思想の営みもまた、それぞれの言語を用いて、そして長い文化の伝統のなかでなされるのであり、それぞれのアプローチが異なったものになるのもまた当然のことであろう。それぞれがそれぞれの長い歴史のなかで形作られてきた自然

京都学派の歴史を展示した京大創立百周年記念展覧会

理解や歴史理解、人間理解を踏まえて答を出すのであり、そうしたものからまったく遊離した ── 言わば無菌の ── 時空間のなかで思索をするわけではない。

そのことは、哲学という思想的営為がはじめから「対話」ということを求めるものであるということを意味するであろう。それぞれの文化の伝統のなかで紡ぎだされた思索を突きあわせ、そのなかで共有できるものを見いだしていくこと、あるいは、共同して一つの理解を作りあげていくこと、そのことが哲学の営みと切り離せないように思われる。そのような対話の遂行において、日本の文化的伝統を踏まえた答もまた、おそらく重要な寄与をなしうるにちがいない。自ら枠を設け、そのなかに閉じこもるのではなく、開かれた空間のなかで思索することを、「日本哲学史」という名前のなかに込めている。

（藤田正勝記）

倫理学専修

倫理学専修は1906年の文科大学創設と同時に哲学科の一講座として設置された。旧制帝国大学時代の担当教官は、狩野亨吉（在任・1906－1908）、友枝高彦（1908－1914）、桑木嚴翼（1909－1910・哲学講座と兼任）、西田幾多郎（1910－1913）、藤井健治郎（1913－1931）、千葉胤成（1917－1923）、和辻哲郎（1925－1934）、天野貞祐（1935－1944）、島芳夫（1936－1966）である。このうち、狩野、桑木、藤井、和辻、天野の4教授が歴代の主任教授を務めた。

狩野は、帝国大学文科大学、理科大学において哲学と数学を修め、第一高等学校校長などを経て、初代京都帝国大学文科大学学長に就任したが、在野から内藤湖南や幸田露伴を教授として招聘するなど、京大文学部の独自の学風の礎を築いた。わずか2年での辞職は、文部省との軋轢が原因であるともいわれる。その後は一切の公職に就かなかったが、安藤昌益や志筑忠雄などを発掘したことなどによっても有名である。藤井は、カントを中心とした倫理学を講じたが、倫理学と社会科学との関連も重視した幅の広い研究を行い、研究室の基礎を確立した。主たる業績は『藤井博士全集』全8巻に収められている。和辻は、西洋倫理学のみならず、日本精神史の源流としての中国、インドの思想への遡及的研究を行うとともに、後に「人間の学としての倫理学」として知られることになる独創的な倫理思想を築いた。天野は、カント哲学の権威であり、その『純粋理性批判』の名訳によって著名であるが、ヒューマニズムと合理主義の立場からの青年向けの評論活動も盛んに行い、戦後は文部大臣としても活躍した。

新制京都大学においては、島芳夫、保田清（1950－51）、森口美都男（1965－1985）、西谷裕作（1974－1990）、内井惣七（1991－1994）、加藤尚武（1994－2001）、水谷雅彦（1996－）が教鞭を執った。

島は、旧制文科大学以来、実に30年にわたって研究室での指導にあたり、多くの倫理学研究者を育てた。その研究は、美学出身の島らしく人間の情意的側面に着目する独自の倫理思想研究を中心としつつも、デュルケムなどの道徳社会学を取り入れた実証的倫理学の領域にまで及ぶ広範囲なものであった。主著に、『行為の全体的構造』、『道徳史学』、『人間性の倫理』、『倫理学通論』などがある。また、島の業績は、多くの門下生と共に戦後日本における倫理学研究の基盤を形成したことにもあり、とりわけ同人の尽力により1950年に創設された関西倫理学会は、東大を中心として結成された日本倫理学会に先がけた倫理学の専門学会として現在まで継続されている。

島の後任であった森口は、いわゆる「大学紛争」時の負傷の後遺症に苦しみつつも、驚くべき熱意で教育研究を遂行した。その研究は、カントを中心としつつ、イギリス経験論やルソーからベルクソンまでのフランス思想、さらにはオルテガ、ヴェイユ、ピカートといった現代思想にまで広がっており、現在に至る研究室の間口の広さを形成したといってよい。その主な業績は、『哲学論集』全3巻に収録されている。病身の森口を助けた西谷は、中世哲学やライプニッツなどの近世哲学を中心とした該博な哲学史的知識と卓越した語学力により、多くの学生指導に貢献した。

その後着任した内井は、これまでになかった分析的倫理学の手法を研究室にもたらした。内井は、倫理学上の主著である『自由の法則・利害の論理』において、社会契約論や功利主義の系譜を詳細に検討し、経験主義的倫理学の歴史的体系を構築したが、後には『進化論と倫理』にみられるような、倫理を進化論的観点から解明するという日本ではほとんど手つかずであった新しい研究領域を切り開いた。その後内井は、進化論のみならず、『アインシュタインの思考をたどる――時空の哲学入門』などの相対性理論を中心とする空間時間の哲学や科学者の倫理にまで研究を広げ、元々の専門

のひとつであった科学哲学や論理学における教育研究を京都大学に根づかせるために、1993 年に新設の科学哲学科学史研究室の初代教授として移籍し、2006 年停年退職した。

次に着任した加藤は、『ヘーゲル哲学の形成と原理』などで知られるドイツ観念論の研究者であったが、もう一方では、いわゆる「応用倫理学」という研究領域を日本で開拓した研究者として著名である。その著書は、生命倫理学や環境倫理学、ビジネス倫理学など、多岐にわたって多数あり、そのいずれもが日本における応用倫理学研究の基本文献となっているが、京大在任中の特筆すべき仕事としては、1995 年から研究室内外のメンバーを結集して行った、文部省科学研究費創成的基礎研究「ヒトゲノム解析研究」の一翼を担う「ヒトゲノム解析研究と社会との接点」に関する共同研究を組織したことをあげることができる。加藤は、2001 年の停年退官後は、新設の鳥取環境大学の初代学長として着任するとともに、日本哲学会会長としても学会に貢献した。伝統的な倫理学研究と応用倫理学研究の両輪という研究体制は、1996 年に着任した水谷にも引き継がれた。水谷は、現象学的観点からのコミュニケーションと倫理に関する研究とともに、情報倫理学という新しい研究領域の開拓を、1999 年から 5 年間にわたって実施された日本学術振興会「未来開拓学術推進事業」の一環である「情報倫理の構築」プロジェクトにおいて遂行した。

以上のような歴史を経て、現在の倫理学専修における教育研究は、伝統的な倫理学研究に加えて、道徳的言語の論理的分析に関するメタ倫理学的研究、そして応用倫理学研究の三本柱から成り立っており、特に大学院生にはそのすべてにわたるトレーニングが科せられている。とはいうものの、修士論文や博士論文のテーマとして取り上げられるものは、ほとんどが倫理学史上の主要な人物に関するものであることは変わりはない。そしてその範囲が英独仏の近世から現代までの広い範囲にわたっていることも本専修の特徴である。新制の課程博士号を取得した者の扱ったテーマとしては、カント、ライプニッツ、シジウィック、ヘーゲル、ヒューム、ベンタムなどがある。

本専修は教員定員という面からみれば全国でも最小規模の倫理学専攻の研究室であるが、その大学院修了者は北は北海道から南は九州までの多くの主要大学において教鞭をとっており、日本における倫理学研究においてつねに主導的役割を果たしてきたといってよい。研究室では、先に述べた三本柱のテーマに関する研究会が常時開催されているとともに、2002 年以降は文学研究科における 21 世紀 COE プログラムの一環である「現代科学・技術・芸術と多元性の問題」研究が行われている。また、大学院生と卒業生の研究発表の場として 1978 年に創刊された学術雑誌『実践哲学研究』は、第 28 号を数えるに至っている。

（水谷雅彦記）

宗教学専修

1907 年 5 月に宗教学講座が設置され、哲学・哲学史第二講座（印度哲学史）の教授松本文三郎が兼担となって開講したのが、宗教学専修の発端である。1913 年に西田幾多郎が最初の専任の教授となったが、翌年に哲学・哲学史講座に移り、再び松本の兼担となった。1917 年に波多野精一が教授となり、この波多野によって、本専修の土台が築かれることになった。

つまり、それまで行われた講義題目や学生の研究題目は、仏教史や仏典研究、キリスト教教理史や聖書研究、カントやシュライエルマッハーなどの宗教哲学研究、宗教心理学的・宗教社会学的研究など多岐にわたっており、本講座は宗教研究を包括的に行なうという性格の強いものであった。ところが、波多野の教授就任によって宗教哲学を柱とするという方針が確立された。波多野は西洋哲学史および西洋宗教思想史に深い造詣をもち、ドイツ宗教史学派の影響下で原始キリスト教研究の卓越した成果を世に示した。そしてそれらを基盤にして、彼の独自の宗教哲学を完成した。

1936 年から助教授であった西谷啓治が、波多野の退官後、1943 年に教授となるが、その在任時に本講座は学界の宗教研究の新たな動向とも相俟って、新しい展開を示すことになった。学界では、特殊的研究の分化が次第に進み、研究内容がより専門的になっていく動向があり、それに伴って、本学部の宗教学第二講座（基督教学講座）、第三講座（仏教学講座）が特定の宗教の専門研究としての性格を充実した仕方で打ち出すようになってきたが、この動向は本講座に対しても宗教哲学研究のよりいっそう専門的な深化を要求するものであった。

波多野の掲げた「宗教的体験の理論的回顧、それの反省的自己理解」としての宗教哲学は宗教的体験を前提するものであり、宗教的体験は一般に特定の宗教のなかで成立する。この意味での宗教哲学が扱う事象は、個々の実定宗教における事象を超えることはない。しかし、西谷は宗教哲学しか扱うことのできない事象、まさにそれを問うべくして宗教哲学が成立したところの事象があると考える。それは、近代において宗教を否定する立場や宗教に無関心な立場が出てきた所以の事象であり、それ故またそれは、近代以降において宗教の立場が成立し得る所以の事象でもある。現代では、宗教というのはそこから考察を始めることのできる自明の所与ではなくなっており、宗教哲学の思考の射程は、無神論やニヒリズムにまで及び、それらが近代という歴史的境位と結びついている限り、その歴史的境位の根底に潜む問題にまで拡がらなければならない。このような考え方にもとづいて西谷は宗教そのものとしての宗教をどこまでも問い詰める思索を行ない、言葉の本来の意味できわめて哲学的であると同時に、仏教語を自在に用いて実在の根源に迫る独創的な宗教哲学を創出した。西谷の著作は現在英語、ドイツ語、イタリア語、スペイン語に翻訳されており、西谷は、西田幾多郎、田邊元に続く京都学派の哲学者として世界的に注目されつつある。

西谷は 1947 年に占領政策によって一時退官し、仏教学講座の教授久松真一、基督教学講座の教授有賀鐵太郎が一時兼担した後、1952 年に復帰した。1948 年助教授となった武内義範が西谷のあとを承けて、1959 年に教授に任ぜられた。

田邊元の門下生であった武内は、ヘーゲル研究で培った哲学的思索力により浄土教思想に新しい解釈を示したが、それは単に新しい解釈であるに留まらず、現代のニヒリズムのなかでの信心の可能な有りようを徹底的に思惟し抜き、浄土教そのものの現代的展開を懐胎するものであった。武内はまた、原始仏教の研究に現代的な意味での哲学の位相を拓き、宗教現象学の新たな構想を描いた。この武内の研究領域の広がりは、学生の研究にも大きな影響を与え、この時期の本講座出身者には人類学や民俗学、ジェンダー論など多彩な分野の

研究者が含まれている。

1976 年に退官した武内のあとを承けて、翌年教授に就任したのは上田閑照であった。マールブルク大学に留学し、ドイツ語で発表された上田のエックハルト研究はドイツで高い評価を得、西谷が先鞭をつけた日本人のドイツ神秘主義研究の水準を一気に押し上げた。その研究を踏まえてなされた上田の禅仏教の研究は、講義に出席した学生たちを直ちに魅了するほど透徹したものであった。またその透徹した禅の把握を踏まえてなされた、西田幾多郎の諸著作の新たな読解は、西田哲学の再評価を内外に導いた。そして、このような専門研究に基づいて、「二重世界内存在」という独自の思想を展開して、上田は海外でも西谷啓治に続く京都学派の哲学者という位置づけを得つつある。

上田は 1989 年に退官し、既に 1976 年から助教授であった長谷正當が教授に任ぜられた。ベルクソン研究から出発した長谷は、これまで本講座で手薄だったフランスの哲学思想を講じ、学生たちの間にフランス現代哲学を研究する者が増大した。リクールに倣って、人間の自由や超越へと向かう働きを象徴との関わりの中で捉えようとする長谷の試みによって、自己の究明へと真っ直ぐに向かう傾向のあった本講座の宗教哲学的思索は、言葉や形像の世界の豊かさに目を開いたと言える。言葉や形像の世界への注視は欲望や衝動の領域の奥行きを開くものであり、長谷は浄土教世界のなかに欲望の霊性的次元を看取するというきわめて独創的な浄土教研究を展開するに至った。

1937 年洋行祝賀会、前列中央が波多野精一、その左が西谷啓治

長谷は 1999 年に退官し、翌年氣多雅子が教授に任じられ、1998 年に助教授となった杉村靖彦と共に、現在学生の指導に当たっている。

宗教学講座は、1996 年の大学院重点化に伴う変革によって哲学・宗教学講座宗教学専修となったが、講座の根本の精神は一貫して受け継がれている。西谷が打ち出した研究の方向は、武内、上田、長谷によって深められ、受け取り直され、その軌跡から浮かび上がってくるのは宗教哲学という思索の可能性を徹底的に追究するという本専修の特色である。

（氣多雅子記）

キリスト教学専修

本専修は 1922 年 5 月、宗教学第二講座（基督教学）として設置された（1977 年度以降表記は「キリスト教学」に改められている）。宣教を根本において目的とするキリスト教神学とは区別され、純粋に学術的批判的見地からキリスト教を研究することを主眼とするキリスト教学は、世界的にも最も早い成立に属するものである。厳密な学的性格を高めるために、自らに対する批判的姿勢を厳しく保とうと努めている欧米のキリスト教研究の向かうべき方向をキリスト教学は先駆的に示しているとも言える。日本の大学の中でもユニークであり、国立大学の中では「キリスト教学」専修は唯一である。

キリスト教についての講義に関して言えば、1907 年に創設された宗教学講座において、既にギューリック（Sidney Gulick）講師、日野真澄講師によるキリスト教教理史、教会史の講義がなされていた。しかし専任者によるキリスト教学の授業がなされたのは、1917 年に波多野精一（1877－1950）が早稲田大学より、宗教学担当教授として迎え入れられた時からである。波多野はドイツ留学中にヴァイス、ブーセット等の宗教史学派の原始キリスト教研究に触れ、またオイケンの宗教哲学に深い影響を受け、1908 年に「キリスト教の起源」を著していた。京大に来てからは、原始キリスト教、パウロ、ヨハネの宗教思想、宗教思想史について講じた。文学部においてキリスト教研究の重要性が深く認識されていたことがここに示されている。大正 7 年の頃から富士見町教会員の渡辺荘の寄付金を基にしたキリスト教講座の開設の希望が寄せられ、波多野の長年に渡る精力的な説得活動、西田幾多郎等による側面支援の結果、1922 年 5 月宗教学第二講座として基督教学が設置された。波多野は原始キリスト教、殊にパウロ、ヨハネの宗教思想を講じ、またギリシアからドイツ・イデアリスムスまでの宗教哲学思想に関して思索を深め、後に『宗教哲学』『時と永遠』等の著作に結実させている。波多野の原典に基づく厳密なテキスト解釈と深い宗教哲学的思索とが本専修の礎石を据え、以後伝統として受け継がれて行くことになる。波多野は 1927 年、本専修の兼担を解かれて分担となったが、キリスト教学が独立講座としての経済的要件を満たすに到った 1937 年 3 月宗教学第 1 講座担任を辞して西谷啓治に託し、基督教学の担任者となった。基督教学は始めて専任教授をもつこととなった。しかし同年 7 月波多野は停年退官し、1948 年まで講座担任者がいない状態が続くことになった。

講座担任者のいない中、講座を守ることになったのは、1924 年から講師をつとめていた山谷省吾と 1937 年講師となった松村克己とであった。山谷の主たる研究分野は新約学であり、原始キリスト教に関する講義を行った。松村はアウグスティヌス研究から出発し、キリスト教信仰の論理的究明に力を注ぎ、「キリスト教の神観」等の講義を為し、1942 年には助教授に任じられた。しかし山谷は 1946 年に退職し、松村も同年占領政策に基づく休職を命じられ、やがて退職するに至った。

1937 年以来担任者を欠いていた基督教学は、1948 年、有賀鐵太郎（1899－1977）を同志社大学より迎え、新しい出発をすることとなった。『オリゲネス研究』（1943）等により教父思想研究者として知られた有賀は、キリスト教古代のヘレニズムとヘブライズムとの歴史的究明に力を注ぎ、キリスト教思想の根底に、ギリシアの存在論とは異なる、ヘブライズムに淵源する独特の “有” の思想、ハヤトロギアがあることを解明した。有賀の古代キリスト教研究により、教父学を専門とする学生が出始め、本専修の特色の一つを形成することとなった。

有賀が 1962 年停年退官した後、同年 11 月、1957 年以来本専修の助教授であった武藤一雄が教授に任じられた。武藤はキェルケゴールの研究

より出発し、師である田辺元の『キリスト教の弁証』の問題意識を引き継ぎ、個的実存の深まりと普遍的共同性の広がりの相即するキリスト教の新たな可能性を求め続けた。『神学と宗教哲学の間』（1961 年）で神学とは異なるキリスト教学の理念と方法の基礎付けを行った。哲学的問に答えを与える神学という立場をも越えて実存的問に徹底しうる学としてのキリスト教学の基礎付けである。この時代から専攻学生も増え、多様な研究が模索されてゆく。

1977 年停年退官した武藤の後を受け、1975 年助教授に任じられていた水垣渉が、教授となった。水垣は『宗教的探求の問題 ── 古代キリスト教思想序説』（1984 年）でキリスト教思想の成立と形成の根本動機を「探求」に求め、ヘレニズムとヘブライズム、哲学と宗教が交わる核にあるものを「探求」として捉える卓抜な視点を提起し、本専修の課題 ── 宗教的歴史的経験と哲学的思索の総合 ── を研究方法として具体化させる道を提示した。

1998 年 3 月停年退官した水垣の後、アウグスティヌスを主に古代キリスト教思想を研究する片柳榮一が 1999 年 4 月（1998 年度は神戸大学教授として併任）から教授に迎えられた。片柳はアウグスティヌスを中心とする古代キリスト教思想を研究することを通して、本専修の課題に迫ろうとしている。また 1995 年より助教授に任じられた芦名定道はドイツの宗教哲学者ティリッヒの研究を主に、幅広く現代のキリスト教思想を研究している。

有賀鐵太郎教授（右）武藤一雄教授（左）、1960 年（中央は P. ティリッヒ教授）

キリスト教の歴史的生成とその本質の理解を目指すキリスト教学は、旧約学、新約学、古代から現代に至るキリスト教思想史、神学思想、宗教哲学などの幅広い範囲をカバーするもので（欧米の大学ではこの研究のために 50 名以上の研究者を擁する、一つの学部を設けている所が多い）、ヘブライ語、ギリシア語、ラテン語等の古典語、また近代諸国語による原典講読の機会を設け、また講義を通してキリスト教学の現状と課題を検討することを通し、学ぶ者にキリスト教学研究の何たるかを知ってもらうよう心掛けている。

本専修は、学界においてもユニーク、且つ重要な位置を占めている。有賀鐵太郎が発足に尽力したキリスト教学の総合学会としての「日本基督教学会」（1952 年発足）には、本専修の多くの卒業生が属し、中心的に活躍している。また本専修関係者によって「京都大学基督教学会」が組織され、『基督教学研究』（1978 年発刊、年一回）が刊行されている。

（片柳榮一記）

美学美術史学専修

本講座が開設されたのは1909年5月である。しかし、講座担当に予定されていた深田康算（1878－1928）が、当時なおヨーロッパに留学中であったため、当初は、心理学講座教授の松本亦太郎が講座の事務と学生の指導に当たり、西洋文学講座教授の藤代禎輔が美学の講義を担当した。深田は、1910年10月に帰国後、ただちに教授に着任。これをもって、本講座の本格的な活動が始まった。深田は、東京の大塚保治と並んで、我が国におけるアカデミックな美学研究のパイオニアとして斯学の礎を築き、その多岐にわたる仕事は、彼の没後ほどなくして、中井正一らの弟子たちによって全4巻の全集にまとめられている。深田は、カントの『判断力批判』の本邦初の翻訳を企てるなど、西洋の美学理論の研究を進める一方で、芸術作品そのものについても深い関心を示し、西洋美術史、芸術批評史に関する講義を行った。

文科大学が文学部と改称された1919年には、本講座の第一回卒業生であり、『国華』の編集に携わった澤村専太郎（1884－1930）が助教授として着任した。これによって、本講座において、美学・芸術学の研究に加えて、美術作品を歴史的に研究するための環境が整えられることとなったのである。日本美術のみならずインド美術にまで及んだ澤村の広汎な仕事も、やはり彼の没後、弟子たちによって、『日本繪画史の研究』と『東洋美術史の研究』として刊行された。

このように草創期における深田と澤村の活躍を通じて、本講座には、各種芸術学を含む美学理論の研究と歴史研究とを密接な連携のもとに進め、具体的かつ個別的事実にもとづきながら普遍的本質を尋ねることを理想とする独特の学風が形成されるようになった。深田の後継者として1929年に教授に就任した植田寿蔵（1886－1973）は、まさにそのような理想を追求した研究者であったと言えるだろう。植田は西洋美術を中心とした美術史研究を出発点としつつ、芸術の理論研究に取り組み、独自の美学体系を生み出した。芸術の自立的研究の立場を確立したその研究は、近年再び注目を集めている。

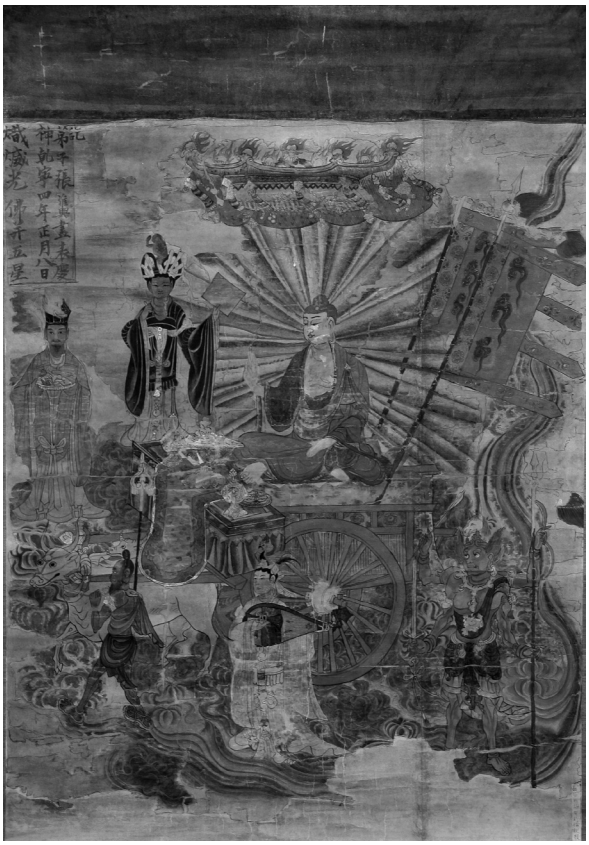
発足時、本講座は1講座のみであったが、その研究分野はきわめて広汎多岐にわたり、また専攻学生数も増加したことから、これでは不十分なことが痛感されていた。しかし、講座増設が認められたのは、戦後、新制大学が発足した後の1956年、植田の後任の教授井島勉（1908－78）の在任中である。そして、その翌年に、蓮実重康（1904－76）が第2講座の助教授として迎えられた（1960年教授昇進）。こうして、第1講座の美学理論（各種芸術学を含む）研究、第2講座の美術史研究を車の両輪とする、本講座の研究体制が制度的にも確立したのである。以降、吉岡健二郎（1926－2005）、岩城見一が第1講座の、そして、上野照夫（1907－76）、清水善三、佐々木丞平が第2講座の教授を担当した。1996年の大学院の重点化に伴い、大講座制となり、新たに、地域および時代を超えた広い視野からの芸術の研究を行う比較芸術学の分野が設けられ、宮島久雄がその教授に着任し、そして、2003年には、美術史学担当の助教授であった中村俊春が同教授となった。また、2005年4月には、助教授の根立研介が、佐々木の後任として美術史学担当の教授に昇進した。

ところで、戦後、人文系の学問分野においても専門分化が顕著となったことは周知の通りである。このような状況下、大学によっては、従来一体化していた美学美術史学講座を、哲学系の美学・芸術学関係の講座と歴史系の美術史関係の講座に分離し、二つの独立した講座に組織替えを行った。このような潮流に抗して、本講座は、理論研究と歴史研究との連関を重視する立場から、敢えて、困難を承知で、両者の連関を密にするように運営されてきた。新設の比較芸術学もその中に組み込まれた。今日、知の体系の新しいあり方が求めら

れる時代を迎えて、大きな枠組みを保持してきた本講座には、芸術を中心としつつ、多様な文化現象に対応して、新たな研究領域を切り開くための大きな可能性が開かれていると言えるであろう。

本講座の出身者の多くが、国内外の大学、美術館、博物館等に就職して研究者として活躍しているが、今後は、専門的な研究をますます充実させるとともに、他の諸領域との活発なコミュニケーションが可能となるような柔軟な組織の構築が目指されねばならない。多くの在学生が海外に留学し、日本の芸術研究のために本講座で学ぶ海外からの研究者および留学生の数も年々増加している。このような状況に応じて、京都という歴史的および地理的利点を生かつつ、古今の日本の芸術に関する国際的研究のための拠点へと発展して行くことも求められている。学会に関しては、本講座は、常に、美学会、美術史学会の運営に深く携わってきた。そして、2002 年以来、22 号を数えた『研究紀要』を継承した研究誌『京都美学美術史学』を発行している。

なお、本講座で非常勤講師として日本美術史を講じた源豊宗、および本講座出身でプリンストン大学教授を務めた島田修二郎は、それぞれ、1983 年、1991 年に、その卓越した美術史の研究業績により朝日賞を受賞した。また、1999 年には教授の佐々木丞平が、『円山應擧研究』によって、学士院賞を受賞している。これは本講座で研究に従事する我々にとって大きな誇りである。同時に我々は、伝統を継承、発展させていく責任の重さを改めて感じている。



長谷川路可模写「熾盛光佛菩薩五星図」（原画、897［唐乾寧4］年、敦煌出土、大英博物館所蔵）。大正末、留学中の澤村専太郎の指導下制作された。

（中村俊春記）

歴史文化学系

日本史学専修

日本史学専修は 1995 年の学部改組にともなってできたもので、もともと国史学講座と称し、二講座からなっていた。

第一講座は 1907 年 5 月、史学科の開設と同時に、内田銀蔵（1872－1919）を教授として発足し、9 月に開講された。内田は、得意とする分野は日本経済史・近世史であったが、旧来の事件史中心の政治史にとどまらず、広く歴史学を捉え、経済の動向や歴史理論にも深い関心を払っていた。この姿勢は後学に大きな影響を与え、のちに哲学・社会科学など隣接諸学の成果を生かしつつ広い視野から研究するという学風が開花することとなる。

1909 年 5 月には第二講座が設置され、三浦周行（1871－1931）が教授に就任した。中世史・法制史・古文書学を専門とする三浦は、大学の委嘱をうけて早くから研究・教育用の歴史史料の蒐集にあたっていたが、着任後も寺社・旧家の古文書・古記録の調査・蒐集を続けた。この努力は代々ひきつがれ、広範な史料の収集のうえに、地道に事実を確定しようとする実証主義の学風が形成された。

第一回卒業生が出た 1910 年の 12 月、学生有志が三浦の指導のもとに史料講読をめざして「読史会」を創設した。以後、この会は学会として発展し、毎年秋の大会に研究発表を行うようになり、一時期中断したものの、今日に至っている。またこの両教授の時代、内田の創意になる研究室制度が定着し、教官と学生が相互に自主性を重んじ啓発しあう伝統を醸成する基盤となった。

1919 年、内田が急逝した後、第一講座は西田直二郎（1886－1964）助教授と喜田貞吉（1871－1939）講師が分担したが、翌年西田が外遊し、喜田が教授に昇任した。喜田は該博な文献学的知識と遺物遺跡の精緻な調査をもとに、社会史的な研究を精力的に進めたが、1924 年に退官し、代わって西田が教授に任じられた。講座の第一期卒業生であった西田は、ドイツのカール・ランプレヒトの文化史に傾倒し、その方法を批判的に摂取して独自の文化史学をうちたてた。西田の文化史学は当時盛んになっていた文化史研究を大きく前進させるものであり、学界に多大な影響を与えた。ちなみに大正末年から急激に増加した学生も、政治史・制度史より社会史・文化史を専攻するものが多くなった。

1931 年に三浦が定年退官した後、第二講座は教授を欠いたままで推移したが、その間、中村直勝（1890－1976）助教授が学生の指導にあたり、古文書学や荘園研究にめざましい成果をあげた。また中村は三浦のあとをうけて、原本の蒐集と膨大な影写本の集成に尽力した。この時期、藤直幹（1903－65）助教授と柴田実（1906－97）講師もそれぞれ中世史と民俗史を担当している。

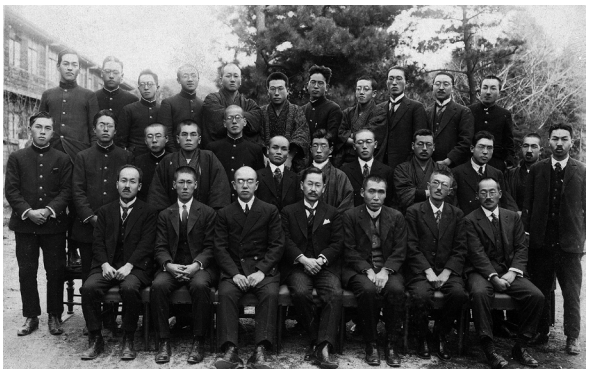
戦争の激化にともない、1943 年学徒動員が実施されると、研究室の諸活動も沈滞を余儀なくされた。さらに敗戦が追いうちをかけるように、本講座に激変をもたらす。46 年に西田が、ついで 48 年には中村が、それぞれ戦時中の言動を理由に公職追放に処せられたばかりでなく、同年藤が大阪大学に転出、翌 49 年には柴田も新設の教養部に移り、戦時中教壇に立っていたスタッフはすべて研究室を去った。

こうした危機のなか、講座の再建を委ねられたのが小葉田淳（1905－2001）であり、赤松俊秀（1907－78）が小葉田とともに尽力した。1949 年、東京文理科大学から第一講座の教授に転任した小葉田は近世史を講じつつ、中近世の貨幣流通史、明との通交貿易史や鉱山史の分野で、史料を博捜した実証的な研究を行い、大きな成果をあげた。51 年京都府教育委員会から移った赤松は、53 年に教授に就任し、第二講座を担当した。赤松は文化財に精通し、古文書に対する深い知識にもとづく厳密な分析を、鎌倉仏教史、荘園などの社会経済史や平家物語の研究で行った。研究室の自由闊達な雰囲気のもと、この時代戦後の隆盛が

もたらされ、各時代の研究を主導する多くの個性的な研究者が育った。また時代ごとの専門分化が進み、学生が専攻する時代を集中して研究するようになったのもこの頃からである。

小葉田が退官した 1969 年、助教授であった岸俊男（1920－87）が教授に昇任し、第一講座を担当した。岸は古代の籍帳・宮都・木簡などについて、斬新かつ鋭利な分析を行い、古代史の実証水準を一挙に引きあげた。教授昇任前後は学生運動の昂揚期にあたり、難しい決断を迫られる場面も多かったが、岸は主任教授として常に誠実に対応した。

1968 年、助教授に就いた朝尾直弘（1931－）は近世史を担当し、80 年第二講座の教授に昇任した。幕末期の研究から始めた朝尾はやがて対象を近世社会全般に広げ、織豊政権、鎖国、身分制や都市論などについて、卓抜な理論を踏まえた実証的な研究を行い、長く学界をリードした。一方、中世史は赤松が退官した 71 年以来、大山喬平助教授（1933－）が講じた。85 年教授となった大山は、荘園研究に力を注ぐとともに、中世の領主制・身分制と鎌倉幕府論に関する、斬新で独創的な研究を発表した。この時期 86 年に、長年の懸案であった文学部付属博物館の改築が実現し、創設以来蒐集されてきた古文書・古記録類は新館の収蔵庫に収納されることになった。これらの原本は 97 年、総合博物館が開設されるにともなって移管されたが、引きつづき研究室の研究と教育に広く供されている。なお、影写本は現在でも古文書室に架蔵されている。また岸の時代から増えはじめた留学生は、この頃ますます増加し、韓国・



1925 年 12 月 5 日読史会大会

中国からの学生も多くなった。さらに外国の日本史研究者を招聘外国人学者や共同研究者として迎えることも増え、その受け入れ機関としての役割も重要になってきた。

1995 年の文学部改組により、国史学講座は名称も日本史学と改められるとともに、実験講座となり、スタッフの充実も図られたが、その一方で長らく学生の指導にあたってきた研究室付きの助手は廃止された。98 年にスタッフは五人となり、それ以来、鎌田元一教授（1947－）と吉川真司助教授（1960－）が古代史、勝山清次教授（1948－）が中世史、藤井譲治教授（1947－）が近世史、そして高橋秀直助教授（1955－2006）が近現代史を、それぞれ担当してきた。ところが 2006 年正月に至り、高橋助教授が急逝した。突然のことであり、研究室にとっても大きな衝撃であった。現在は、残された四人で、広い視野に立った実証主義という独自の学風や学生の自主性を重んじる研究室制度などの優れた伝統を継承しつつ、新しい時代に即した研究・教育のあり方を模索している。

（勝山清次記）

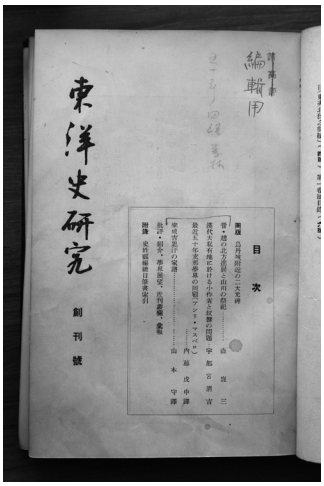
東洋史学専修

東洋史学専修は、1907－09 年の第 1 ～ 3 講座設置に始まる。中国史に東西交流史・北アジア諸民族史を加えた日本の「東洋史」は 1894 年、中等教育の科目として設置された。本専修は大学の専攻として日本最初の「東洋史学」である。

1907 年、内藤虎次郎（湖南）（1866－1934）講師が第 1 講座を担当、1909 年、教授に昇任、1908 年、富岡謙蔵（1873－1918）が講師となった（1918 年死去）。1909 年、東京高等師範学校教授桑原隲蔵（1871－1931）が第 2 講座教授に就任、羽田亨（1882－1955）が講師となった。新聞記者出身の内藤は、宋代以降を近世とする時代区分論を提起、経学・文学にも詳しく、漢詩文・書法を能くし、甲骨文・敦煌文書・清朝史料など新資料の公刊研究に務めた。「漢籍に強い」本専修の学風は内藤の「支那学」に由来する。対するに東大漢学科出身の桑原は、近代的学問としての「東洋史学」の確立に尽力した。中国文化史・東西交渉史を能くし、西方史料に加え日本人の得意な漢文を駆使した実証的研究手法は本専修の学風に受け継がれている。

1912 年、矢野仁一（1872－1970）助教授が来任、1913 年、羽田が助教授に昇任、今西龍（1875－1932）が講師となり、1916 年に助教授に昇任。1919 年、矢野が第 3 講座教授に昇任、第 1 講座古代史、第 2 講座中世史・北方史、第 3 講座近世史の体制となった。東大史学科出身の矢野は、近代西洋諸語に通じ、漢文も古文・吏牘・現代文ともに自在で、『支那近代外交関係研究』など外交史を中心に中国近代史に多数の著書がある。

1924 年、羽田が教授に昇任、地理学第 1 講座兼担の矢野と東洋史学第 3 講座を分担。1926 年、今西は京城帝国大学教授となり、本学教授を兼担。1926 年、内藤が定年退官、1927 年より矢野・桑原・羽田が第 1 ～ 3 講座を担当し、今西が朝鮮史を講じた。1929 年、第三高等学校教授那波利貞（1890－1970）が助教授に来任。1930 年、桑原が定年退官。1932 年、矢野が定年退官、今西が死去。1933 年、東洋史研究会創設、1935 年、会誌『東洋史研究』創刊、2005 年までに 64 巻が公刊されている。1934 年、第三高等学校教授宮崎市定（1901－95）が助教授に来任。1938 年、那波が教授に昇任。1940 年、田村実造（1904－99）講師が助教授に昇任。1944 年、宮崎が第 2 講座教授に昇任。1938－45 年の戦時下に第 11 代総長を務めた羽田は、東大史学科で白鳥庫吉（1865－1942）に学び、アルタイ系・イラン系諸語に詳しく、内陸アジア史全般の研究を開拓し、「生の材料」を用いる現地語主義を徹底した。この学風は、本専修内陸アジア講座および 1969 年開設の西南アジア史学講座に継承されている。1945－48 年、東方文化研究所所長を務め、人文科学研究所への統合を実現。1947 年、東方学会を組織し初代会長。1966 年、羽田記念館（現在の文学研究科ユーラシア文化研究センター）が開設された。



『東洋史研究』創刊号

1945 年の敗戦後、大陸との交流は途絶えたが、東洋史学は国策の羈縻を脱し、純粋な学問分野となった。戦後日本の歴史学界では、マルクス主義が高揚したが、本専修の文献史学・実証主義の伝統は堅持された。1947 年、田村が第 3 講

座教授に昇任。大阪外事専門学校教授宇都宮清吉（1905－98）が助教授に来任したが、翌年名古屋大学教授に転出。1949 年度から新制大学発足。1949 年、山口経済専門学校教授佐伯富（1910－）が助教授に来任。1953 年、那波が定年退官（主著『唐代社会文化史研究』）。1954 年、神戸大学助教授佐藤長（1914－）が助教授に来任。1957 年、佐伯が第 3 講座教授に昇任、1962 年、萩原淳平（1920－2000）が助教授となった。1966 年、宮崎が定年退官。宮崎は、内藤・桑原・矢野・羽田の学風すべてを受け継ぎ、その膨大な著作は『全集』に網羅されている。

1966 年 6 月、佐藤が第 1 講座教授に昇任。1968 年、人文研助教授竺沙雅章（1930－）が本講座助教授に転じ、田村が定年退官。田村は遼代史から北アジア史全般の研究に進み、『中国征服王朝の研究』など多くの著作・編著がある。現在、COE プログラムの一環として、1939 年に田村らが先鞭を付けた慶陵調査が再開されている。このころから大学紛争が激化し、研究室は荒廃を余儀なくされた。1974 年、佐伯が定年退官（主著『中国塩政史の研究』）。1975 年、人文研教授島田虔次（1917－2000）が第 3 講座担当教授に転任（1981 年定年退官。主著『中国における近代的思惟の挫折』）。1978 年、佐藤が定年退官（主著『チベット歴史地理研究』）、萩原が第 2 講座担当教授に昇任（1984 年定年退官。主著『明代蒙古史研究』）。名古屋大学教授谷川道雄（1925－）が第 1 講座担当教授に来任（1989 年定年退官。主著『隋唐帝国形成史論』）。1981 年、竺沙が第 3 講座担当教授に昇任（1993 年定年退官。主著『中国仏教社会史研究』）。1985 年、天理大学教授河内良弘（1928－）が第 2 講座担当教授に来任（1992 年定年退官。主著『明代女真史研究』）。1972 年の日中国交回復を経て、1980 年より中国の各大学が留学生を受け入れるようになり、本専修も留学生を送るようになった。また本専修への外国留学生もアメリカ・中国・台湾・韓国など常時 10 名程度を数えるようになった。

1987 年、夫馬進（1948－）が富山大学助教授より来任。1990 年、滋賀大学教授永田英正（1933－）が第 1 講座担当教授に来任（1997 年定年退官。主著『居延漢簡の研究』）。1992 年、杉山正明（1952－）が京都女子大学助教授より来任。1993 年、人文研教授礪波護（1937－）が第 2 講座担当教授に転任（2001 年定年退官。主著『唐代政治社会史研究』）。1995 年、夫馬・杉山が教授に昇任。1995 年度より、大学院重点化にともない、従来の東洋史学 3 講座・西南アジア史学 1 講座は東洋史学大講座となり、東洋史学は、中国古代中世史（永田）・中国近世近代史（礪波）・朝鮮史（夫馬）・内陸アジア史（杉山）の 4 講座に改編された。2000 年、中砂明徳（1961－）が神戸女子大学助教授より来任。2001 年、人文研助手高嶋航（1970－）が本専修助教授に昇任。2004 年、立命館大学教授吉本道雅（1959－）が中国古代中世史講座教授に来任。

（吉本道雅記）

西南アジア史学専修

西南アジア史学講座（現専修）は、西アジア・中央アジアの歴史と文化の研究・教育を推進するため、1969 年 4 月に開設された。イスラーム世界や古代オリエントという我が国ではなじみの浅い研究領域の開拓を目指す、全国でも唯一のユニークな講座である。本講座の開設、ならびに本講座の母体となった東洋史学講座西・南アジア史コースの開設（1957 年）は、宮崎市定（東洋史学）、足利惇氏（梵語学梵文学）、中原與茂九郎（西洋史学・教養部）らの尽力に負うところが大きい。これに加えて、本学部における桑原隲蔵や羽田亨（ともに東洋史学）の先駆的研究活動の継承という側面も指摘できる。現に本専修の学風は、桑原に見られる緻密な考証や羽田に見られる現地語史料重視の姿勢など、京大文献史学の優れた学問的伝統を確実に受け継いでいる。

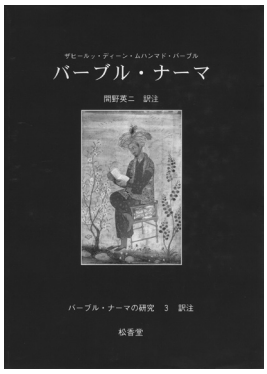
本講座草創期の 3 年間（1970－72 年度）主任教授をつとめたのが、羽田亨の子、羽田明（1910－89）である。羽田は我が国におけるイスラーム時代中央アジア史・トルコ民族史の文字通り開拓者であった。中央アジア史におけるイスラームの重要性を指摘した画期的論文「明末清初の東トルキスタン ── その回教史的考察 ── 」（1942）をはじめとする羽田の主要論文は『中央アジア史研究』（臨川書店、1982）に収められている。羽田の退官後、11 年間（1975－85 年度）主任教授をつとめたのが本田實信（1923－99）である。本田は我が国におけるイスラーム時代イラン史研究の開拓者で、特にモンゴル帝国期のイランを研究対象とし、モンゴル・イラン・イスラームの 3 要素に着目して明快な歴史像を提示した。『モンゴル時代史研究』（東京大学出版会、1991）に収められた主要論文のほかに、東方の動向にも十分注意を払った斬新なイスラーム世界通史『イスラム世界の発展』（講談社、1985）も著した。本田の後に主任教授となったのが間野英二（1939－）である。間野は 16 年間（1986－2001 年度）この任にあり、助教授時代を含めると、実に 30 年近く西南アジア史学担当教官をつとめた。間野の専門領域は羽田と同じくイスラーム時代中央アジア史・トルコ民族史であり、『中央アジアの歴史』（講談社、1977）によって、遊牧地帯とオアシス定住地帯の南北関係を軸に中央アジア通史を描き、学界に大きな反響を呼んだ。また、ティムール朝史の専門家として内外に知られ、特に、同王朝の王子バーブルが著した回想録『バーブル・ナーマ』の研究に邁進し、その成果を『バーブル・ナーマの研究』全 4 巻（松香堂、1995－2001）に結実させた。世界最良の校訂本を含むこの業績は、海外でも広く紹介され、日本学士院賞のほかにバーブルの故郷ウズベキスタンからの国際賞も受賞した。間野の後は 2005 年度より濱田正美が主任教授をつとめている。濱田は羽田・間野と同じくイスラーム時代中央アジア史の専門家であるが、あわせて聖者崇拝・スーフィズムやオスマン朝史学史に関しても欧文・和文のすぐれた研究業績をもつ。なお、羽田・本田は東京大学の卒業生であり、間野・濱田は本学部東洋史学の出身である。西南アジア史学出身者としては、久保一之が 1994 年 3 月より助教授の任にある。

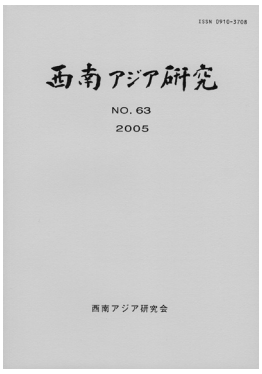
歴代教官の指導・育成方針は、研究の方向性やテーマに関しては学生の自主性を重んじつつも、研究成果に国際的なオリジナリティーを求めるがゆえに、二次文献ではなく、あくまで史料原典に基づいて研究を進めさせるという本格的なものであった。歴代教官の研究業績には原典研究の成果（テキスト校訂・史料原典訳注など）が含まれ、これらの専門家の指導のもとに史料読解力を磨く場として「演習」の授業が重視された。本田担当のラシードゥッディーン著『集史』の演習や間野担当の『バーブル・ナーマ』の演習は長らく本講座の名物であった。もっとも、授業カリキュラムを充実させるには、多くの非常勤講師の協力が必要であった。トルコ学の小田壽典や着任以前

の濱田正美、イラン学の勝藤猛や岡崎正孝らが長年授業を担当したが、特にアラブ史の森本公誠とシュメール史の前川和也（人文科学研究所）には、専任スタッフにも匹敵する貢献が認められる。森本はイブン・ハルドゥーン著『歴史序説』の訳注（岩波文庫）でも知られる日本を代表するアラブ史研究者であり、また前川は著作のほとんどが欧文という世界的なシュメール史研究者である。これら優れた講師陣による授業のほか、若手教員（助手・専任講師）や大学院生を中心に研究会・輪読会が活発に組織され、学生たちに鍛錬の場を提供するだけでなく、時には、史料原典の訳注というまとまった成果を発表してきた（アブー・ドゥラフ著『イラン旅行記』、ヒラール・サービー著『カリフ宮廷のしきたり』）。

分属学生数は、講座開設後十数年は毎年２～５名にとどまっていたが、1984 年度に７名、1990 年代以降は 10 名前後が分属される年も珍しくない。卒業生総数は開設から 35 年で約 160 名に達し、うち三分の一が女性で、その比率は近年さらに高まりつつある。大学院修士課程修了者（博士後期課程進学者を含む）もすでに 50 名を超えている。おおむね西南アジア史学を志す学生は、男女を問わず、活発で開拓精神に富んだ者が多く、かつて比叡山や愛宕山の山頂征服が新歓行事となっていた。酒豪揃いは久しく講座の伝統となっており、女子学生が増えてからも、歓迎会・送別会や大学院会主催の夏合宿などでの豪快なエピソードには事欠かない。就職先もマスコミ（新聞社・テレビ局ほか）、商社、中央官庁、金融機関、一般企業、高校教員、地方公務員など多岐にわたり、中には外務省をへて現在国会議員という卒業生もいる。1980 年代中頃からは学部在学中に現地に赴く者が増え、最近では短期留学をするケースも見られるようになった。

研究職を目指す大学院生の場合も、1990 年代以降、博士後期課程のうちに２～３年の海外留学を経験することが常識化しており、博士課程在学者全員が留学中で国内に一人もいないことさえある。これほどの留学の活発化は、歴代教官全員





間野英二『バーブル・ナーマの研究』第３巻：日本語訳注と『西南アジア研究』（表紙）

が留学経験（仏・英・米・ソ連など）をもつ国際派で、外国の学界でもよく知られていることや、卒業生の羽田正（現東京大学）・安藤志朗（1958－96）らが留学を機に国際的に目覚ましい活躍をしたことが、好ましい影響を与えたものと思われる。留学先としては、我が国の東洋学界に伝統的なヨーロッパ留学（仏・独・蘭・英）も見られるが、近年は、史料の調査・収集、現地体験・語学力向上を目的として、エジプト・シリア・イラン・旧ソ連・インドなど現地を選ぶケースが増えている。もっとも、1996 年度からの大学院重点化にもかかわらず、いわゆる課程博士号の取得者はいまだ５名にとどまっている。

本専修の活動に関連する施設としては、上述の羽田亨を記念した羽田記念館（内陸アジア研究施設、現ユーラシア文化研究センター）があり、歴代主任教授が主事をつとめ、卒業生が教務補佐員や助手として実務に携わってきた。年２回の定例講演会では西南アジア史学関係の講演が行われることが多く、1990 年代に同講演会の国際化が進んだことは本専修の貢献であろう。また、上にも述べた本専修関係者を中心とした研究会・輪読会は、西南アジア史学研究室とならんで、羽田記念館でも頻繁に開催されてきた。

このほか、1984 年より、関連学会の西南アジア研究会の事務局が本専修におかれ、専任スタッフが中心となって、学術誌『西南アジア研究』（1957－71、1984－）を年２回刊行している。

（久保一之記）

西洋史学専修

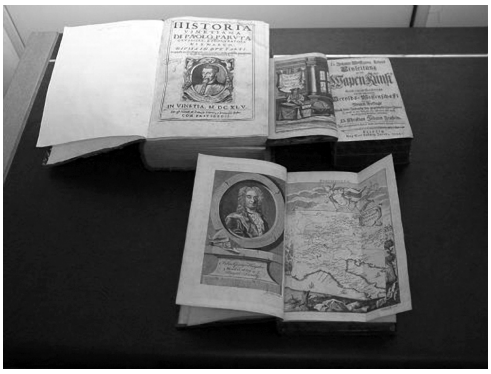
西洋史学の２講座は「史学地理学第１、第３講座」として 1907 年、1909 年に設置され、ともに東京帝国大学でランケの学統に属すリースの教えを受けた原勝郎、坂口昂の二人の教授によって定礎された。両教授ともリースの指導や留学経験から実証研究の重要性を認識していたが、日本の西洋史研究ではその実践は難しく、原の初期の著書は『日本中世史』（1906 年）や『東山時代における一縉紳の生活』（1917 年）であった。しかし同時代の事件として原が取り組んだ第一次大戦の研究（遺著『世界大戦史』、1925 年）は、原の政治問題への鋭敏な感覚をも示している。1912 年に留学から教授として帰任した坂口昂は徹底的にランケの精神を学んだが、その代表的著書『世界に於ける希臘文明の潮流』（1917 年）、『概観世界史潮』（1920 年）は、やはり実証研究ではなく独自の世界史的、文化史的考察であった。こうして西洋史学講座は、学風の異なる二人の指導下に着実な歩みを始め、今日まで続く「西洋史読書会」の例会も明治末年に、学生の発表を中心として始められた。原は 1925 年に病死し、この間京大の大学院で学んだ植村清之助が助教授となったが、坂口、植村も 1928 年に病没した。植村の遺著『西洋中世史の研究』（1930 年）は坂口らの著書とは異なり、日本における最初の実証的西洋中世史研究である。

ドイツ近代史専攻の時野谷常三郎助教授唯一人となった後は、考古学の濱田耕作教授が西洋史学の教授を兼任したが、1930 年には東北帝国大学から原随園が着任した。ギリシア史家、原は戦中、戦後の大学の研究・教育にとって多難の時代に 27 年間にわたって西洋史学講座を指導した。時野谷が没した 1942 年には鈴木成高が、翌年には井上智勇が助教授として着任し、太平洋戦争下で西洋史研究は逆風の時代を迎えていたが、講座の指導体制は充実した。中世史家、鈴木成高は大著『封建社会の研究』（1948 年）を著したが、いわゆる「京都学派」に属した鈴木は戦争遂行の理念的根拠づけを試みた言論により、1947 年に公職追放を受け、後に早稲田大学に移った。古代史家、井上智勇は『ローマ経済史研究』（1948 年）の他、キリスト教を含めた古代世界の幅広い研究を行った。この間にも「読書会」例会は隔月を原則として開かれ、学生や内外の研究者が参加し、1933 年からは学会形式の年次大会も始まる。例会、大会とも戦時中も中断なく続けられ、大会には常に 50 名を超える参加者があったと記されており、戦時中にも学内外には、時局に左右されない西洋史への広い関心があったことがわかる。ともあれ時に時局的問題や政治とも関わりつつ、厳密な政治史や経済史よりもむしろ、広義の文化史や文明史（さらには世界史）的視点を重視した点に京大西洋史の特質があるように思われるが、これは多少とも戦前の日本における西洋史学に共通することかもしれない。

終戦とともに民主化、近代化という課題意識や、マルクス、ヴェーバーへの理論的関心を共有する「戦後歴史学」の隆盛の下に、西洋史学も活況を呈した。しかしその主流となった東京の「大塚史学」に対し、京大西洋史学の近代史研究は、異なるスタンスをとっていた。1952 年に助教授となったフランス近代史専攻の前川貞次郎は、「市民革命研究」ではなく、19、20 世紀におけるフランス革命史研究の考察を通じて、同時代のフランス政治史、思想史を分析するというユニークな研究を行った。また前川が、ヨーロッパ中心史観の克服と世界史的な視点の重要性を夙に強調したことも、ランケの影響を、史料批判と実証よりも、世界史構築への動機づけにおいて受容してきた坂口、鈴木ら戦前からの京大西洋史の伝統と言えよう。1956 年に着任した越智武臣も、ジェントリを担い手とする近代イギリス社会の形成を総合的に考察し、その成果は戦後日本におけるイギリス史研究の一指針となった。新制大学発足にと

もなう西洋史のポスト増もあり、前川、越智らの下で学んだ多くの研究者が 60 年代以後、各大学で西洋史の教育、研究を行い、西洋史学の領野を広げた。このことは 1982 年に第 50 回の記念大会において、戦後の西洋史学の総括を行った読書会の隆盛にも現れている。なお 1959 年に助教授となったアメリカ史専攻の今津晃は、1967 年に新設された現代史学講座の教授に就任した。井上の後任、藤縄謙三は、ライフワーク、『歴史の父ヘロドトス』（1989 年）、その他のユニークなギリシア史研究により、やはり京大西洋史の幅広な文化史の伝統を担ったと言える。他方で前川の後任、服部春彦がフランス近世の海外貿易に関する精緻な実証研究を行ったのも、一国史的発展ではなく対外関係をも重視する、京大の比較近代化研究の特質である。仏文の中川久定、人文研の桑原武夫、河野健二、樋口謹一らとともに、前川、服部は「京大フランス学」の一翼を担った。

戦後の西洋史学講座は概ね古代、中・近世、近代史を担当する教官により構成されてきた。しかし学生、院生の研究テーマは西洋史学の性格上、極めて多様で、教官の指導は演習での報告や論文を対象としたものに限られ、基本的には「自学自習」に委ねられた。最近の 10 年では西洋史を志望する学部生は毎年 10 ～ 15 名と、一世代前に比して増えている。1995 年には「大学院重点化」にともなう改組で西洋史学は大講座化し、大学院生の数も倍増、課程博士の学位取得も慣例化しつつある。全般的な実証研究のレベル・アップにともない、近年では院生の大半が留学を経験する。しかし逆に多くの大学における改組・再編のなかで西洋史ポストは減少傾向にあり、未就職のオー



西洋史学の貴重書：フィレンツェ史（17 世紀）、紋章学（18 世紀）、旅行書 (18 世紀)

バードクターが増加するという厳しい状況が続いている。2001 年には、近代史担当の谷川稔、中世史の服部良久、古代史の南川高志の 3 教授に、ポーランド近世史専攻の小山哲助教授を加えて 4 教員体制となり、2002 年の読書会第 70 回記念大会には、西洋史学を中心とした COE プログラムの研究集会を兼ね、「歴史としてのヨーロッパ・アイデンティティ」と題するシンポジウムを行った。その成果は谷川編の同名の書物として翌年刊行され、好評を得た。また欧米の研究者を招いてのシンポジウムや講演会、ゼミナールが頻繁に催され、日欧の研究交流は本講座（専修）でも日常化している。谷川の退職により 2005 年度には 3 人体制に戻り、また重点化の際に、永年研究室運営の中心であった助手のポストが廃止され、研究室管理には院生の協力を得ているが、教員も様々な雑務に多くの時間をとられるようになった。しかし院生チームによる読書会大会の準備と運営、そして演習など重要な指導は、全教員が参加して集団的に行うという西洋史学講座の研究教育体制の伝統は、幸いにもなお維持されている。

（服部良久記）

考古学専修

本専修のもとになる考古学講座は、1916年、濱田耕作（1881－1938）が設立した。我国最初の考古学講座である。その後、梅原末治（1893－1983）、有光教一（1907－）、小林行雄（1911－1989）、樋口隆康（1919－）、小野山節（1931－）、山中一郎（1945－）が教授を務め、徹底した資料の観察と客観的記述にもとづく学風が築かれた。巷間では「考古学京都学派」の用語も流布しているが、歴代教授は各々きわめて個性的で、関心事や研究方法も異なる。徹底した資料観察という「学風」が共通し、一連の研究テーマを継承・深化した「学流」はあっても、「学派」「学閥」は作らなかったと言える。1996年、大学院重点化にともなう改組によって、「考古学専修」は先史学と考古学の二分野で構成されるようになり、先史学の山中教授が総合博物館教授に転任した後、2004年以降、泉拓良（1948－）が先史学、上原真人（1949－）が考古学の教授を担当し、現在に至っている。

初代濱田教授は、現在なお考古学入門書として定評のある『通論考古学』（1922年刊）の「後論」において、調査研究の集大成として、考古学的出版（調査報告書や研究書の刊行）、遺物遺跡の保存修理、博物館の三つを提示した。考古学的出版に関連して、濱田教授が始めた『京都帝国大学文科大学考古学研究報告』第1・2冊（1917・18年刊）と『京都帝国大学文学部考古学研究報告』第3－16冊（1919－1943年刊）が、一連の同じ体裁で、縄文時代の貝塚、弥生時代の甕棺墓や集落跡、装飾古墳、積石塚、新羅古瓦、平安時代－中世の磨崖石仏、近世初頭の切支丹墓などの幅広い分野の遺跡・遺物を報告し、各分野の調査研究方法を開拓した。この研究報告シリーズは、十五年戦争後は継承されず、以後、歴代の教官・教員や考古学研究室が実施した発掘調査成果は、各地の教育委員会などによる個別の出版物として公表された。そのなかには『大谷古墳』（和歌山市教委1959年刊）、『紫雲出』（詫間町文化財保護委員会1964年刊）、『丹波周山窯跡』（京北町教委1982年刊）など、学史上著名で、現在なお基準資料となる遺跡も少なくない。最近では、終戦直後に梅原教授・小林助手（当時）が実施した大阪府紫金山古墳の発掘成果が、現教員の吉井秀夫（1964－）助教授・森下章司（1963－）前助手（現大手前大学助教授）・阪口英毅（1971－）助手を中心とした考古学研究室関係者の努力により『紫金山古墳の研究』（2005年刊）として公刊された。

十五年戦争中、2代梅原教授は『京都帝国大学大学文学部考古学資料叢刊』を企画・編集・執筆し、第1冊『漢三国六朝紀年鏡図説』（1943年刊）、第2冊『支那漢代紀年漆器銘図説』（1943年刊）、第3冊『唐鏡大観』（1945・48年刊）を、また、終戦後には『京都大学文学部考古学叢書』を企画し、第1冊『法隆寺建築綜観』（浅野清著1953年刊）、第2冊『朝鮮磨製石剣の研究』（有光教一著1957年刊）、第3冊『朝鮮櫛目文土器の研究』（同著1962年刊）を刊行した。遺跡調査のモノグラフが主体だった研究報告シリーズに対し、考古資料の基礎集成や特定テーマの総合的研究を意図したものだった。

歴代教授やその薫陶を受けて大学や研究機関に勤務した研究者は、研究報告シリーズや叢刊・叢書の成果を批判的に継承し、各分野の考古学研究を深化させ、研究の基盤形成に貢献した。その学流は日本のみならず、中国、朝鮮、南アジア、中央アジアと広範な地域を研究対象とし、なかには、複数地域を股にかけた壮大な成果として結実したものもある。たとえば、研究報告シリーズ第9冊の『豊後磨崖石仏の研究』（1925年刊）の「後論」で濱田教授が示唆した中国・インドへと繋がる石仏の源流は、東方文化研究所（人文科学研究所の前身）の水野清一（1905－71）・長廣敏雄（1905－90）両教授による『雲崗』（全16巻、1951－

57 年刊)、樋口教授による『バーミヤン ── 京都大学中央アジア学術調査報告』(全 4 巻、1984－85 年刊）に継承・展開し、中央アジアと東アジアを結ぶ仏教文化と石窟寺院の軌跡を解明した。また、研究報告シリーズ第 12 冊の『讃岐高松石清尾山石塚の研究』(1933 年刊）は、同じ梅原教授が実施した一連の古墳の調査報告書『久津川古墳研究』(関信太郎 1920 年刊)『佐味田及新山古墳研究』(岩波書店 1921 年刊）などとともに、前・中期古墳研究の基礎資料となり、とくに石清尾山古墳群で提起された伝世鏡の概念は、その後、小林教授の古墳発生の歴史的意義、日本古代国家成立を論じた一連の研究へと継承・深化した。

濱田教授が重要性を指摘した博物館に関しては、京都大学が創設された 1897 年から構想があり、1914 年に文学部陳列館が竣工、3 次の増築を経て史学科各講座と美学美術史の文化史資料や文書を収蔵する施設として機能した。1959 年、陳列館は博物館と改称し、考古学研究室の所蔵品は『京都大学文学部博物館考古資料目録』第 1 部～第 3 部(1960、68、63 年刊)によって広く活用できるようになった。あらかじめ連絡すれば、展示室の見学は可能で、横山浩一（1926－2005)、小野山節、都出比呂志（1942－、現大阪大学名誉教授)、岡内三真（1943－、現早稲田大学教授）などの錚々たるメンバーが博物館助手の任に当たった。

しかし、建物の老朽化にともなう応急修理や部分改築では対応できず、1986 年、念願の文学部博物館新館が竣工。日本史や地理学の資料とともに、考古学研究室収蔵品の一般公開が実現する。菱田哲郎（1960－、現京都府立大学助教授）や森下章司が博物館助手の任に当たり、その実績を踏まえ、1997 年 4 月、文化史資料研究部門・自然史資料研究部門の二部門から構成される京都大学総合博物館が発足。考古学研究室の所蔵品は一括して総合博物館へ移管された。濱田教授が構想した大学博物館の一到達点である。

昭和 40 年代以降、高度経済成長にともなう国土開発は、一方で予想もできなかった質・量の考古資料をもたらした。かつて考古学関係書籍の図版などで不可欠だった京大所蔵の考古資料に代わる資料、あるいはそれ以上に良好な資料も多数出土している。これに対応して、文化財学、地域学、世界遺産学なども含めた考古学関連学科・専攻が各地の大学に設立され、考古学研究者は質・幅・層ともに厚くなった。各地の研究機関や都道府県市町村が実施する発掘調査も、単なる開発にともなう緊急措置ではなくなり、一つの遺跡の実態や性格をじっくりと極める方向に進化しつつある。そうしたなかでも、豊富な収蔵資料と発掘調査の実績をもとに、徹底した資料観察とそれに基づく研究という京都大学における考古学の学風は固持されるだろう。それこそが、考古学のもっとも基礎となる作業であり、次世代の研究者を生み出す源なのだから。

（上原真人記）

香川県詫間町紫雲出山遺跡にて

瀬戸内海に突き出た三崎半島の急峻な山頂にある紫雲出山遺跡は、弥生中期の高地性集落として著名。
上：1955－57 年の発掘調査当時の写真。有光教一・小林行雄・樋口隆康等の大先輩の顔が見える。
下：半世紀を経た 2005 年夏、京大考古学研究室旅行で整備された同遺跡を訪問した。

行動文化学系
心理学専修

心理学講座は 1906 年、京都帝国大学文科大学哲学科の創設と同時に設置された。初代教授は松本亦太郎であった。東京帝大で元良勇次郎教授に師事し、米国で学位取得後、欧州を視察し帰朝したばかりの松本は、京都に「新心理学研究の一中心」をつくるべく創設にあたった。授業が開始されたのは、心理学の第 1 回の専攻生千葉胤成によると 1906 年 9 月 25 日であったという。1909 年の第 1 回卒業生から続く 4 年間に 15 名ほどの卒業生を出しており、その研究は『芸文』や『哲学研究』に発表されている。1908 年 10 月に木造 108 坪の心理学実験室が落成した。実験室は山本治兵衛設計の最新設備を備えた立派なものであった。1910 年東宮（後の大正天皇）も京都帝大行啓の折視察され、松本教授が独自の精神動作学理論を検証するための実験などを供覧している。この建物は文学部東館建設のため 1964 年に取り壊されるまで、半世紀の長きに渡って心理学教室の研究教育の中心となった。写真は京大大学文書館の模型の一部を許可を得て撮影したもので、黒い矢印で示された建物が旧心理学教室である。その後教室は 1965 年東館に、さらに 32 年後の 1997 年現在の 8 階建ての新館に移動した。1911 年、野上俊夫は助教授となり、1913 年松本が東大に転任した後、1917 年に教授に昇任した。この頃までいくつかあった研究会は心理学読書会に統合された。読書会は中断期間があったものの現在も続いている。心理学教室の 90 年余の歴史は 1913 年から現在まで続く非公式な雑記帳「大福帳」に刻まれており、現在で 4 冊目となる。後年独自の固有意識の思想を展開した千葉は 1913 年講師となり、1917 年助教授に昇任したが、その後初代心理学教授として東北帝大に転任した。1915 年に野上は外遊するが、この間西田幾多郎が心理学講座を預かり心理学概論を講じている。1919 年に大学令が改正されて文科大学は文学部となった。同年、教室関係者が中心となり、本邦初の本格的な心理学専門誌『日本心理学雑誌』が創刊された。1922 年岩井勝二郎が講師に着任、1929 年助教授、1937 年教授に昇任した。1927 年心理学教室の出身者を中心に関西応用心理学会（後の関西心理学会）が創設され、1929 年には日本心理学会第 2 回大会（野上委員長）が文学部で開催された。1934 年には『実験心理学研究』が教室関係者により創刊された。1938 年園原太郎が講師に着任、1945 年に助教授に昇任した。1942 年野上教授が定年退官、1944 年矢田部達郎が教授として着任した。この頃戦況は厳しくなり講義中でも空襲警報が出ると文学部本館地下の学生控室に駆け込んだという。心理学実験室の建物も一部分取り壊され、学生は跡地に食料難の対策として芋苗を植えたという（梅本、2000）。

心理学教室の建物の模型

戦後になり、旧制の帝国大学は 1947 年に京都大学と改称された。同年『心理』が創刊された（日本心理学雑誌を含むこれら 3 誌はいずれも数年で廃刊）。1952 年には米国コロンビア大学の C.H.Graham 教授が来日、1 ヶ月に渡り京大文学部で京都実験心理学セミナーが開催された。このセミナーは戦後の本邦心理学の方向性に影響を与えた。1955 年には日本心理学会第 19 回大会（矢田部委員長）が開催され、研究活動もようやく軌道にのり出した。この大会を機に 1957 年には『心理学評論』が当研究室を中心として創刊され、現在まで続いている。2007 年には創刊 50 周年（50 巻）を迎え本邦心理学界に大きな足

跡を残している。心理学教室で産声をあげた上記 4 誌はいずれも学会の機関紙としてではなく、有志により自発的に創刊されたのである。1952 年、1955 年には本吉良治と柿崎祐一がそれぞれ講師と助教授として着任。1953 年には園原が教授に昇任した（1972 年停年退官）。1957 年の矢田部教授退官後は 1972 年に柿崎が教授に昇任した（1979 年停年退官）。1973 年には心理学第 2 講座が創設され本吉が教授に昇任した（1985 年停年退官）。1975 年には平野俊二、1982 年には清水御代明がそれぞれ助教授として着任し、平野は 1980 年、清水は 1986 年にそれぞれ教授に昇任した（平野は 1993 年、清水は 1999 年に停年退官）。1982 年には日本心理学会第 46 回大会（本吉委員長）が開催された。1987 年には苧阪直行が助教授として着任した。1980 年代からは京都セミナー、京都国際セミナーなどが不定期に開催されている。1992 年文化行動学科が新設され、心理学教室は 84 年籍を置いた哲学科から離脱した。これに伴い心理学第 1、第 2 講座はそれぞれ基礎心理学講座、実験心理学講座と改称した。1992 年には乾敏郎が助教授として着任、苧阪は 1994 年教授に昇任。1995 年に基礎行動学講座が創設されると同時に心理学大講座に移行し、学部は人文学科行動文化学系と改称した。乾は 1995 年教授に昇任したが、1998 年転出した。1996 年に大学院重点化により、基礎、実験、基礎行動の 3 分野からなる大学院文学研究科行動文化学専攻心理学専修となり、教官は学部から大学院に移籍し学部は兼担となる。これに伴い、学部は人文学科行動・環境文化学系と改称した。1996 年藤田和生が助教授として着任、1999 年教授に昇任。1999 年櫻井芳雄が教授として着任した。2000 年 11 月には日本心理学会第 64 回大会（苧阪委員長）が開催され、激動の 20 世紀が終わった。2000 年と 2001 年にはそれぞれ、板倉昭二と蘆田宏が助教授として着任し、2005 年現在教室のスタッフは苧阪（意識科学）、櫻井（神経科学）、藤田（比較認知科学）、板倉（比較発達科学）および蘆田（視覚科学）の 5 名である。2004 年 4 月から国立大学法人京都大学となり教官の身分は国家公務員を離脱した。教室の現況は http://www.kupsy.kyoto-u.ac.jp/jpn/ 参照。梅本堯夫氏の記録「京都帝国大学文学部哲学科心理学教室沿革史」（苧阪編著（2000）『実験心理学の誕生と展開』所収、京大学術出版会）には詳細な教室の人脈記が残されている。

（苧阪直行記）

言語学専修

言語学講座（現在は言語学専修、以下言語学講座と呼ぶ）の開設は 1908 年である。教授・助教授の 1 講座として 1996 年まで文学科に属した。1992 年に第 4 学科として文化行動学科が認められ、同時に定員増に伴い、言語科学講座が新設されて同学科に属した。1996 年大学院重点化にともない、この 2 つは統合されて言語学専修となり行動文化学専攻に属する、教授 3、助教授 1 の大講座となった。現在に至るまで、新村出（1909－1936）、落合太郎（1924－1946）、羽田亨（1913－24）、泉井久之助（1936－69）、西田龍雄（1958－92）、佐藤昭裕（1982－1996; 92－96 まで言語科学講座）、吉田和彦（1985－現在）、宮岡伯人（1994－2000）、庄垣内正弘（1996－2006）、田窪行則（2000 年－現在）、白井聡子（2003 年－現在）（（ ）内は在任期間、着任順）が教鞭をとってきた。このうち、羽田は 1924 年に東洋史の教授となり、佐藤は 1996 年大学院重点化にともなって新設となったスラブ語スラブ文学専修に移った。このうち、新村、泉井、西田、庄垣内は日本言語学会会長を務め、西田、宮岡、庄垣内、田窪、吉田は同学会誌『言語研究』編集委員長を務めている。

京都大学言語学講座の伝統にはいくつかの柱があるが、そのひとつは東洋文献言語学である。文献言語学とは文献の同定、解読、言語構造の記述、さらには一般言語学的な寄与をする分野である。この伝統は、新村から、一時期言語学助教授の任にあった羽田、さらには西田、庄垣内と受け継がれ、現在に至っている。羽田は、言語学講座を経て東洋史講座に移ったが、中央アジア全般に関する言語、歴史、仏教に通じていた学者で、本学における東洋語文献学の基礎を作ったと言える。西田は、西夏語の解読に代表される文献解読のみならず、現地調査にもとづく言語記述を行い、それによって文献言語学的記述を補った。それら両方のデータから、シナ・チベット、チベット・ビルマの諸言語の比較言語学的な研究を行い、文献言語学に記述言語学的手法を取り入れることで、この分野での飛躍的な発展に寄与した。庄垣内は、これらの伝統を受けて、ウイグル語仏典を中心とする文献言語学を発展させ、多くの文献の解読を行い、文献言語学的研究を行った。これら仏典の成立したところは多くの言語が行われた場所であり、その書写言語の成立過程において多くの言語接触を経ていることから、言語社会学的な観点を取り入れて研究・教育をしてきた。このような伝統のなかで、五体清文鑑、華夷訳語などの複数言語で記された対訳語彙集などの文献言語学的研究、朝鮮語文献学・書誌学、西夏語文献学、ソグド語文献学などにかんする多くの研究者を輩出し、また、文献言語学に通じた多くの記述言語学研究者をだしてきている。

今ひとつの柱は記述言語学である。言語の記述的研究は、現地調査にもとづいて対象言語の音声・音韻論、形態論、統語論を記述し、辞書を作成し、それらを総合的に活用したテキストと語彙集を準備する作業である。同時に発見された現象の記述と理論的位置づけにより、言語変化、類型論など言語理論へも寄与することを目的とする。本講座の記述言語学の基礎は、南島語の調査を行った泉井に始まる。泉井は、比較言語学、言語哲学を専門とする研究者であったが、南島語の研究のため、トラック諸島での現地調査をし、言語記述を行っている。西田は西夏語文献学、シナ・チベット比較言語学研究のため、文献言語学と並行して、タイ、ビルマでの現地調査を行い、その成果を文献言語学研究に積極的に取り入れるという手法をとり、記述言語学、文献言語学の相互発展に寄与した。言語学講座では、文献言語研究者も記述言語学の手法を確実に身につけることが要求され、言語記述を行う記述言語学研究者も文献言語学的手法を学び、それを利用することで歴史言語学、言語の書写法、言語接触等の知識を得て、記述研究

に役立てている。宮岡はユピックエスキモー語の研究者として世界的に著名であり、ユピックエスキモー語全般の記述だけでなく、民俗誌、文化全般について発言している。さらに、多くの少数民族の言語が絶滅の危機にあることから、文化多様性を維持すべく重点領域研究を立ち上げるなど、この分野での指導的役割を果たしてきた。この伝統の中で、インドネシア、アフリカ、パプアニューギニアにおける少数民族言語、エスキモーを含む北米インディアン語、ツングース語、マヤ語、など非常に多くの少数民族の研究者が輩出し、詳細な現地調査研究にもとづく博士論文が提出されている。

京都大学言語学講座の今ひとつの柱は経験科学としての言語学の実践である。これは言語理論とその実証としての実験、調査が含まれる。経験科学としての言語学の理論としては比較言語学、構造主義言語学、生成文法をあげることができるであろう。比較言語学は方法論として仮説演繹的手法をもちいる学問であり、すぐれて理論的な研究法である。初代教授であった新村は印欧比較言語学の手法を学び、それを応用していたし、泉井、吉田は印欧比較言語学の専門家である。この伝統は言語学講座に学んだ研究者に受け継がれ、多くの比較言語学者、および比較言語学の応用としての語源論などの研究者を輩出している。

泉井は、言語哲学、言語理論にも深い造詣があり、構造主義言語学、生成文法などの理解を持って、同時にそれらへの批判的な発言をしている。西田は、構造主義言語学の手法を調査言語の記述、言語変化の記述、文献書写言語の構造記述にいち早く取り入れ、記述方法の精密化に貢献した。この手法は庄垣内をはじめとする多くの研究者に受け継がれ現在に至っている。西田は 1970 年代から生成文法、意味論などの関する導入の講義や演習を行っており、このころから生成文法を専門とする研究者が育ってきた。京都大学言語学講座の卒業生で、欧米の大学で生成文法にもとづいた論文で博士号をとったものも多い。また、最近では言語理論を専門とする田窪の赴任により、生成文法に限らず形式意味論、認知意味論、談話理論など非常に幅広い分野の講義・演習が行われており、これらの分野に関する博士論文も提出されている。

言語学講座は、文献言語学、記述言語学、言語理論を 3 本柱としてバランスよく教育し、学部、大学院を通じ、これらを基礎として専門的研究に生かすような指導を行ってきた。これまで輩出してきた研究者の割合は 3 分野がそれぞれ 3 分の 1 となる非常に特徴のある講座となっている。同時に、演習・講義を通じて、かならず他分野の研究を理解するよう努力し、それらを批判的に吸収することで互いの研究を発展させるような教育・指導がなされ、それぞれの専門研究者は、他の分野に関する基礎的知識を持つバランスの取れた研究知識を持って育っている。

（田窪行則記）

社会学専修

社会学教室の歴史は文科大学創立の翌年、1907年5月の社会学講座設置をもって始まる。同年9月に米田庄太郎が講師として着任し、講義を担当した。米仏両国で高等教育を受けた米田は、卓越した博識と語学力を活かして欧米の社会学説・社会思想の研究に力を注ぎ、独自の社会学体系の構築につとめる傍ら、同時代の社会問題や社会運動を扱った著作を多数公刊したが、1920年7月に教授に昇進しながら定年を待たずに1925年3月に退官した。

米田の退官後、しばらく講座担当者不在の状態が続き、倫理学の藤井健治郎教授など哲学科の教授が交代で講座を兼担することとなった（この間、フランスの科学史家A. コイレが一旦後任に選ばれたが辞退している）。1927年4月に米田の門下生で3年前に京大を卒業したばかりの五十嵐信が専任講師に着任したが、在任わずか1年半にして病没した。

1929年4月、五十嵐の1年後輩に当たる臼井二尚が後任の専任講師となった。臼井は独仏米国留学を経て1932年7月に助教授に昇任、翌年4月から社会学講座担任となり、1944年9月に教授に昇任した。その後1963年8月の彼の定年退官にいたるまで、非常勤講師の時期も含めれば実に35年間にわたり「臼井時代」が続いたことになる。臼井は主として現象学的視点を取り入れた社会学方法論と基礎理論の研究に従事したほか、戦後は経験的研究にも取り組み、とりわけ教室の学生たちを動員して独自の集団類型論に基づく全国的規模の村落調査を実施した。なお、臼井の在任中の1952年には主に当教室の出身者からなる社会学研究会により専門誌『ソシオロジ』が発刊され、その編集室は創刊以来当研究室に置かれている。同誌の存在は、当教室が関西社会学会の事務局をしばしば引き受けていることと並んで、関西における社会学研究にとっての当教室の中心的役割を示すものである。

退官する臼井教授を囲んで（1963年）

1954年9月、池田義祐が助教授として来任し、1964年11月に臼井の後任として教授に昇任、1978年3月の退官まで講座を担当した。池田も臼井と同様に主としてドイツ系の社会学理論の研究とそれをベースにした農村・家族等の実証研究を行った。1959年4月には棚瀬襄爾が助教授として着任し文化人類学関係の授業を担当した。これは将来の講座増設を見越しての人事であったが、棚瀬は64年に急逝し、講座増設もこのときは結局実現せずに終わった。池田の後を次いで講座を担当したのは中久郎である。1966年4月に助教授として着任し、1991年の退官まで教室の発展に尽くした中は、主としてデュルケーム研究や共同性の理論的研究で成果を上げたほか、国会議員や戦時期日本社会に関する共同研究を組織した。この間、1975年に社会学講座の実験講座化が実現したのに続いて、翌1976年には大学院に比較社会学客員講座が設置され、併任の教授・助教授および助手のポストが新設された。

1986年に待望久しかった教室の2番目の講座として社会人間学講座が設置され、翌年1月に1980年以来助教授として来任していた宝月誠がその初代教授に就任した。宝月は相互作用論やシカゴ学派の研究と並んでとりわけ逸脱行動に関わる理論的・実証的研究で学界をリードする業績をあげた。次いで1989年4月、筒井清忠（歴史社会学）が社会学講座助教授として赴任し、1994年1月に教授に昇任した。1993年4月に

は松田素二（アフリカ地域研究・地域社会学）が社会人間学講座助教授として赴任し、1996 年 4 月には大講座化に伴って前年に新設された比較文化行動学分野の担当教授として井上俊（文化社会学・コミュニケーション論）が来任した。さらに 1998 年 4 月に社会学助教授として田中紀行（社会学史・歴史社会学）が着任し、教室は教授 3 名、助教授 2 名というかつてない陣容となった。また 1994 年には教室の紀要『京都社会学年報』が発刊され、主として大学院生の研究成果を発表する場となっている。

今世紀に入ってからは 2002 年 3 月に井上、2003 年 8 月に筒井、2005 年 3 月に宝月が相次いで退官し、代わって 2002 年 4 月に松田が比較文化行動学担当、2004 年には前年に助教授として着任していた落合恵美子（家族社会学・歴史人口学）が社会学担当の教授にそれぞれ昇任、2005 年 4 月には伊藤公雄（文化社会学・ジェンダー論）が社会人間学担当の教授として来任した。こうしてわずか数年でスタッフの顔ぶれが大きく入れ替わったほか、大講座化の際に振り替えられた助手ポストが 2001 年度には完全に消滅した。

なお、比較社会学の併任教授としてはこれまでに水野浩一（在任 1977－79。以下カッコ内は在任期間）、坪内良博（1982－94）、加藤剛（1994－2001）、高坂健次（2001－03）、岩井紀子（2003－）が、また併任助教授として新睦人（1979－80）、坪内良博（1981－82）、濱口恵俊（1983－85）、筒井清忠（1987－89）、落合恵美子（1996－2003）、秋津元輝（2003－05）、石田佐恵子（2005－）がそれぞれ大学院の授業を担当して現在に至っている（この講座は 1996 年の大学院重点化の際に客員講座の総合文化学講座に吸収され、それ以降教官の名称は客員教授・助教授となっている）。

最近の動きとしては、学内各部局に散らばっている社会学関係教員によるインフォーマルなネットワーク「京都大学社会学環」を 2002 年に立ち上げ、研究会の開催等を通じて従来希薄になりがちだった部局を超えた連携を強めることを図っている。また、2004 年度より社会調査士・専門社会調査士の資格を取得するのに必要な授業科目の開講が始まり、伝統的に手薄な分野であった計量的社会調査に関する教育に力を入れている。

実習での聞き取り調査（2005 年）

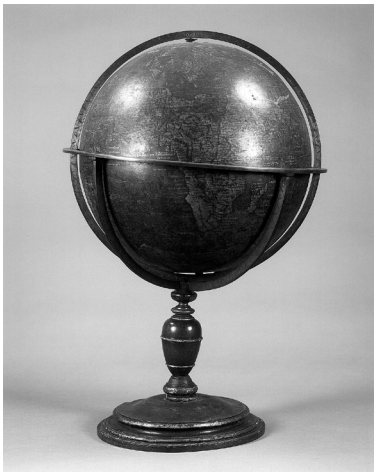
学生の動向について言えば、1990 年代以降、専攻希望者が増えて定員を超過する人数を受け入れるのが常態となり、30 名を超える新 3 回生を迎えた年もあって、教室は学部内で最大級の大所帯となった。また、かつて少数だった女子学生の比率が高まり、現在は学部生では男女ほぼ半数ずつになっている。重点化以降は学部学生以上に大学院生が急増するとともに、留学生の受け入れも活発になっている。この間、学生の研究テーマにも変化が見られ、（京大に限らない全国的傾向ではあるが）かつて盛んだった学説・理論研究を志す学生が今ではかなり少数になる一方、文化社会学・歴史社会学・地域社会学等の経験的研究が選ばれることが多くなっている。かつては「教えず、教えられず」といった自学自習の態度が教室の不文律になっていた（これは社会学の扱う領域の広さに比べて教員数が少なすぎたためでもあろう）が、今後は自由な学習環境の維持と並んで教員による専門的指導にも一層の努力が求められていくものと思われる。

（田中紀行記）

地理学専修

1907 年 5 月、日本の大学における最初の独立した地理学講座（史學地理學第二講座）として、史学科開設とともに地理学講座が創設された。小川琢治教授の着任が 1 年遅れたため、神戸高等商業学校の石橋五郎教授が、兼任助教授として講義を始めた同年 10 月が、実質的な講座開講となった。

地質学教室創設のために理学部教授に移られた小川教授の後、教室の運営や教育指導は、石橋五郎教授、さらに小牧実繁教授によって受け継がれた。しかしながら、第二次世界大戦の終戦を迎えた頃から、地理学教室は大きな危機に直面する。すなわち、1945 年 12 月から翌 3 月にかけて、戦時中の地政学への関与から、専任教官があいつぎ辞職し、教室スタッフが皆無となる事態に立ち至ったのである。教室が存続できたのは、東洋史学講座の宮崎市定教授のご尽力によるところがきわめて大きい。宮崎教授は地理学講座を兼任し、授業担当や学生指導にお骨折りくださった。その後、1946 年から本学の講師を兼ねていた織田武雄が翌 1947 年に助教授として着任し、地理学教室の再建に本格的に取り組んだ。再建期の困難は長く続いたが、1959 年、助教授水津一朗の着任によって、ようやく陣容を回復することができた。



教室所蔵の 16 世紀末イタリア製古地球儀

1990 年以降、一連の改組を経て、教室の体制は大きく変わっていった。まず、同年、應地利明教授の構想により、新たに地域環境学講座が開設され、翌年から、地理学講座との二講座体制が始まった。続いて、1992 年には、史学科を離れて行動文化学科に所属することになった。1994 年には、助手ポストが廃止されたが、1996 年、大学院大学への移行とともに、地理学大講座（地理学・環境動態論・地域環境学）として教授 3 名・助教授 1 名の構成が整った。現在、地理学教室の運営は、4 名の教員の他、総合博物館の助手（地図部門）の協力を得て行われている。

地理学教室の伝統は、自由で独創的な発想を尊重する教育と研究である。個性的な発想やフィールドワーク、新しい方法論・分析手法の積極的な習得を奨励し、現場で問題発見する鋭い観察力や新しい研究分野を開拓する柔軟な思考力を養うことを目標としている。学生たちの多様な研究関心に応えるべく教育・研究環境を整備することも教室の重要な使命であり、内外の古典・叢書、最新の研究図書や学術雑誌、地図類の充実に多くの予算を割き、GIS（地理情報システム）など、新しい解析機器類の整備にも力を注いできた。

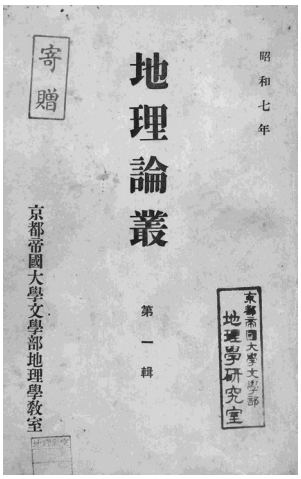
また、史学科の中に講座が置かれたため、史学分野の研究に接する機会に恵まれたことや、小川教授以来、理学部地質学教室と密接な関係が続いてきたこと、医学部教授による人類学の講義などが提供されてきたこともあって、社会科学、自然科学など多様な関連分野との交流が続いている。こうした環境もあって、個々の研究テーマや方法論、調査など、個性の際だった大勢の研究者が教室から巣立っている。地理学の中では、歴史学と地理学の接点にあたる歴史地理学や科学史の一部門ともいうべき地理学史をはじめ、人文地理学の諸分野の研究が盛んである。さらに、教室出身者から文化人類学、地域研究、地域政策学などの隣接諸科学で活躍する研究者を輩出してきたことも、大きな特色と言えよう。

海外との交流が活発化する契機となったのは、1957 年に、日本で最初に行われた地理学の国際会議であった。地理学教室は、この会議に際して企画された「古地図展」の開催に、所蔵する和漢の古地図を展示するなど、積極的に協力した。翌年、初めての外人教師であるアンドレ・ブリュネ講師を迎え、さらに 1959 年には、京都大学イラン・アフガニスタン・パキスタン学術調査隊に、織田教授や末尾至行助手が参加した。

以降、ほぼ隔年で外国人研究者や客員教授による講義を設定している他、1930 年に地理学教室にドイツ人留学生を迎えて以来、欧米、アジア、太平洋地域などからの留学生も続いている。とりわけ、1981 年から翌年まで留学された A. Kobayashi 氏が教授を務めるカナダのクィーンズ大学地理学科には、現在、本教室の卒業生が留学中であり、世代を超えて交流が続いている。また、近年は、長期・短期の海外調査も極めて盛んであり、教室スタッフや研究者となった卒業生たちだけでなく、学生・院生たちによる調査も珍しくない。

地理学教室による定期刊行物の出版は、すでに戦前期から行われていた。1915 年に始まった「史学地理學同攷會」による機関誌『歴史と地理』（1917－1935）、1924 年に小川教授らが中心となって創設した「地球學團」による『地球』（1924－1937）、教室の機関誌である『地理論叢』（1932－1943）の他、『京都帝国大學文學部地理學研究報告』（1937、1938）などが出版された。

戦後、教室出身者が中心的な役割を担ってきた学会に「西日本地理学会」（1946 年結成）、ならびに、それを発展させた「人文地理学会」（1948 年設立）がある。同学会は、現在では、会員、機関誌（『人文地理』）、活動、いずれの面でも、日本を代表する地理学の学会として、ゆるぎない地位を確立している。事務局は、創立以来、1984 年まで、長く本学の地理学教室に置かれていた。



教室で発行した『地理論叢』
第 1 輯（1932）の表紙

最後に、教室独自の組織である「地理学談話会」について触れておく。これは、1910 年 1 月、小川の教授の発案で、教官、卒業生、専攻学生によってつくられたものであり、外国新刊書の紹介や研究発表を行ってきた。戦後も随時、例会や新入生歓迎会、卒業生予餞会などを催して、同窓の研究や親睦に資している。現在は、秋の講演会と春の卒論・修論発表会に在校生と卒業生が集まる他、1990 年に復刊されて以来、毎年 5 月に発行されている談話会の会報は、教育、行政、マスコミ、一般企業などで活躍する 400 名を超える卒業生たちに郵送されている。「談話会報」には、卒業生たちからの寄稿もあり、同窓生と教室をつなぐ役割を果たしている。

（田中和子記）

現代文化学系

科学哲学科学史専修

本専修は、1993年4月、文化行動学科の一講座として設立された。設立に先だって主任教授の選考がおこなわれ、倫理学講座にいた内井惣七教授が就任することとなった（倫理学講座の後任が決まるまでの一年間併任）。まず学部教育が同年4月にスタートした。この専修の性格上、科学についての哲学的考察と歴史的考察を両輪として、どちらも欠かせないので、当初は非常勤の先生がたの助けを得て科学史関係の授業をおこなっていたが、1995年に科学史専門の伊藤和行助教授が就任して、ようやく本格的な教育研究ができるようになった。その後、文学部再編および大学院重点化により、当研究室は現代文化学講座に所属している。

科学哲学と科学史という研究分野は、何を目指すのか、また、なぜこのような分野の専修が文学部に設置されているのだろうか。こういった疑問がよく寄せられて、若い大学院生や研究者などはしばしば答えにとまどうようなので、まずこの疑問に答えておこう。わたしたちは今どういう時代に生きているのだろうか。言うまでもなく、高度な科学技術が生活のほとんどすべての側面に入り込んで、人々がその成果を享受しつつも、同時にそれがもたらす種々の問題をも抱え込んでいる時代である。科学は、文化であり、制度であり、知識と技術の母胎でもあり、というふうに、現代社会では欠くことのできないものとなっている。そこで、知識とは何だろうか、知識の助けを借りつつ、この世界でいかに生きていくべきかという哲学の問いかけは、現代では科学と関わる部分がきわめて大きくなっていると言わなければならない。したがって、「知識とは何か」「知識と単なる臆説とはどう違うのか」といった哲学の問いは、現代では、大部分、「科学とは何か」「科学と非科学はどう違うか」という科学哲学の問いに置き換わる。科学的知識の本性を、単なる一般論ではなく、科学の具体的な分野ごとに立ち入って明らかにし、科学の営みに関わる社会的、倫理的問題まで含めて広く見渡す科学哲学の必要性が、このようにして生じるわけである。当研究室では、現在のところ、(1) 論理学および情報論関係の研究、(2) 物理学の哲学、とくに空間時間の哲学、そして (3) 生物学の哲学という三つの研究グループができており、いずれも、人数は必ずしも多くないが、異分野の研究者との交流も含む活発な研究活動をおこなっている。そのほか、科学の倫理（核兵器問題や優生学など）についての研究実績もあって、創設以来12年余の浅い歴史しか持たないにもかかわらず、当研究室は国内外を通じてユニークな地位を築いてきた。そのことは、この分野で最も大きな組織である「論理学、方法論、科学哲学」の国際学会で、1996年から現在に至るまで、当研究室の主任教授がプログラム委員あるいは役員として継続的に貢献してきたこと、あるいは1999年以来 *Philosophy of Science* 誌の編集委員に入っていることを見てもわかるはずである。

他方、科学は歴史的に発展してきたことも見逃すわけにはいかない。17世紀の、いわゆる近代科学の成立以来、科学はすでに400年あまりの歴史をもち、多くの分野に枝分かれしてきた。「科学的知識の本性」を言うからには、科学的営みの実態をまずつかむ必要がある。これは、「言うは易く行うは難し」の好例である。各分野での教科書の初めに書いてあるようなものはとても「歴史」とは言えない。実験や観察のデータを欠いた主張が科学的だとは言えないのと同様、歴史的なドキュメントを踏まえていない記述は、科学史とは言えず、単なる「受け売り」や無責任な「伝説」にすぎない。科学史は、歴史学の手法をきちんと踏み、科学文献の内容の理解とともに、人文学の方法に則って行われるべき研究分野である。原典解読（17−8世紀の科学史はラテン語が必須）、時代考証を踏まえた学説史は基本中の基本であり、

この作業を抜きにしての、欧米での流行に追従するだけの研究紹介は慎むべきである、という姿勢で当研究室は一貫してきた。当研究室の科学史研究の特色は、ガリレオ前後からの力学形成史、ルネッサンス期の研究、医学史、情報理論の歴史、あるいは 18 世紀から 20 世紀にかけての物理学史や生物学史などである。とくに、伊藤助教授は、ガリレオ研究で国際的な活躍をしているだけでなく、20 世紀の新しいところもカバーできるのが強みである。また、内井教授にも、ダーウィン研究、アインシュタイン研究、あるいは確率論の歴史に関する研究などがある。

このような研究と教育を行う当研究室が、なぜ理学部ではなく文学部にあるのだろうか。一つの理由は、設立時の事情によるが、それは本質的ではない。これまで簡単に説明した研究内容を見て少し考えればわかるように、こういう研究を論文や書物にして発表したとして、そういった業績は「科学の業績」と見なされるものではなく、科学についての論考、科学の歴史についての論文となって、科学論文とは次元の異なる領域――哲学あるいは歴史学――に入る。もちろん、現役の科学者がこういった問題に関心がないというわけではない。しかし、そんな問題に首をつっこんで脇道にそれようものなら、現代では間違いなく「科学者失格」となって職にありつけない。だから、餅は餅屋、それを専門として追究する研究者が必要となって、科学哲学者や科学史家は、文学部で職（数は少ないが）にありつけるという仕組みになっている。その意義は決して小さくはなく、科学の専門分野で立派な業績を上げた高名な先生がたが、退職後にかねてから興味のあった科学哲学科学史の研究も掘り下げてみたいといって、われわれの講義を聴講に来てくださることも珍しくはないのである。

当研究室では、1997 年以来、ウェッブサイトを開いて、研究室関係のニュース、研究室メンバーの研究紹介や研究論文、科学哲学科学史関係の研究動向、学生院生諸君の研究や授業関係の多数の教材などを随時掲載している（多くは英文）。とくに科学哲学関係では、海外の研究者からも高い評価を受けている。この短い紹介文の何十倍、何百倍の情報が提供されているので、是非ごらんいただきたい。

http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/phisci/

（内井惣七記）

情報・史料学専修

情報・史料学専修は、最初の教員である私（林）が 2005 年 4 月に着任したばかりである。2005 年秋の現在、京都大学文学研究科・文学部の中では、一番新しい研究・教育分野であろう。そのため、伝統ある京都大学文学部の中にありながら、百年史に記すに足る歴史はない。そこで、ここでは、私が、この専修の、どのような歴史を作りたいと思っているか、いささか場違いな文章になる危惧を抱きつつも、その抱負とでもいうべきものを記したい。

日本政府は情報分野を戦略的に重要な分野とみなし、長年にわたって集中的な投資を続けている。しかし、ハードウェア分野や、ゲーム・ソフトなどのエンターテイメント系を除く、日本の情報系の技術力・国際的競争力は、一般に思われているより遥かにみすぼらしいものなのである。私が、このことに気づいたのは、盛んに世界中を飛び回っていた、ちょうどバブル期直前から、バブル期のことだった。そのころ自動車工業に続き、情報産業でも日本が世界を席巻するのだという掛け声のもとに、第五世代コンピュータプロジェクトというものが世間の話題になっていたことを御記憶の方もあると思う。日本が最も「元気」のあった時代で、世界中がこのプロジェクトを熱い視線で見ていた。しかし、プロジェクトの末端に参加していた私の目には、とてもそんなにも立派なものには見えなかったのである。

このプロジェクトに限らず、当時の海外では、日本の「元気さ」に目を奪われた人々が日本の「情報業界」を過剰に評価していた。学術振興会の在外研究員として滞在したエジンバラでは、同じアパートの住人に、カシオのデジタル腕時計を見せられ、こんな時計をこんな価格で作る国の学者が、何故スコットランドまでコンピュータの研究にくるのかと質問されて返答に窮した。スタンフォード大学計算機科学科では、計算機科学のプロから、同じような質問を浴び、ハードウェア分野は、それなりに優秀でも、日本のソフトウェア分野は、お粗末なものであると説明しても、日本人特有の謙虚さだろうと微笑み返されるだけで納得してもらえないという経験もした。バブル期に、繰り返し、こういう経験をした私は、なぜ、ハードウェアでは「強い」日本が、ソフトウェア部分では弱いのか、そういう大きな疑問を持つようになった。そして、これらの経験が、科学技術社会学的な研究をはじめる最大の原因となったのである。

情報学を人文・社会科学的アプローチで研究するという事例は少なくない。インターネットが社会に何をもたらすのか、携帯電話が若者の行動や心理をどう変えていくか、そういう問題についての書籍や論考は巷に溢れているとさえいえる。しかし、それは IT 技術の存在を与えられた前提とする議論である。つまり、情報技術が「公理」であり、その帰結を考察しているのである。私が目差している研究にも、もちろん、そういう議論は不可欠なのであるが、「情報技術の帰結」の研究では、「なぜ日本のソフトウェアが弱いか」は、まったく説明がつかない。このような研究は、私の研究にとっては、最終的な目的を達成するための手段の役割しか果たせない。このほかの人文社会系の情報学としては、次世代の情報技術のあり方を研究するというアプローチも存在する。つまり、社会が情報技術に望むもの、あるいは、その可能性を探求するという研究である。これは、先ほどの「情報技術の帰結」研究に比較すると、私の疑問により密接に関連しているが、その未来像が予測できたとしても、それに日本がおいていかれたとしたら、どうだろうか。この種の研究は、社会的には極めて重要な研究ながら、私の疑問には答えてくれないのである。

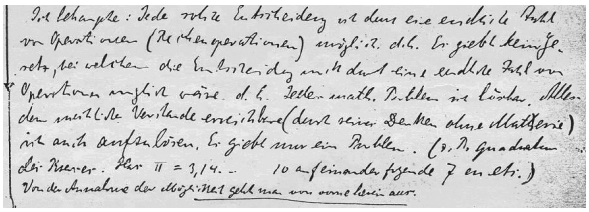
私が目差している「情報学」は、情報技術を「公理」として捉える研究でもなければ、未来の情報技術を予測する研究でもない。私が情報・史料学専修の教育・研究を通して目差しているものは、

情報技術を、より普遍的・根源的なものの帰結、あるいは「現れ」として捉え、その「普遍的・根源的なもの」を同定することにある。そして、これをある程度明らかにした上で、未来の情報技術について予測を立て、また、現代・未来の情報技術の「帰結」を考察することにより、さらに、その「根源」の姿を明らかにすること。以上が私の目差していることである。

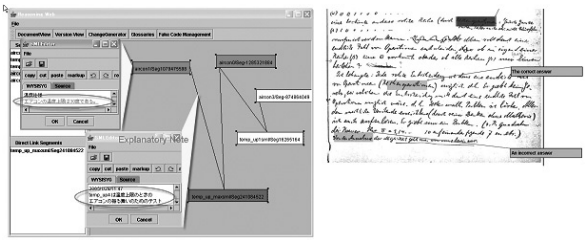
現在のところ、私は、この「普遍的・根源的なもの」を、西欧文明的合理性に求めている。情報技術は、狭い意味では、社会学者マックス・ヴェーバーの合理性理論の用語でいう「形式合理性」を電子的・力学的機械により実行するための方法だというのが、私の持論である。90 年代ころまでのソフトウェア工学の基礎理論は、多かれ少なかれ、形式合理的思考法で作られており、ソフトウェア開発法には「形式的技法」という形式合理性を連想させる名称を有するものもある。しかし、情報技術の普及と進歩により、すさまじい勢いで変化するようになった現代社会は、「形式合理性」だけでは到底乗り切れない状況にまで到達してしまったらしい。最近のソフトウェア開発法で強調されるのは、形式合理性ではなく、構築すべき情報システムの利害関係者（stakeholders）が持つ目的や価値の分析の重要性なのである。形式合理性が現代的合理性の究極の形であると認めるにしても、急速に変化する環境の下では、それは完成した時にはすでに陳腐化している。また、現代社会の複雑性は、完全な形式合理的なシステムを作ることを容易に許さないのである。

そのため、情報機器での処理に適合するという意味では形式合理的と呼ぶべきシステムが、目的や価値の検討のように、ヴェーバーが別種の合理性（価値合理性、目的合理性）として分類したものをも取り込みながら、アメーバのように形を変化させながら生き残っていくという現象が見られるようになっている。このようなシステムが蠢く世界は、ポスト・モダン思想の、ある意味で「静的」な世界観より遥かにダイナミックなものであり、むしろ、英国の社会学者アンソニー・ギデンズが描き出した世界像に適合する。そして、その一つの典型である情報システムは、それを「利用する」組織そのものと同一化し始めているのである。そのため、情報技術という切り口を通して、現代社会を見ることは、現代社会の極めて重要な一側面を見ることになる。そして、情報・史料学専修の最終的目的とは、このこと、つまり、情報という切り口を通して、現代社会を見ることなのである。

（林晋記）



研究中の「数学理論の形式合理化を成し遂げた数学者 D. Hilbert」の手稿



右：Hilbert の手稿を北大 Transmedia で分析。
左：Transmedia ベースの歴史研究用ブラウザの元となる林研究室の RW ツール。

二十世紀学専修

高校生や1・2回生を相手に専修ガイダンスをすると、「二十世紀学専修は、なにをとりあつかうところなのですか」という質問がよくとんでくる。大学業界外の人からはもちろんのこと、他部局・他大学の方々からも、この手の質問をよく受ける。そりゃわかりにくいでしょうね。私自身からしてそうだったのだから。「二十世紀学専修」なるものが設立されると聞き及んだのは、私が静岡大学に勤務していた頃だが、いったい何なんだそれは、と思った記憶がある。面と向かって問いただされることはさすがにないが、京都大学文学部の先生方のあいだでも、この専修の実態はいささか不明なのかもしれない。私が現代史学専修の卒業生（1979年学部卒）ということもあるのだろう、同じ業界にいる同窓生から、「現代史学研究室のなかに二十世紀学があるわけ？」と尋ねられることさえある。悪意のない質問だろうから、「いや逆で、二十世紀学専修に付属して現代史学があるんです」と応じて、私は誤解の拡大をひそかに愉しんでいる。

専修設立の理念をまとめるとこうなる――「20世紀に入り人類は、世界レベルでの都市化・工業化と、経済と文化の情報化・国際化のうねりに直面している。この激動のなかで、国民国家体制や社会的規範の枠内に埋没しがちだった民族集団やジェンダーなどによる異議申し立てが顕現化しつつある。人文・社会科学の諸分野は、それぞれ懸命にこの局面に対処しようとしている。しかし、20世紀が創出したこの激流は、前世紀に起源を有する多くの人文・社会科学の個別的対象を越えた波動を内包していると思われる。したがって、20世紀の全貌を新たな位相からとらえ、その分析と体系化を試みる、いわば20世紀そのものを研究対象とする新しい学問領域の開拓が強く要請されている。20世紀学と名付けるべきこの新分野は、必然的に人文科学の既存の研究手法を総合した新しい研究分野となろう」。ただし、現代文化学講座内に設置されている他の三専修との差異という観点からいうと、「20世紀世界の特徴的位相を思想的・文化史的手法によって解明する」ことが二十世紀学専修の役割である。

ながなが引用したのは、10年前の学部改組に際して作成された設置要求書の、やや難解な文面である。翻訳すると、ようするにこうだ。20世紀に入って急激に進んだグローバリゼーションを視野に入れる新しい研究分野を創設しなければならないが、法学部や経済学部などとは違い思想や文化にこそ目を向け、既存の優れたディシプリン（歴史学、社会学、文学、哲学など）の方法論を摂取しつつ横断的で総合的なディシプリンをめざす、これが二十世紀学専修である。

この理念に沿った教育・研究がおこなわれてきたのか、それは外部からの評価に待つしかないだろう。ただ、このような理念を掲げる専修に多くの学生が分属し、卒業していったことは事実である。フランス文学研究者で、NHK論説委員でもあった柏倉康夫先生が着任されて二十世紀学専修がスタートしたのは、1996年の春だった。1999年3月に最初の学部卒業生8名、修士修了1名を送り出して以降、私が着任した2002年4月を経て、2005年3月までのあいだの7年間で、学部卒64名、修士修了11名を数え、博士学位も1名が取得した。卒論・修論・博論の内容は、専修の理念を反映して多様である。分類は困難であり、それほど意味のあることでもないだろう。共通しているのは、これも専修理念の反映なのだろう、どれも斬新なことである。なかでもとびきりのものを一つ紹介しよう――「銀河の果てから鳴り響く――宇宙を目指した黒人音楽」（2002年度卒業論文）。中身の出来不出来については、この場で言及するのは不適当だろう。

二十世紀学専修は、教授1名のみの小専修で、しかも分属学生数が比較的多いということもあり、手厚く配分してもらっている非常勤講師と客員教

授、そして現代史学専修からの支援を得て教育を展開してきた。4 種類の既存ディシプリン（歴史学、文学、社会学、現代思想）による講義をほぼ毎年展開すると同時に、「20 世紀世界の特徴的位相を文化的手法によって解明する」ために、映像メディア論とマンガ・アニメ論も開講してきた。

映像メディア論は、山登義明客員教授の担当で 2003 年度から始まった。映像に関わる多様な問題を学生自身が主体的に発見できるよう、実際に学生たちがドキュメンタリー番組を制作する、という点にこの講義の特色がある。5 分間程度の作品（写真参照）がこれまで 10 本制作され、映像による「思考の画一化」などの問題点が論議されてきた。また、映像作家を志す者も受講しているようである。

マンガ・アニメ論も、映像メディア論とおなじく 2003 年度から始まった。これは毎年、異なる非常勤講師によって展開されており、固定した方向性をまだ持っていないが、マンガ史・アニメ史ではなく、今のところ表現論・産業社会論に軸足を置いた授業展開がおこなわれている。

2004 年度最優秀作品「徹底調査　京大の水」

2005 年度最優秀作品「百萬遍　貴女に会ひたい･･･」

（杉本淑彦記）

現代史学専修

現代史学専修は1966年4月に開設された。文科大学が京都帝国大学に設置されてからちょうど60年目にあたる。100年の歴史をもつ文学部の中では比較的新しい専修に属するが、しかしそれでも設立以来、すでに40年が経過し、送り出した卒業生は350名の多数にのぼる（2006年3月末）。また、大学院修士課程の修了者は62名、博士課程は39名である（いずれも2006年3月末）。ちなみに、1996年以降に課程博士を授与されたものは8名をかぞえる。

現代史学専修の40年の歩みは、文学部の改組（大講座化）と大学院重点化がおこなわれた1995、96年をさかいに、前半30年と後半10年に区切ることができる。前半は、史学科に属する現代史学講座・専攻の時代であり、後半10年は新設された現代文化学大講座の中の現代史学専修の時代である。前半30年の現代史学講座については、『京都大学百年史』部局史編一に詳しく記述されているので、そちらを参照していただきたい。

史学科時代には、教授1、助教授1、助手1のスタッフに学部学生の学年定員が10の小規模講座であったが、現代文化学系時代になってからも、教授2、助教授1、学生定員10と、専修の大きさに大きな変化はない。1995年以降の定員配置は、現代史学分野に教授1、助教授1、現代日本論分野に教授1となっている。専修名は、重点化後しばらくは現代史学・現代日本論であったが、2004年の法人化を機に、現代史学専修に戻した。以下に、歴代スタッフのリストを掲げておく。

教授　今津　晃（1966－81）
　　松尾尊兊（1981－93）
　　紀平英作（1993－　）
　　永井　和（1995－　）
助教授　松尾尊兊（1971－81）
　　紀平英作（1983－93）
　　永井　和（1995）
　　小野澤透（1999－ ）
助手　豊永泰子（1966－72）
　　紀平英作（1972－76）
　　島田真杉（1976－79）
　　永井　和（1979－85）
　　杉本淑彦（1985－89）
　　野村耕一（1990－93）
　　松田利彦（1993－96）

これ以外にも、多数の総合人間学部、人間・環境学研究科のスタッフや人文科学研究所のメンバーの方々の協力をあおぎつつ専修の教育・研究を進めてきたが、1996年以降は、協力講座（現代文化論、歴史文化論）に属する人文科学研究所の狭間直樹、勝村哲也、佐々木克、森時彦、水野直樹、高木博志の各氏に専修運営の一翼を担っていただいてきた。

現代史学専修に学んだ学生、院生の研究テーマはじつに多種多様である。19世紀末から20世紀初頭にかけてロンドンで流行したヴァラエティ・シアターからペルーのフジモリ政権まで、アメリカ、日本はもちろん、中南米、西欧、中東欧、ロシア、アフリカ、イスラム圏、インド、東南アジア、中国、台湾、朝鮮・韓国と世界のあらゆる地域が対象であり、とりあげられる問題も広範囲にわたっている。

これは、設立以来の伝統となった現代史学専修の学問理念のあらわれにほかならない。現代史学は歴史学の一分野だが、19世紀に成立した国民史的な歴史学とは明確に一線を画している。20世紀は、地域や国家を越えた地球規模での一体性が深まり、グローバルな人類社会が相互に密接な相関性をもって、その歴史を展開してきた。文字どおり世界史の時代であった。地域別区分の中でタテの時間連鎖に着目する歴史研究だけでは、この有機的な世界史的連関を十分に把握できない。もちろん国家・民族システムは厳然として存在しており、その境界が社会、文化あるいは世界政治

の大きな枠組となって機能しているのは事実である。しかし同時に、各々の国家・社会は、国境や地域の区分を超えて広域的に行き交う物、人、情報の流れにたえずさらされており、世界的規模の政治的・社会的動向によってつねに影響を受け、変容を迫られている。その相関的相互作用を十分に把握せずして、現代世界の歴史的ダイナミズムを解明することは不可能である。

対象を世界史に求め、つねにグローバルな「比較」や「相関」の視点を忘れない。また歴史を動かす大きな要因として、国家の範囲を越えた種々の社会的、文化的、経済的さらには科学的・技術的動向に注目する。これが現代史学専修の学問理念であり、その反映として、かくも多種多様な研究テーマの選択がみられるのである。

さらに補足しておけば、故今津教授、松尾教授、紀平教授が常に強調してきた実証的歴史研究の重要性を忘れないことも専修の学問の特徴である。現代史をいかなる思想傾向を持って考えるにしても、あくまでも史料に即して議論すべきであり、広範な史料収集とその厳密な解読の上にそれは構築されなければならない、これがわが専修のモットーである。

専修が中心となって運営している学会に現代史研究会があり、1993 年に第 1 回の会合を開いて以来、毎年 7 月に研究報告の学会を開いている。また、二十世紀学専修と共同で雑誌『二十世紀研究』を 2000 年 12 月に発刊し、2005 年 12 月には第 6 号が刊行された。

現代史研究会のひとこま（於芝蘭会館、2001 年 7 月）

史学科時代の共同研究室は、助手と院生の相部屋であり、東館 4 階の北西隅の狭い一室であった。1997 年に文学部の新館が完成すると、現代文化学の他専修とともに 8 階の大部屋に移動した。現代文化学の 3 専修が共同してネットワークの整備に力を注いだ結果、現代文化学共同研究室の IT 環境はきわめて快適である。現代史学専修のより詳しい情報は、以下の URL を参照されたい。

http://www.bun.kyoto-u.ac.jp/contemporary/

（永井和記）